小松市内遺跡発掘調査報告書 XI

二ツ梨豆岡向山窯跡群

小　松　城　跡

薬　師　遺　跡

本　折　城　跡

2015. 3

石川県小松市教育委員会

例　言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者は次のとおりである。

【二ツ梨豆岡向山窯跡群】（平成 17 ～ 21 年度）
[調 査 地] 石川県小松市二ツ梨町
[調査原因] 個人農地
[調査面積] 2,267m^2
[発掘調査] 2005. 7.21 ～ 2005.10.17（260m^2）
2006. 9.19 ～ 2006.12.12（640m^2）
2007.10. 2 ～ 2007.11.30（280m^2）
2008. 9. 1 ～ 2009. 3.18（487m^2）
2009. 9. 1 ～ 2009.12.11（600m^2）
[調査担当] 大橋由美子

【小松城跡】（平成 24 年度）
[調 査 地] 石川県小松市丸の内町
[調査原因] 共同住宅
[試掘調査] 2011.11. 4 ／ 2011.11.10
[試掘担当] 岩本信一
[調査面積] 160m^2
[調査期間] 2012. 5.11 ～ 2012. 6. 5
[調査担当] 川畑謙二、横幕 真

【薬師遺跡】（平成 24 年度）
[調 査 地] 石川県小松市矢崎町
[調査原因] 個人住宅
[試掘調査] （Ⅸ次）2012. 3. 9
（Ⅹ次）2012. 7.12
（Ⅺ次）2012.11.12
[試掘担当] 岩本信一
[調査面積] （Ⅸ次）44m^2
（Ⅹ次）172m^2
（Ⅺ次）50m^2
[調査期間] （Ⅸ次）2012. 4.10 ～ 2012. 4.17
（Ⅹ次）2012. 8.20 ～ 2012.10. 1
（Ⅺ次）2013. 2.14 ～ 2013. 2.15
[調査担当] （Ⅸ次）宮田 明
（Ⅹ次）横幕 真
（Ⅺ次）横幕 真、下濱貴子

【本折城跡】（平成 24 年度）
[調 査 地] 石川県小松市白山町・大和町
[調査原因] 個人住宅
[試掘調査] 2011. 6.19
[試掘担当] 岩本信一
[調査面積] 275m^2
[調査期間] 2012. 7.11 ～ 2012. 8.30
[調査担当] 宮田 明

4. 発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
5. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 26 年度に実施した。
6. 遺構の実測及び写真撮影は、各発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、各執筆担当者が行った。
7. 本書の作成は、第Ⅰ・Ⅴ章の執筆と編集を宮田が担当し、以下、第Ⅱ・Ⅳ章の執筆を横幕、第Ⅲ章の執筆を川畑が担当した。
8. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市教育委員会で一括保管している。

凡　例

1. 本書に示す座標は平面直角座標Ⅶ系、高度は標高（T.P.）で表示し、世界測地系に準拠している。小松城跡と本折城跡は「測地成果 2011」、ほかは「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1
Ⅱ　二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2（遺構編）… 13
Ⅲ　小松城跡発掘調査 …… 43
Ⅳ　薬師遺跡Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ次発掘調査 …… 64
Ⅴ　本折城跡発掘調査 …… 76
写真図版 1 ～ 20
報告書抄録

第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

１　市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km^2 を測る。南は大日山（1368m）で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳（1174m）を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣７町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後２次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

第1図　小松市の位置

２　加賀三湖と月津台地

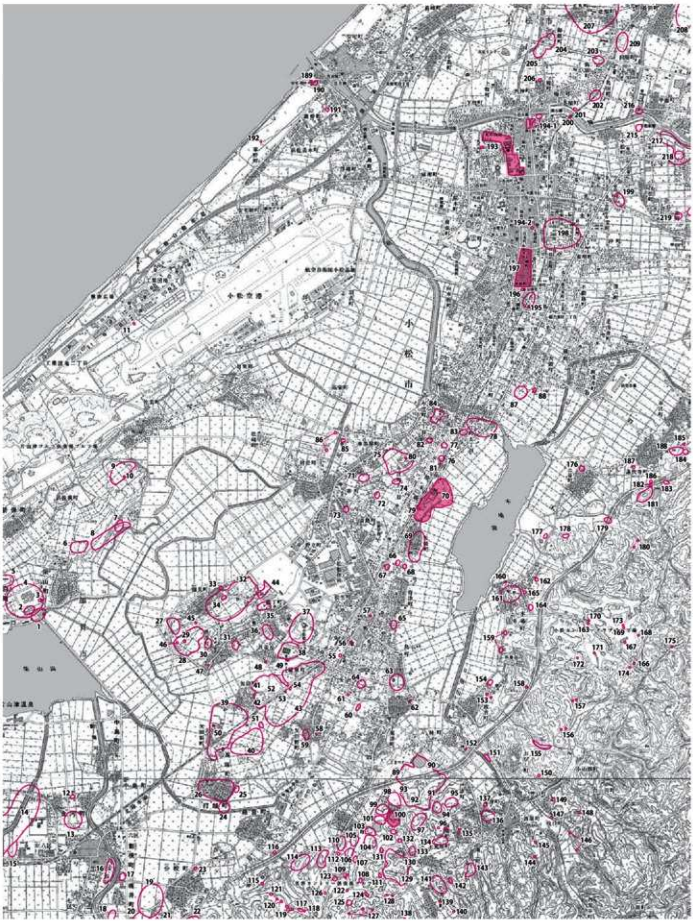
小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には５～ 10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約３分の２が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図２は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

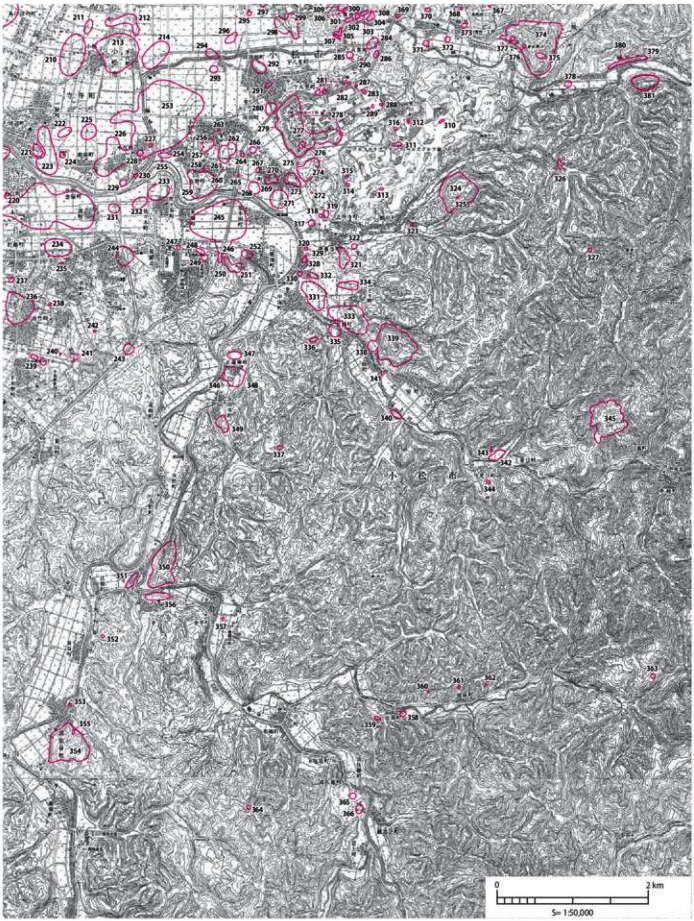
第２図　小松市の地形

３　梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



第３図　遺跡分布図


0
2 km
S=1:50,000

れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第 2 節　歴史的環境

1　旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A ～ F 遺跡（300 ～ 305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A ～ D 遺跡や宮竹うっしょやま A･B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2　弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂（たかんどう）遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3　古　墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では臼のほぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4　古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6 世紀以降 8 世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7 世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7 世紀代の月津台地では、額見町遺跡（32）の発掘調査以降、矢田野遺跡（43）、薬師遺跡（70）でＬ字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8 世紀、在郷の財（たから）氏関連遺跡とされる佐々木遺跡（231）が異彩を放つほかは、概ね盛期が 9 世紀後半～ 10 世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図 3 には中宮八院（319、322、331、338、347、348、349、352）を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺（きよみずでら）跡（243）、八里向山Ｂ遺跡（301）、里川Ｅ遺跡（314）が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡（349）では、8 世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6 世紀前半には二ツ梨東山古窯跡（105）で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群（100）、二ツ梨殿様池古窯跡群（101）で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10 世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7 世紀前半に八里向山Ｊ遺跡（地蔵谷古窯跡：309）で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群（図郭外）に操業の拠点を移動する。8 世紀前半には和気古窯跡群（図郭外）へさらに移動し、9 世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯 1 基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡（183）で製鉄に伴うと見られる製炭窯が 7 世紀後半～末ないし 8 世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡（いずれも図郭外）が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡（218）、漆町遺跡（220）は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡（漆町遺跡：220）周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5　中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡（345）、波佐谷城跡（354）など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12 世紀末までには二ツ梨奥谷 1 号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に 14 世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したとされている。

6　近世～現代

1640（寛永 17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が理蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では 19 世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第 1 表　遺跡地名表

No	名　称	種　別	時　代	備　考
1	柴山赤武江塚	貝塚	縄文	
2	柴山中田墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一谷A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山赤武遺跡	貝塚	弥生	柴山出村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山出村遺跡（A地点）	集落跡	弥生	
	柴山出村遺跡（B地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	出の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美浦塚	経塚	不詳	
11	江本経塚	経塚	不詳	
12	谷内遺跡	散布地	不詳	
13	新橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	新橋遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	新橋遺跡	墨塔跡	中世（室町）	
17	板川高生センター遺跡	散布地	古代	
18	板川遺跡	散布地	古代	
19	分校A遺跡	散布地	古墳	
20	分校B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校北古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分校ケン山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3，円墳10，方墳6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	行延A遺跡	散布地	縄文	
25	行延B遺跡	散布地	弥生	
26	行延城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	福田町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茅石山A遺跡	散布地	不詳	
	茅石山B遺跡	散布地	縄文	
29	茅石山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
30	川津才ケ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	川津A遺跡	散布地	古代（奈良）	
32	堀尻町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
33	堀尻神社前A遺跡	散布地	古墳	堀尻町遺跡の一部
34	堀尻神社前B遺跡	散布地	縄文	堀尻町遺跡の一部
35	郡町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	川津町遺跡	散布地	縄文・古代	
37	忠弘林遺跡	集落跡	縄文	
38	忠弘林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田町遺跡	集落跡	古代（奈良）	
40	刀郎堂遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
41	矢田A遺跡	散布地	縄文	
42	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	石の迫墓古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	大門横古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2段構成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	忠弘塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	忠弘林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室、家形石棺
51	鳶森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田野塚古墳群	古墳	古墳	円墳14、前方後円墳3、不明1、木芯粘土室
53	古入塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳3、前方後円墳1
55	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	鶴巻塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	羽津山古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石横穴式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
60	下梁津A横穴群	横穴墓	不詳	横穴7～8
61	鳥越塚	経塚	不詳	
62	下梁津B横穴群	横穴墓	不詳	横穴2
63	鳥渡跡	集落跡	弥生～中世	
64	鳥B遺跡	散布地	古代	
65	鳥C遺跡	散布地	古墳	古墳？
66	羽津A遺跡	散布地	縄文	
67	羽津B遺跡	散布地	縄文	
68	羽津C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	**薬師遺跡**	**集落跡**	**古墳～古代**	
71	市カンノヤマA遺跡	散布地	古代（奈良）	
72	市カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	市カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	鳶山遺跡	集落跡	古墳	
76	土谷遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎坪貝塚	貝塚	縄文	
79	矢崎B古墳	古墳	古墳	
80	鳶山古墳	古墳	古墳	
81	土谷古墳	古墳	古墳	
82	鶴巻塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴4
84	鶴巻塚城跡	城郭跡	中世	土豪之南端の一部
85	市古遺跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	瓦古窯
87	大知遺跡	散布地	古代	
88	浅井畑古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡（林タカヤマ古墳群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林オオヤミミダニ古墳群）	生産遺跡	古墳	須恵器窯2、土師器坑1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡（林製陶跡）	生産遺跡	古代（平安）	製陶炉2、製陶窯4、廃棄坑2、鞴製品2
91	戸津シ・12号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯2、南加賀古窯跡北群
	戸津シンデザワ製陶跡	生産遺跡	古代（平安）	製陶炉4、製陶窯3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世（鎌倉）	須恵器窯36（瓦陶兼窯5）、土師器坑19、製陶窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
				須恵器窯7、製陶窯1、南加賀古窯跡北群
93	戸津八字ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯2、製陶窯1、南加賀古窯跡北群
94	戸津1号窯跡	生産遺跡	古代（平安）	製陶窯
	戸津ワラダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製陶炉1、製陶窯1
95	戸津ニッカダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯1、製陶炉1、南加賀古窯跡北群
96	戸津2号窯跡	生産遺跡	不詳	製陶窯
	戸津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製陶窯
97	戸津オオヌニ遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯2、製陶炉1、南加賀古窯跡北群
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須恵器窯12、土師器坑28、製陶炉1、製陶窯2、南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨江崎山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須恵器窯4
100	**二ツ梨西向山古窯跡群**	**生産遺跡**	**古墳～古代**	**須恵器窯12（瓦陶兼窯2）、南加賀古窯跡北群**
101	二ツ梨柳瀬池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（平安）	須恵器窯（瓦陶兼窯）3、土師器坑3、南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨ケエノホバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑4、須恵器窯、南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨向山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯3、南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨西山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯8、南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯5、南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨福重遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1、製陶1、製陶窯1、南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨福川遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯1、製陶1、南加賀古窯跡北群

No	名　称	種　別	時　代	備　考
108	二ツ梨東谷遺跡群	生産遺跡	古代（平安末）	須恵器窯2，加賀窯1，南加賀古窯跡北群
109	二ツ梨谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	二ツ梨谷2号製鉄跡	生産遺跡	古代	須恵器窯6（高陽東窯1），南加賀古窯跡北群
111	二ツ梨カモイ谷遺跡群	生産遺跡	不詳	須恵器窯2，南加賀古窯跡北群
112	知田野山古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯6，南加賀古窯跡北群
113	知田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯4，加賀窯2，製鉄3，南加賀古窯跡北群
114	菊沢ドウガヤ谷遺跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯6，加賀窯2，南加賀古窯跡北群
115	菊沢A遺跡	散布地	中世	
116	菊沢B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯2
118	小天王谷1号製鉄跡（天王山1号製鉄跡）	生産遺跡	不詳	製鉄1
119	小天王谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	都谷1号窯跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯
123	知田野カチクダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	知田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	都谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	都谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	都谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上荒屋ユルイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯4，製鉄3，南加賀古窯跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯4～5，製鉄2，横穴1，地下式坑1，南加賀古窯跡北群
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代（奈良）	須恵器窯4，南加賀古窯跡北群
132	上荒屋カダシ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯2，南加賀古窯跡北群
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須恵器窯1，加賀窯1，製鉄炉1，南加賀古窯跡北群
134	上荒屋オンマヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯4，製鉄炉1
135	戸津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世（室町）	
137	戸津八幡神社遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋都谷1遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯1，製鉄炉1，南加賀古窯跡北群
140	馬場ヌニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
142	上荒屋赤ジュウウヤマ遺跡	生産遺跡，社寺跡，墳墓	古代（平安）～中世	須恵器窯5，製鉄炉2，墳墓，南加賀古窯跡北群
142	上荒屋ハカンタニ古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯2
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世（鎌倉）	加賀窯10，製鉄炉2
144	西原アルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカチクダ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
146	牧口ホドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
147	牧口中世墓跡	墓墓	中世（鎌倉）	牧郷城址近地
148	山口田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	用口田製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	用口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	用口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世（鎌倉）	
153	津波倉ホットタ遺跡	横穴墓	中世（室町末）	地下式坑6，2基調査
154	大谷山岩塚	岩塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	縄津散布地
156	小山田スボト平製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
157	小山田ケサザニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1，製炭窯複数
159	本場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	本場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
161	池田遺跡	城館跡	不詳	
162	本場屋敷遺跡	散布地	縄文	
163	本場A遺跡（本場遺跡対地区）	生産遺跡	古代（奈良）	製鉄炉1，製炭窯2
164	本場B遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
165	本場C遺跡	散布地	弥生	
166	本場遺跡A地区（1号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製炭窯3，縄津散布地
167	本場遺跡B地区（2号遺跡）	生産遺跡	古代（平安）	製鉄炉2，製炭窯2
168	本場遺跡C地区（3号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
169	本場遺跡D地区（4号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉1，製炭窯1
170	本場遺跡E地区（5号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
171	本場遺跡F地区（6号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄
172	本場遺跡G地区（7号遺跡）	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	本場遺跡H地区（8号遺跡）	横穴墓	不詳	横穴1
174	大曲遺跡	散布地	不詳	縄津散布地
175	長谷観音堂の古遺跡	散布地	不詳	縄津散布地
176	谷遺跡	散布地	縄文	
177	二谷B遺跡	散布地	弥生～古墳	
178	二谷D窯谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	二谷大谷遺跡	製鉄跡	古代～中世	
180	二谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1，縄津散布地
181	瀧台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
182	瀧代寺ムコンヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世（鎌倉）	製鉄炉1，製炭窯1
183	瀧代寺ガッショウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯3，縄津散布地
184	瀧代寺A遺跡	散布地	不詳	縄津散布地
185	和江古墳跡	生産遺跡	近世	製陶
186	瀧代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「瀧代寺窯」
187	瀧代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	鴻瓦窯
188	瀧台寺跡	社寺跡	中世	西山氏菩提寺「瀧台寺」比定地
189	安宅関跡	その他	不詳	和田定安跡
190	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
191	安宅中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
192	安宅古屋敷遺	不詳	不詳	縄石屋とも造石の群石とも，詳かせず
193	**小松城跡**	**城館跡**	**近世**	**本丸・二ノ丸・三の丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡**
194-1	大田遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・浜町の町屋跡

No	名　　称	種　別	時　代	備　考
194-2	東町遺跡	寺院跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	寺町遺跡	生産遺跡	中世（室町）	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世（室町）	埋蔵銅鏡十枚
197	**本折城跡**	**城館跡**		**本折氏居館跡伝承地の一**
198	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代（平安）	
200	福田鉄橋遺跡	散布地	弥生	福田に分断された右岸側包蔵地
201	福田鉄橋B遺跡	散布地	弥生	福田に分断された右岸側包蔵地
202	高田A遺跡	散布地	古墳～古代	
203	高田B遺跡	散布地	古墳	
204	御殿遺跡	城館跡	中世（室町）	
205	鶴塚遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蓮川新七郎垂髄居館伝承地
206	塚遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
207	柏梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
		集落跡	中世（室町）	
210	大長野A遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野B遺跡	散布地	不詳	
212	牛島河の島遺跡	集落跡	古代（平安）	
213	手代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウシン遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	平面福田遺跡	集落跡	弥生	福田に分断された左岸側包蔵地
216	平面福田B遺跡	散布地	弥生	福田に分断された右岸側包蔵地
217	江江福田遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	江江城跡	城館跡	中世（室町）	江江新助盛清居館伝承
219	江江遺跡	散布地	古墳～中世	浦町遺跡の一部
220	浦町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針B遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針C遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地居跡	社寺跡	中世（室町）	
225	手代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	手代オオキダ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳6
227	手代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	手代城跡	城館跡	中世（室町）	
229	手代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	荒代屋敷跡（条長）
232	佐々木ノドウウ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサバタ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉遺跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、遺同式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	吉竹B遺跡（吉竹遺跡19地区）	散布地	古墳	幅10道の堀跡
238	吉竹C遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千木野A遺跡	散布地	縄文	
	千木野B遺跡	古墳	古墳	方墳8
	千木野B遺跡	集落跡	古墳	
240	鵜生1号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代復元のみ
241	釜谷古墳・釜谷2号墳	古墳	古墳	切石横穴式石室
242	若杉オノボル山1号窯跡	生産遺跡	近世末	同東窯跡
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・国分寺西辺山麓寺院群の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代（条長）・中世（鎌倉）	
		その他の墓	古代（平安）	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳6、木芯粘土槨
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、八幡6号墳を転平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大谷I遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世（室町）	集石墓9
251	軽海座寺	社寺跡	古代（平安）	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代（平安）	西芳寺伝承地
253	古好しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古好遺跡	集落跡	古代（平安）	
255	古好ブランド遺跡	散布地	古代（平安）	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世（室町）	
258	古好横穴	不詳	不詳	
259	古好シマ遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
262	小野スボノキ遺跡	集落跡	古代（平安）	加賀国府推定地の一隅
263	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	福田野屋公の家屋	その他の墓	近世	福田野屋公の家屋に付属された墓とされる
265	旭日の出家	その他	近世末	芋虫の害虫防禦と駆除方法を記した石刊、小松市指定史跡
266	旭日ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	

No	名　　称	種　別	時　代	備　　考
267	旭田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
268	旭田ウラムラ遺跡	散布地	古代～中世	
269	旭田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世（室町）	
271	旭田遺跡	散布地	古代	
272	旭田塚	不詳	不詳	
273	旭田地山古墳群	古墳	古墳	円墳 9，木船遺跡，木芯粘土室
274	旭田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12，方墳 4
275	鎌井殿所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落，河田山 10 ～ 12 号墳が重複
		その他の墓	古代（奈良）	火葬墓，河田山 1 号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2，前方後方墳 2，円墳 22，方墳 34，不明 1，木船遺跡，木芯粘土室，短冊縄状式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式穴，河田山 54 号墳の南に隣接
278	河田山 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，建築古窯跡南群　八里・河田山支群，河田山 60 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯，建築古窯跡南群　八里・河田山支群
279	河田 B 遺跡	散布地	縄文・古代（奈良）	
280	河田 C 遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式穴 6，横穴 1，不明 1，3 地点で計 8 基
282	六郷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世（室町）	横穴 11 基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世（室町）	
285	上八里 A 遺跡	散布地	縄文・古代（平安）	
286	上八里 B 遺跡	散布地	古代（奈良）	
287	上八里 C 遺跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
288	上八里 D 遺跡	散布地	古代（奈良）	
289	上八里 1 号窯跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，建築古窯跡南群　八里・河田山支群
290	上八里 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯跡，建築古窯跡南群　八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田堀遺跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地蔵遺跡	散布地	不詳	
294	佐野 A 遺跡	散布地	弥生	
295	佐野 B 遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	佐野神社前遺跡	散布地	古代（平安）	
298	河田山古墳群	散布地	縄文・古代（平安）	
299	河田山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
300	八里向山 A 遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山 B 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代（奈良）	加賀国府・国分寺周辺法林寺院群の一
302	八里向山 C 遺跡	散布地	旧石器～縄文・古代（奈良）	
		集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳 1，木船遺跡
303	八里向山 D 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳 2，木船遺跡
304	八里向山 E 遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		古墳	古墳	方墳 1
		集落跡	古代	
305	八里向山 F 遺跡	散布地	縄文	
		古墳	古墳	円墳 10，木船遺跡
		その他の墓・横穴墓	中世（室町）	集石墓 1，横穴 3
306	八里向山 G 遺跡	散布地	弥生・古代（平安）	
307	八里向山 H 遺跡	その他の墓	中世（鎌倉）	集石墓群，96 基調査
308	八里向山 I 遺跡	生産遺跡	古代（奈良）	須恵器窯，建築古窯跡南群　八里・染谷支群
309	八里向山 J 遺跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯，建築古窯跡南群　八里・染谷支群
310	里川 A 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯 2，製炭坑約 20
311	里川 B 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川 C 遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川 D 遺跡	散布地	縄文	
314	里川 E 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺法林寺院群の一
315	里川 F 遺跡	社寺跡	古代（平安）	加賀国府・国分寺周辺法林寺院群の一
316	里川 G 遺跡	散布地	不詳	
317	逆泉寺・クボタ A 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
318	逆泉寺・クボタ B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	社寺（隠明寺）又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯（五輪塔窯）
319	立明寺古墳	古墳	古墳	古代窯跡の可能性も
	隠明寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院，複数ある伝承地の一
320	逆泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	河の畑環墓群	その他の墓	（平安）	墓墓 4，3 基調査，2 号墓は鎌倉時代に経塚に利用された？
322	浦泉寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院，複数ある伝承地の一
323	常徳寺跡	社寺跡	中世（室町）	一向一揆・宇田川焼地の宿泊地とも
324	鶴田城跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇田川焼地の迎撃伝承地
325	鶴田横穴	不詳	不詳	地下式穴？
326	弘大寺高松寺跡	社寺跡	中世	
327	弘大寺とうの川古墳	古墳	古墳	
328	弘生寺跡	社寺跡	中世	
329	弘生寺塚	経塚	中世	
330	ブッショウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳 2，木芯粘土室
331	中海 B 遺跡	集落跡	古墳～中世	
	「弘心」長徳寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院，地名伝承のみ
332	中海 C 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
333	中海遺跡・宮田遺跡	散布地	縄文	
	宮田上野遺跡	散布地	旧石器	

No	名　　称	種　別	時　代	備　考
334	芸賀中中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤蝦谷1遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明。5基陥口とされる
337	赤蝦谷スギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴9，地下式穴4
338	善興寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
339	宮西城跡	城館跡	中世	
340	広ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	広御前屋敷跡・広御前墓	その他の墓	古代（平安）	小松市指定史跡
342	荒1遺跡	散布地	縄文	
343	荒1中世墓跡	その他の墓	中世	
344	下荒1横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
345	宮倉城跡	城館跡	中世（室町）	
346	椎の木山遺跡	散布地	縄文	
347	浄願寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	瀧川寺跡	社寺跡	古代（平安）	中宮八院
349	松谷埋寺	社寺跡	古代（奈良）	8世紀前半に遡る古代山林寺院
	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
350	平野城跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・平野家品城伝承地
351	江指城跡（山神山砦跡）	城館跡	中世（室町）	
352	瀬尾寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
353	波佐谷遺跡	散布地	中世（室町）	
354	波佐谷城跡	城館跡	中世（室町）	一向一揆・平野只月遺言品城伝承地
	（伝）波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13，地下式穴5
356	八幡遺跡	集落跡	縄文	
357	麻奈屋谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世（室町）	
359	大灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
360	こだい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
361	子山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
362	浄城経塚	経塚	中世（室町）	
363	曽山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ前遺跡	散布地	縄文	ほたに寺院跡の伝承あり
366	観音下城跡	城館跡	不詳	
367	和気地山谷埋遺跡	生産遺跡	古代（平安）	土師器焼成坑，能美古窯跡南群　地山谷支群
368	和気地山谷2号窯跡	生産遺跡	古代（奈良末～平安）	須恵器窯，能美古窯跡南群　地山谷支群
369	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代（平安）	須恵器窯，能美古窯跡南群
370	和気岳世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和気矢江A遺跡	散布地	縄文	
372	和気広文屋遺跡	城館跡	不詳	
373	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯，能美古窯跡南群　地山谷支群
374	虎空蔵城跡	城館跡	中世	
375	虎空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺倉古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯，能美古窯跡南群
377	寺倉観音堂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓跡	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷城跡	城館跡	不詳	

参考文献

イ　石川県教育委員会 (1992) 石川県遺跡地図

石川県立埋蔵文化財センター (1986) 漆町遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 漆町遺跡Ⅱ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1988) 白江梯川遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅲ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 漆町遺跡Ⅳ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 白江梯川遺跡Ⅱ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ, 石川県小松市

石川県立埋蔵文化財センター (1990) 小松市高堂遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1995) 石川県小松市荒木田遺跡

石川県立埋蔵文化財センター (1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ, 石川県能美市

石川県立埋蔵文化財センター (1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ, 石川県能美市

(財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡, 石川県能美市
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
(財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
(社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
ウ 上野 與一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
小松市教育委員会 (1990) 二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. 二ツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡. 薬師遺跡 V 次, 石川県
小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県
小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶臼山古墳群, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶臼山古墳群 II, 石川県能美市
辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第Ⅱ章　二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査２（遺構編）

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

通算すると第３次となる今調査は、未調査だった丘陵南側斜面部分の果樹園（畑地）平地化事業に伴うもので、平成 16 年８月 16 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地（二ツ梨豆岡向山窯跡群）に含まれていたため、小松市教育委員会は８月 18 日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する旨を回答した。

試掘調査は 11 月 17 日～ 24 日に実施し、区域内に 13 箇所設定した試掘溝のうち８箇所で埋蔵文化財を確認した。３～４基の窯跡と灰原、及び土師器焼成坑の存在が推測され、11 月 29 日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。

協議の結果、５ヵ年に分けて調査を実施するとの結論で合意し、対象面積 5,460㎡のうち盛土保存区域を除く範囲（調査完了時 2,267㎡）を発掘調査による記録保存を講じるものとして、平成 17 年５月 10 日、平成 18 年８月 10 日、平成 19 年８月 31 日、平成 20 年８月５日、平成 21 年８月 12 日付けで、文化財保護法第 93 条に基づく発掘届及び発掘調査依頼が年度ごとに提出された。

発掘調査は、個人による農地改良・農地造成事業を原因とするため国庫補助事業として実施するものとし、協議の結果を平成 17 年６月 28 日、平成 18 年８月 30 日、平成 19 年９月 14 日、平成 20 年８月 18 日、平成 21 年８月 25 日付けで年度ごとに協定書を交換して確認した。調査着手後の経過は第４項で述べる。

２　既往の調査

本遺跡は分布調査による発見を経て、これまで２回に渡る果樹園平地化事業に伴う発掘調査が行われている。発掘調査の詳細は『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（小松市教委 2005）に記載されているため、そちらを参照されたい。以下に概要のみ記す。

⑴　昭和 52 年度詳細分布調査（小松市教委 1979）

国庫補助事業として小松市教育委員会が実施した。南加賀古窯跡群一帯の窯跡分布状況の把握が行われ、二ツ梨豆岡向山でも窯跡が発見された。分布図には今報告分の南側斜面で２基の窯跡がプロットされている（No.22：殿様池１号窯、No.23：殿様池２号窯）。

また昭和 60 年度に小松高校地歴部が行った分布調査で再確認され、新たに丘陵や谷筋を単位とした窯跡の把握が行われた（小松高・近間 1985）。それによれば、「二ツ梨マメオカムカイヤマ単位支群（FN － mm）」では、後述する昭和 58 年度発掘調査で推定された１～３号窯と、４号窯（殿様池１号窯）、５号窯（殿様池２号窯）が整理されている。今回報告する４号窯と５号窯の名称についてはこの成果に倣っているが、窯の位置関係は若干ずれる。

⑵　昭和 58 年度発掘調査（小松市教委 1993）

国庫補助事業として小松市教育委員会が実施し、西側斜面裾部で須恵器窯跡の灰原を検出した。窯跡本体の調査には至らなかったが、３箇所の灰原を確認できたため、３基分の窯跡（１～３号窯）が存在していることが確定的となった。

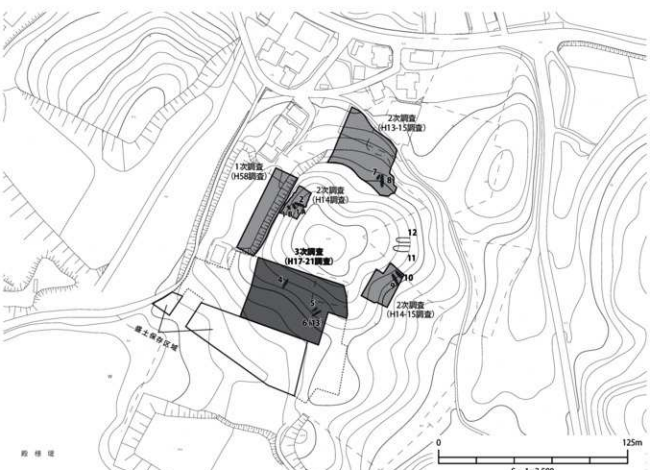
⑶　平成 13 ～ 15 年度発掘調査（小松市教委 2005）

国庫補助事業として小松市教育委員会が実施した。まず平成 12 ～ 13 年度に、南側斜面を除くほぼ全方位の斜面で試掘溝調査が行われ、9 基の窯体位置が特定できた後、本調査対象区が設定された。今回報告する 4 ～ 6 号窯もこの時の踏査で大まかな位置が確認された。なお、東側斜面で検出された埴輪併焼窯の 11 号窯と 12 号窯は保存区域とされた。西側斜面では昭和 58 年度調査地点より高所で 3 基の窯跡（1 ～ 3 号窯→ 1 － A 号窯、1 － B 号窯、2 号窯に改名）が検出され、当時の調査結果と符合した。このほか、北側斜面で 3 基（7 号窯、8 － I 号窯、8 － II 号窯）、南東側斜面で 2 基（9 号窯、10 号窯）が検出され、6 世紀から 10 世紀前半までの長きに渡る窯業生産の痕跡が明らかとなった。

3　調査の方法

調査区域は A ～ E、A'、E － I 、E － II 、E － III の 9 区に分け、5 ヵ年計画で調査を実施した。各年度では概ね人力による除草作業と表土除去作業の後、区域内の遺構精査を行った。基準杭（4 級基準点）は業者委託で A 区北側に 2 点設置し、4 号窯体主軸に沿って 5m × 5m のグリッド、灰原区域等には適宜 2.5m × 2.5m の小グリッドを設定した。

遺構精査後は人力で窯体及び周辺遺構を掘削し、順次、土層断面図や平面図の作成、写真撮影等の記録作業を行った。土層断面図は 20 分の 1、平面図は 20 分の 1 と 10 分の 1 を目安に作成した。写真撮影については、35mm フィルム一眼レフカメラでカラー・モノクロ写真を記録し、メモ用にコンパクトデジタルカメラを使用した。平成 18、20 年度には業者委託で空中写真撮影を実施した。



第 4 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　調査地位置図

4　調査の経過

⑴　平成 17 年度の調査

A 区

調査期間：平成 17 年 7 月 21 日～ 10 月 17 日　　調査面積：約 260㎡

調査の経過：7 月 21 日～ 8 月 25 日　表土除去
7 月 27 日～ 10 月 14 日　遺構精査・掘削（SK01、ピット、灰原）
7 月 29 日～ 8 月 25 日　基準杭設置（業者委託）
8 月 25 日　グリッド杭設置
8 月 25 日～ 10 月 14 日　土層断面図・平面図作成
8 月 26 日～ 9 月 29 日　4 号窯掘削
10 月 15 日　現地説明会実施（27 名参加）
10 月 17 日　作業終了

⑵　平成 18 年度の調査

A' 区及び B 区

調査期間：平成 18 年 9 月 19 日～ 12 月 12 日　　調査面積：約 300㎡

調査の経過：**〈A' 区〉**
9 月 19 日～ 22 日　表土除去・遺構精査
9 月 20 日～ 10 月 23 日　遺構掘削（SJ01 ～ 04）
9 月 27 日～ 11 月 22 日　土層断面図・平面図作成
〈B 区〉
9 月 25 日～ 10 月 18 日　表土除去
10 月 19 日～ 26 日　遺構精査・掘削（SK02）
10 月 20 日　グリッド杭設置
10 月 20 日～ 27 日　土層断面図・平面図作成

10 月 31 日　空中写真撮影（業者委託）
12 月 12 日　作業終了

C 区（確認調査）

調査期間：平成 18 年 10 月 30 日～ 12 月 12 日　　調査面積：約 340㎡

調査の経過：10 月 30 日～ 12 月 7 日　表土除去・遺構精査（削平部分を確認）
11 月 17 日　グリッド杭設置
12 月 7 日　平面図作成
12 月 12 日　作業終了

⑶　平成 19 年度の調査

E － I 区

調査期間：平成 19 年 10 月 2 日～ 11 月 30 日　　調査面積：約 180㎡

調査の経過：10 月 2 日～ 9 日　表土除去
10 月 10 日～ 11 月 27 日　遺構精査・掘削（5・6 号窯前庭部、SK03、灰原）
10 月 16 日　グリッド杭設置
10 月 17 日～ 11 月 30 日　土層断面図・平面図作成

11月30日　　作業終了

E－Ⅱ区（確認調査）

調査期間：平成19年11月5日～11月20日　　調査面積：約100㎡

調査の経過：11月5日～15日　　表土除去・遺構精査（5・6号窯を確認）

11月20日　　作業終了

⑷　平成20年度の調査

E－Ⅱ区及びE区

調査期間：平成20年9月1日～平成21年3月18日　　調査面積：487㎡

調査の経過：〈E－Ⅱ区〉

9月1日～12月1日　　5・6号窯精査・掘削

9月5日～12月2日　　遺構精査・掘削（SK04・05、ピット）

9月5日～12月24日　　土層断面図・平面図作成

11月22日　　現地説明会実施（45名参加）

12月3日～4日　　空中写真撮影（業者委託）

12月25日　　作業終了

〈E区〉

10月8日～11月12日　　表土除去・遺構精査（灰原を確認）

10月21日　　グリッド杭設置

11月13日～3月18日　　灰原掘削

12月17日～3月18日　　土層断面図・平面図作成

3月18日　　作業終了

⑸　平成21年度の調査

E－Ⅲ区及びD区

調査期間：平成21年9月1日～12月11日　　調査面積：約600㎡

調査の経過：〈E－Ⅲ区〉

9月1日～10月5日　　13号窯精査・掘削（併せて5・6号窯も精査）

9月4日～10月5日　　土層断面図・平面図作成

10月5日　　作業終了

〈D区〉

10月6日～11月5日　　表土除去・遺構精査

10月14日　　グリッド杭設置

10月28日～12月4日　　遺構掘削（SK03・06～08、ピット、灰原）

11月6日～12月10日　　土層断面図・平面図作成

12月11日　　作業終了

5　報告の記載方法

今報告は遺構編とし、須恵器窯跡5基、および窯外部遺構の一部（前庭部の焚口前面土坑、窯側部のSK01・SK04・SK05ほか）、灰原を報告する。次年度以降に本報告掲載遺構出土の遺物編、その他の遺構・遺物について補遺編の刊行を予定している。

凡例

窯の計測方法、部位名称及び分類については、『須恵器窯構造資料集２－８世紀中頃～12世紀を中心として』窯跡研究会2004の「【須恵器窯跡構造を論じる上での用語解説】須恵器構造に関する構造名称や部位名称及びその機能」と、『古代窯業の基礎研究－須恵器の技術と系譜－』窯跡研究会2010の「第２章　須恵器窯の基本用語整理と構造分類」に、総じて基づいている。

窯構造分類では、A類が掘り抜き構造（地下式）で、この内、２類が地下焼成部掘り抜き式、焚口から焼成部は仮設天井架構、焼成部口から排煙口までが掘り抜き構造をもつものを示す。

焚口・焼成部構造では、a類（一般構造型）がほぼ水平か緩く焚口にむかって上がる床傾斜の燃焼部で、焼成部境の絞り込み度合いによって燃焼部幅が異なるもの。幅広で短い広短型、幅狭で長い狭長型、その中間の通常型に概ね分けられる。e類（下降傾斜燃焼部構造）は燃焼部床面が焼成部口に向かって急に下降傾斜するもので、焚口の開口が上向きとなる10世紀以降に特徴的な形態。

排煙口・煙道構造については、I類（奥部開口型構造）が奥壁をもたず、焼成部床面傾斜のままに排煙口が卒まる程度で開口するもの。9～10世紀の南加賀窯跡群で一般的な構造。上向開口タイプと奥向開口タイプがある。

燃焼部を切って掘削される舟底状ピットは深いA類と浅いB類がある。以上、本書に関連する分類のみ抜粋した。

〈土層注表記〉

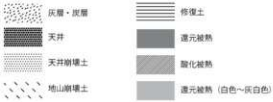
密度：VL（すこぶるしょう）＜L（しょう）＜S（軟）＜H（堅）
　　＜VH（すこぶる堅）＜EH（固結）

可塑性：NP（なし）＜SP（弱）＜P（中）＜VP（強）＜EP（極強）

粘性：NS（なし）＜SS（弱）＜S（中）＜VS（強）

※日本ペドロジー学会編1997年『土壌調査ハンドブック改訂版』に基づく

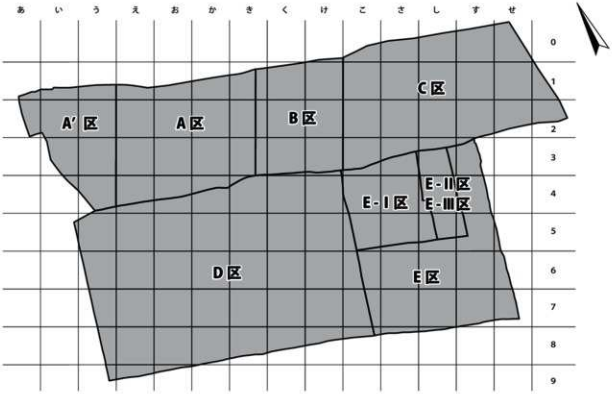
〈土層描画〉



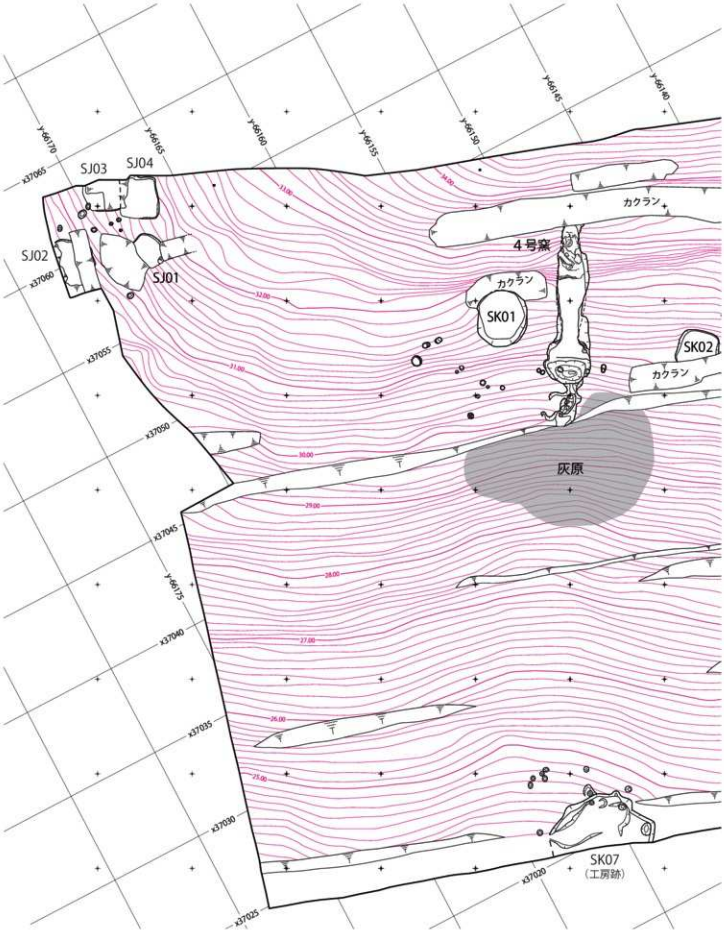
今報告は、調査担当の大橋由美子氏、調査指導の望月精司氏と協議の上、橋詰が執筆した。

参考文献

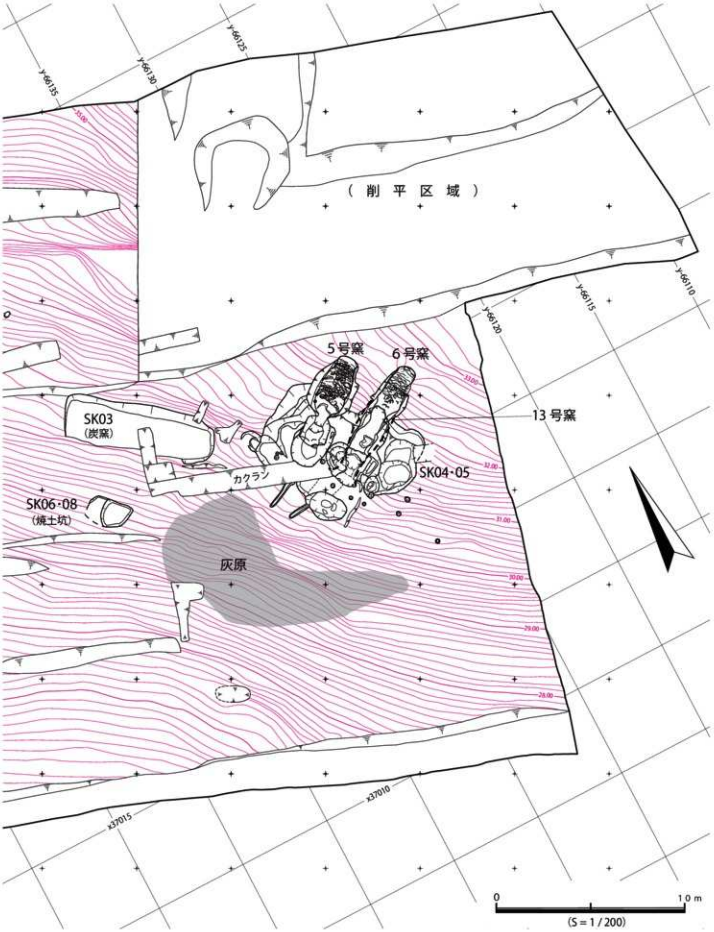
小松市教育委員会 1979年『南加賀古窯跡群詳細分布調査事業報告書』
小松高校地歴部・近間強 1985年「小松丘陵窯跡群分布調査報告Ⅰ（遺跡編）」『石川考古学研究会会誌』第31号
小松市教育委員会 1993年『二ツ梨豆岡向山古窯跡』
小松市教育委員会 2005年『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』



第５図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　グリッド配点と区割り（S=1:500）



第６図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　全体平面図


Y-66135
Y-66130
Y-66125
Y-66120
Y-66115
Y-66110
X37015
X37010
（削平区域）
5号窯
6号窯
13号窯
SK03
（炭窯）
カクラン
SK04･05
SK06･08
（焼土坑）
灰原
0
10 m
(S＝1／200)

第２節　発見された遺構

１　窯跡

⑴　４号窯

４号窯は奥壁側壁の拡張・修復や床の嵩上げによる改造が認められるため、２基の窯に分けて報告する。新しいものを４－Ⅱ号窯、古いものを４－Ⅰ号窯と呼称する。

⑴－１　４－Ⅱ号窯

①　窯体部

４－Ⅱ号窯構造分類

構造名：A2 類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・焼成部：い類	排煙口・煙道：－ 類

４－Ⅱ号窯窯体計測表（単位は cm、cm 以外は記入、２次床基準）

窯体実効長	：－	最大幅	：154	窯体実効高	：残 242	焼成部床傾斜	：30°(23～34)
窯体水平長	：残 631	焚口幅	：138	窯体内最大高	：残 73	燃焼部床傾斜	：－
窯体実長	：残 677	焼成部境幅	：103	窯体床面積	：残 7.35㎡	残存	：奥壁欠け
焼成部長	：(水) 残 507	奥壁幅	：残 62	焼成部床面積	：残 6.13㎡		
	：(実) 残 563	煙道径	：－	燃焼部床面積	：1.22㎡	修復回数	：壁 1、床 1
燃焼部長	：124	煙道長	：－			時期	：9C 前

全体形状は細長い紡錘形を呈する。

焚口と燃焼部

燃焼部は焚口に向かってハの字に幅を広げる広口燃焼部構造（い類）。注目したいのは、２次床時、焚口左側部に置台状の粘土塊（a 層）を平たく敷き詰める点である。敷き詰め部の奥には、還元被熱の痕跡があり、ここが焚口先端部となる。この敷き詰めがどのような性質をもつか不明だが、窯閉塞の痕跡や造り替え時の修復などが考えられる。

２次床面は残存するが、１次床面は舟底状ピットに切られる。被熱度は２次床面でオリーブ灰色(弱い還元被熱)、１次床面では舟底状ピット脇にわずかに酸化被熱の痕跡を確認できる。２次床面には焚口から焚口前面土坑へと続く酸化被熱の痕跡があり、燃料を外側から窯内部へ押し込んだ行為によるものかもしれない。

側壁は直立しつつ、若干アーチ状を呈す（Ⅱ号窯 EPc － c' 断面)。さらに断ち割った壁を確認すると、修復と思われる白色還元したスサ入り粘土が残存する（Ⅰ号窯 EPc － c' 断面②・③層)。

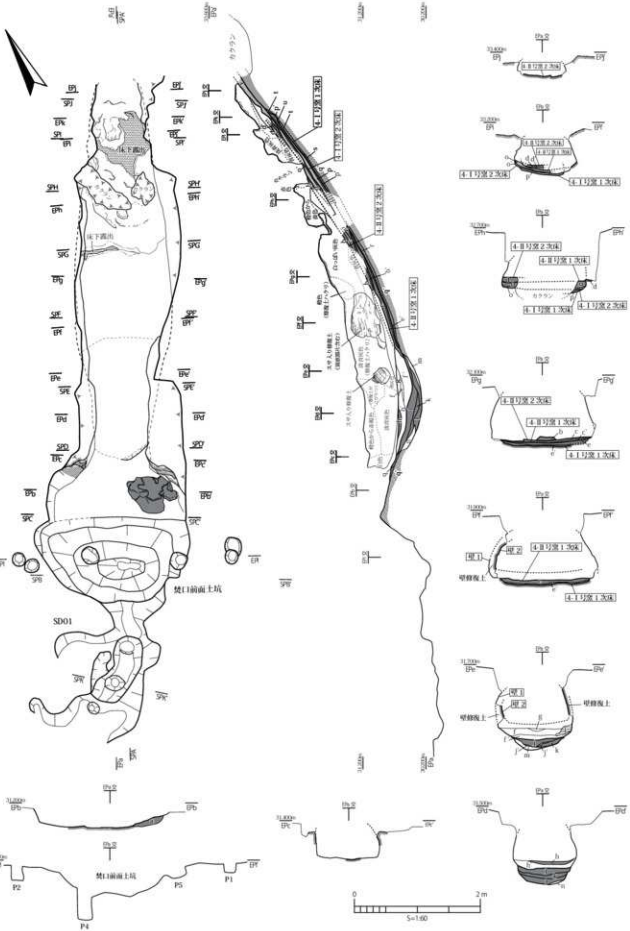
焼成部境

絞り込みは弱く「境」として認定した。１次床と２次床の絞り具合はほぼ同じだが、EPe － e' 断面の i 層（スサ入り生焼け土）を充填材とするなら、境に何らかの調節を加えた可能性がある。

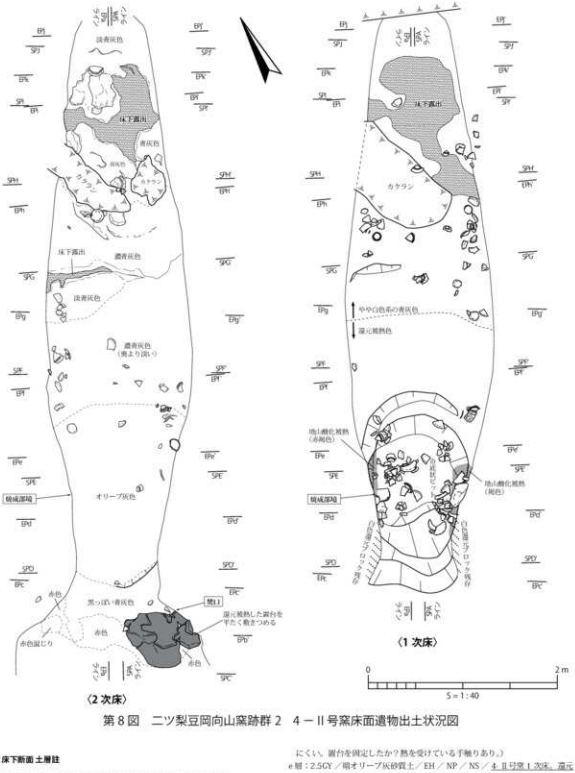
焼成部

胴の張る平面形状で、１次床に比べて２次床の方がやや幅狭、排煙口付近で窄まる。床面被熱度はやや２次床の方が強く、全体の色調はほぼ青灰色となる。平均傾斜角は 30°で、窯奥に進むに従って急になる。２次床面には粗い砂礫やスサ・ブロックなど窯壁片が混ざる置台（b・d 層＝砂質土）と置台固定用と思われる土（b'・d' 層＝粘質土）が部分的に残る。またⅡ号窯床は木痕による攪乱で一部めくれて下層のⅠ号窯床が露出する。

壁の拡張は顕著で、v 層はⅠ号窯からⅡ号窯へ奥行きを拡張した部分で、窯幅も EPf － f' 断面や i － i' 断面から拡張が確認できる。



第７図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　４－Ⅱ号窯平面図・断面図



第８図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　４－Ⅱ号窯床面遺物出土状況図

４－Ⅱ号窯 床下断面 土層註

層名：Hue V/C ／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考

a 層：2.5Y4/2 ／焚口付近の棚床床（調台転用）。暗灰黄褐色に φ 2.0max の還元Ｂ多量（暗灰黄褐色：還元Ｂ＝６：４）。この隙間に明褐色 (7.5YR5/6) が入るが、上面より 3cm は入らない。非常に硬質。ガリガリ。

b 層：7.5Y4/1-4/2 ／灰オリーブ砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／スサ。4-Ⅱ号窯２次床

b' 層：7.5YR5/6 ／明褐色埴壌土／ EH ／ P ／ SS ／スサ。4-Ⅱ号窯２次床下。ところどころ灰オリーブ (7.5YR5/2) に還元する。上層の床に近い所は赤色

c 層：7.5YR2/5-4/1 ／灰オリーブ砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／ 4-Ⅱ号窯２次床層

c' 層：5YR4/8 ／赤褐色砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／ 4-Ⅱ号窯２次床下。c 層赤化。ガチガチ

d 層：10BG ／暗青灰色砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／砂多量。4-Ⅱ号窯２次床。調台か

d' 層：7.5YR4/6 ／褐色埴壌土／ S ／～／ SS ／微砂質小Ｂ。還元粒多量（d 層と考えにくい。調台を固定したか？熱を受けている手触りあり。）

e 層：2.5GY ／暗オリーブ灰砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／ 4-Ⅱ号窯１次床。還元

e' 層：5YR3/4-3/6 ／暗赤褐色砂質土／ EH ／ NP ／ SS ／ 4-Ⅱ号窯１次床下。赤化

f 層：10Y3/2 ／オリーブ黒砂質土／ VH ／ NP ／ SS ／還元Ｂ多量。スサ入りの塊 φ max10cm 床還元Ｂ多量（夾雑物の隙間に灰オリーブ砂が入る感じ。ガラガラザラザラ）

f' 層：10Y3/2 ／オリーブ黒砂質土／ EH ／ NP ／ SS ／還元Ｂ多量だが、大塊は少ない。f に比べよくしまる。土質は同じ。

g 層：7.5YR4/4 ／褐色埴壌土／ S ／ SP ／ S ／還元Ｂ、白色Ｂ、焼土粒あり。しまりなし。理土か

h 層：10Y4/2 ／灰オリーブ褐色砂質土／ H ／ NP ／ SS ／生焼け還元Ｂ状

h' 層：7.5YR4/4 ／褐色砂質土／ S ／ SP ／ S ／還元小Ｂ、褐色の生焼けＢ多量。還元せずにいる下層の土

i 層：10Y5/2，10YR6/6 ／灰色砂質土＋明褐色生焼け土／ EH ／ NP ／ NS ／スサ（窯壁修理に使われるようなスサ入りの塊。絞りのため焼成部口に使われた？）

j 層：2.5Y3/3 ／暗オリーブ砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／オリーブ黒還元小～特大 B、炭多量（ガッチガチに硬化。k 層がやや還元する。下底熱焚する。）
j' 層：－／ j 層の酸化減熱層
k 層：10YR3/3、7.5YR4/6、2.5Y4/4 ／暗褐色、オリーブ褐色、褐色砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／還元 B 多量、硬化する（暗褐色：オリーブ褐色：褐色＝3：4：3）
l 層：2.5Y4/3-4/4 ／オリーブ褐色砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／還元硬化 B（還元床か）
n 層：2.5YR3/3 ／暗オリーブ砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／炭化小 B 少量
m 層：5YR4/8、7.5YR3/4 ／赤褐色 B に暗褐色 B 混在／ H ／ NP ／ NS ／還元 B 少量（1 層還元せず赤化）
o 層：7.5YR7/1-6/1 ／灰白～灰色砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／スサ（土方は硬化（還元）が所々強い所がある。）
o' 層：7.5YR4/4 ／褐色焼壊土／ H ／ NP ／ NS ／還元 B、焼土 B 多量（o 層が下層で還元しなかった土。）
p 層：7.5Y7/1-8/1 ／灰白砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／ 4・1 号窯２次床。還元（生焼け）
p' 層：－／ 4・1 号窯２次床下。p 層の赤化
q 層：5Y3/2 ／オリーブ黒砂質土／ EH ／ NP ／ NS ／ガッチガチに還元する。舟底へ行くに従い灰色に近くなる。
q' 層：5Y3/6 ／暗褐色／ S ／ NP ／ SS ／地山被熱
r 層：2.5GY3/1 ～ 7.5GY5/1 ／暗オリーブ灰色～緑灰色／ EH ／ NP ／ NS ／ 4・1 号窯１次床還元土（地山還元）
s 層：2.5Y5/2 ／暗灰黄色／ EH ／ NP ／ NS ／ 4・1 号窯１次床還元土（地山還元）
t 層：2.5GY3/1 ～ 10Y5/2 ／暗オリーブ灰色～オリーブ灰色／ EH ／ NP ／ NS ／ 4・1 号窯１次床還元土（地山還元）
u 層：7.5Y7/1 ／灰白色／ VH ／ NP ／ NS ／一部弱い還元 B 状呈する。粘土が還元。
v 層：2.5Y4/3 ～ 7/2 ／オリーブ暗～灰黄色／ EH ／ NP ／ NS ／粘土の弱め還元

排煙口及び煙道

撹乱によって消失し不明。

壁・床の修復

断面観察から、Ⅰ号窯からⅡ号窯へ窯幅・窯奥の拡張を行い、Ⅱ号窯１次床（壁１）から２次床（壁２）で壁を厚くして調節していることが分かる。壁２は厚さ約５～７cm のスサや須恵器片を含む修復土で、一部残存する（EPe －e' 断面とｆ－ｆ' 断面で確認）。須恵器片を混ぜるのは壁強度の向上をねらったものと推測される。壁１に近い修復土内側は生焼けで、修復土表面には撫でたくった指跡が残る。床の嵩上げもⅠ号窯とⅡ号窯それぞれで行われており、若干床の傾斜を大きくしているように見える。

床下遺構（舟底状ピット）

舟底状ピットは深く掘り込むタイプ（A 類）で、全体的に砂質の埋土。層中には還元被熱層が確認でき、h 層は４－Ⅱ号窯２次床（最終床）、j 層・k 層・l 層は４－Ⅰ号窯に伴うものと考えられる。

埋土

燃焼部～焼成部境付近で仮設天井崩壊に伴うと思われる土を検出した。土は全体的に還元被熱度が弱く、両側壁には１本ずつ構築材と考えられる炭化材が垂直に差し込まれていた。左側壁には径 1cm 程の小孔が計４個並んでおり、さらに構築材が打ち込まれていたと思われる。

焼成部では天井崩壊土および天井由来の還元ブロックと地山ブロックの混在層が床面付近にしまりなく堆積し、その上層に地山崩壊土が確認できる。さらにその上を流土（9・28 層）が覆う。

遺物出土状況

坏 A、坏 B（身・蓋）、盤 A、盤 B、が主体で、瓶・壺・甕・鉢等の貯蔵具が伴うことを確認した。焼（置）台として転用した製品も含まれる。床面遺物は少ない。

②　窯外部

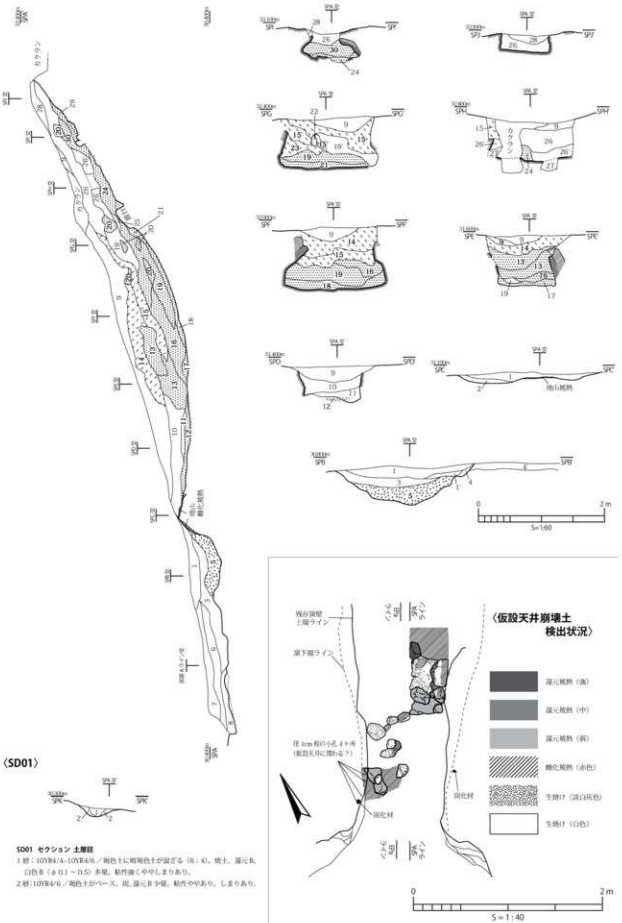
前庭部

焚口前面土坑は深く掘り込む。土坑埋土は灰層、炭化物、焼土ブロック、遺物を多量に含む。焼成前の作業場、焼成後の灰・炭溜め、廃棄場としての機能が考えられる。前面へ延びる溝（SD01）は、埋土に灰層が含まれておらず、焼成後の灰層形成段階以前には埋まっていた可能性がある。

前面土坑をまたぐようにして１列に小穴列が並ぶ。穴は直径 20cm 程で埋土に灰があまり含まれていないため、木杭状のものを長い間打ち込まれていたと考えると、前面土坑に渡した橋げた、風除けの衝立、覆屋等が想定される。

③　窯側部

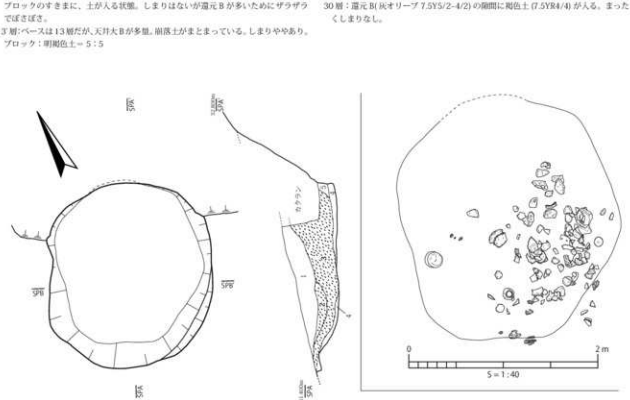
窯左側部に SK01 がある。４号窯操業時の修復や造り替え、窯閉塞用の土取り場であろうか。底面



第９図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　４－Ⅱ号窯セクション図・天井崩壊土検出状況図

４－Ⅱ号窯 セクション 土層註

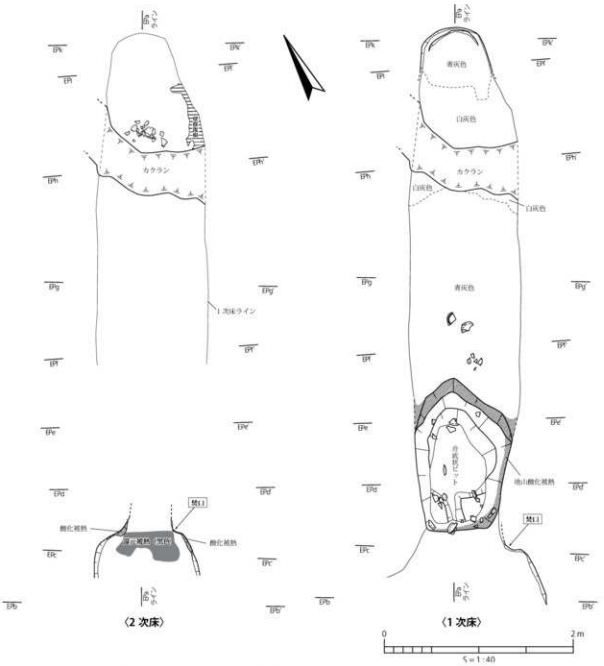
1 層：褐色土（7.5YR4/4）ベースで還元色、地山粘化Ｂφ 0.5 ～ 2.5 多量に含む。あわおこし状でザラザラ。地山粘化Ｂは様々な色調のもの。良くしまっている手ごたえ。
1' 層：基本は 1 層だが、ブロックがほとんど入らない
2 層：褐色土（7.5YR4/6）に褐色土（7.5YR4/2）がブロック状に混ざる。粘質でしまりがあって固め。炭多量
3 層：黒褐色土（10YR3/2-2/3）しまりなし。焼け前面土坑理土。炭多量
4 層：褐色土（7.5YR4/4）炭、焼土Ｂ含む。しっかりしまって粘性あり
4' 層：基本は 4 層だが、砂質強く、炭、焼土Ｂ少量。
5 層：黒色土（10YR2/1-1.7/1）灰層が混まったもの。土器含む。還元Ｂ、焼土Ｂ多量。しまりなし。
6 層：褐色土（10YR4/4-4/6）炭、焼土Ｂ小、遺物入る。しまりあり。
7 層'2' に似るが、褐色土（10YR4/4-4/6）ベースでしまりあり。還元Ｂ・焼土Ｂ（φ 1.0）がくる。2' 層に比べ割合は少ない。
8 層：褐色土（10YR4/4）地山に近いが還元Ｂ、焼土Ｂ微量に含む。しまりあり。
9 層：褐色土（10YR4/4）ベースで、にぶい黄褐色土（10YR4/3）が混入する砂質土＝ 9：1、炭（φ 0.2 ～ 1.5）、焼土Ｂ・還元Ｂ（φ ～ 1.0）が多量。特に炭目立つ。粘性あり。しまりあり。流れ込みの土。
10 層：赤褐色土（5YR4/6）＋褐色土（7.5YR4/4）＝ 5：5 の色調。しまりなく、還元Ｂ・焼土Ｂ（φ ～ 3.0）が多量
11 層：明褐色土（7.5YR5/4）＋褐色土（7.5YR4/4）＝ 3：7。還元Ｂ、やや焼き弱い焼土、赤褐色焼土が多量。
12 層：褐色土（7.5YR4/4）ベースだが、弱還元Ｂやにぶい黄橙色Ｂ(10YR7/3)、オリーブ黄褐色土（5Y6/3）が多く混入。これらのブロックが板設天井土か、さらさらでややしまりある。
13 層：褐色土（7.5YR4/4-4/6）ベースで焼土が混入し、あっぱい。還元大Ｂ、焼土Ｂ大多量。ブロックのすきまに、土が入る状態。しまりはないが還元Ｂが多いためにザラザラでほさほさ。
13' 層：ベースは 13 層だが、天井大Ｂが多量。崩落土がまとまっている。しまりややあり。ブロック：明褐色土＝ 5：5
14 層：褐色土（10YR4/4-4/6）混入物が少なく、地山がそのまま動いたもの。しまりあり。地山崩落土。
15 層：にぶい黄褐色土（10YR5/4）・褐色土（10YR4/6）、地山土。
15' 層：褐色土（10YR4/6）の粘質で、若干の炭含む。しまりあり。地山。
16 層：にぶい赤褐色（5YR4/4）とにぶい褐色土（7.5YR5/4）ベースの天井崩落土。天井の還元・酸化土（φ 2.0 ～ 5.0）が多量。しまりなし。
17 層：にぶい褐色（7.5YR5/4）の砂質土、天井崩落土、床のものかう還元Ｂ多量、ざらつき、しまりなし。
18 層：暗褐色土（5YR3/6）・にぶい黄褐色土（10YR4/3）ベースで還元Ｂ多量。粒は小さくφ max0.5cm。しまりなし。
19 層：褐色土（7.5YR4/4）ベース。炭、焼土Ｂ、還元Ｂ多量。焼土Ｂ（φ max5.0）は暗褐色～赤。還元Ｂ（φ max5.0）は白青灰～白色、通常の還元色等様々。しまりなし。
19' 層：褐色土（7.5YR4/4）ベース。還元Ｂ、焼土少量。しまりあり。19 層と似る。
20 層：生焼け還元Ｂ(にぶい黄橙 10Y27/4) や、やや弱い還元Ｂ(オリーブ灰 2.5GY5/1) の隙間に明黄褐色土（7.5YR5/6）が入る。しまりややあり。
21 層：還元小Ｂ、焼土Ｂの隙間に褐色土（7.5YR4/4）が入る。しまりなし。
22 層：褐色土（7.5YR4/6）に焼土、還元小Ｂ（φ 0.5）含む。炭φ 1.0 多量。しまりあり。
23 層：赤褐色土（5YR4/6）～暗赤褐色土（7.5YR3/6）、地山被熱層の崩壊土。しまりあり。
24 層：褐色土（7.5YR4/4）、還元Ｂ、炭多量。ぼそぼそでまったくしまりない。
25 層：黄褐色土（2.5Y5/3）地ほっぱい。砂質土で固くて、しまりしっかりあり。
26 層：赤褐色土（5YR5/3）・褐色土（7.5YR4/3）＝ 5：5。しっかりしまっている。焼土・還元Ｂ（φ max5.0）多量。焼土・還元Ｂともに様々な色調。
26' 層：基本的に 26 層ベース。ブロックが小さく、生焼け。白色還元Ｂ（φ ～ 0.5）が目立つ。しまりややあり。
27 層：褐色土（7.5YR4/4）ベース。還元Ｂ（φ 1.0 ～ 1.5）多量。炭少量。しまりなし
28 層：褐色土（7.5YR4/6）で若干の白色還元Ｂ含む。しまりあり。粘性強い。流土か
29 層：還元小Ｂ(灰オリーブ 7.5Y5/2-4/2)・褐色土（7.5YR4/6）＝ 7：2。しまりなし。
30 層：還元Ｂ(灰オリーブ 7.5Y5/2-4/2) の隙間に褐色土（7.5YR4/4）が入る。まったくしまりなし。



SK01 セクション 土層註

1 層：10YR4/6-10YR5/4 ／褐色～にぶい黄褐色埴土／砂が少し混入する。遺物入る。しまりあり
2 層：10YR4/4-10YR5/4 ／褐色～にぶい黄褐色埴土／炭多量。還元Ｂ含む。この層からの遺物が大半を占める。
3 層：10YR4/6-10YR5/4 ／褐色～にぶい黄褐色埴土／炭多量。1 層と同じだが炭や遺物が多量。
4 層：7.5YR4/4-7.5YR5/6 ／褐色～明褐色埴土／炭多量。φ max15cm の炭極大Ｂ含む。しまり、粘りあり
5 層：7.5YR4/6 ／褐色土／砂質の灰黄褐（10YR6/2）が混入。しまりなく、遺物少ない。地山崩落土か

第 10 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　SK01 平面図・断面図・遺物出土状況図



第 11 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　4－Ⅰ号窯床面遺物出土状況図

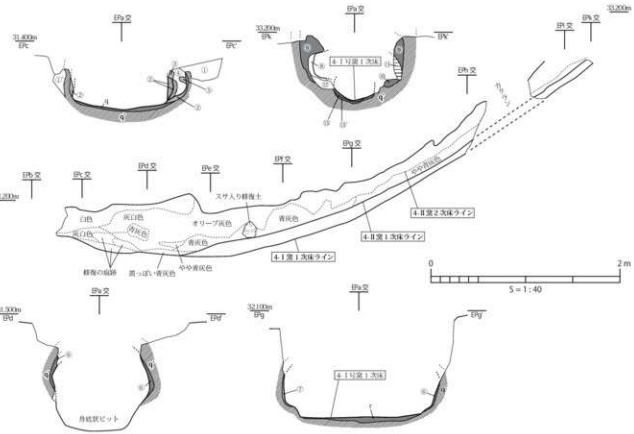
は平坦で下層に炭化物を特に多く含み、土器も含まれるため、燃料や製品の置き場としての機能も想定される。また上層からも土器が多く出土し、最終的には廃棄場になったと考えられる。

⑴－2　4－Ⅰ号窯

①　窯体部

焚口と燃焼部

1 次床燃焼部床面は舟底状ピットに切られて詳細は不明であるが、平面形から推測するに一般構造型（あ類）。2 次床面は還元被熱が焚口前面に向かって確認でき、一般構造型（あ類）の中でも広短タイプの特徴と言えるが、燃焼部長が不明であるため確かではない。



第 12 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　４－Ⅰ号窯断面図

４－Ⅰ号窯 床下断面 土層註

層名：Hue V/C ／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考
①層：7.5YR5/6 ／明褐色砂壌土／ VH ／ NP ／ NS ／焼土小 B、炭化小 B、少量（窯構築の際の掘方）
①'層：基本的に①層と同じだが、焼土大 B、多量。
②層：2.5Y7/3 ／浅黄色／ EH ／ NP ／ NS ／スサ、スサ入り粘土混元（生焼け）
③層：5YR7/6 ／橙色／ EH ／ NP ／ NS ／粘土被熱しやや還元。②よりさらに生焼け
④層：5YR5/6・7.5YR4/6 ／赤褐・褐色砂壌土／ VH ／ NP ／ NS ／還元炭化小 B 少量
⑤層：7.5YR7/4 ／にぶい橙還元 B ／ EH ／ NP ／ NS ／隙間に褐色土（7.5YR4/6）。
４－Ⅰ号窯焚口の微弱還元土。隙間に褐色土入る。
⑥層：2.5GY7/1–6/1 ／明オリーブ灰～オリーブ灰／ EH ／ NP ／ NS ／地山還元土
⑦層：7.5Y7/1 ／灰白色／ EH ／ NP ／ NS ／地山還元土
⑧層：5Y7/2 ／灰白色／ EH ／ NP ／ NS ／スサ入らず粘土のみ
⑨層：2.5Y7/3 ／浅黄色／ EH ／ NP ／ NS ／地山還元土
⑩層：2.5Y4/3–7/2 ／オリーブ褐～灰黄色／ EH ／ NP ／ NS ／地山還元。ⅴ層と同じ
⑪層：2.5Y4/3 ／オリーブ灰／ EH ／ NP ／ NS ／スサ（修復）
⑫層：7.5Y7/2 ／灰白色／ EH ／ NP ／ NS ／
⑬層：10Y3/2 ／オリーブ黒／ EH ／ NP ／ NS ／ブロック状になる
⑬'層：10Y3/2 ／オリーブ黒／ EH ／ NP ／ NS ／ブロック状になっていない

※アルファベット表記の層名は４－Ⅱ号窯岡面を構築するもの

４－Ⅰ号窯構造分類

構造名：A2 類（地下式焼成部掘り抜き式）		焚口・焼成部：あ類	排煙口・煙道：Ⅰ類か

４－Ⅰ号窯窯体計測表（単位は cm、cm 以外は記入、１次床基準）

窯体実効長 ：－	最大幅　：120	窯体実効高　：残 213	焼成部床傾斜 ：28°（21 ～ 34）
窯体水平長 ：残 551	焚口幅　：94	窯体内最大高 ：－	燃焼部床傾斜 ：－ 15°
窯体実長　：残 592	焼成部境幅 ：－	窯体床面積　：残 5.53㎡	残存　：奥壁欠け
焼成部長　：（水）－	奥壁幅　：残 51	焼成部床面積 ：－	
：（実）－	煙道径　：－	燃焼部床面積 ：－	修復回数　：壁 1、床 1
燃焼部長　：－	煙道長　：－		時期　：9C 前

焼成部境（11）

1 次床面では舟底状ピットに切られて絞り口は明瞭ではないが、弱い絞りが確認できる。2 次床面は位置さえも明らかではないが、燃焼部幅が強く狭まるため絞り口が存在した可能性がある。

焼成部

Ⅱ号窯に比べて胴の張りが弱く、傾斜は緩やかである。Ⅱ号窯同様に木痕（攪乱）によって床が破壊を受ける。

排煙口及び煙道

窯奥部（p' 層付近）にわずかな立ちあがりが確認できるため、上向開口タイプと推測される。2 次床以降は不明。

壁・床の修復

2 次床は焼成部の窯中腹から奥部（p、p' 層）のみ、床の嵩上げ、壁の修復痕が認められる。

遺物出土状況

Ⅱ号窯に比べて遺物出土量は極めて少ないが、坏盤類が多い。Ⅰ号窯 2 次床土器とⅡ号窯 1 次床土器が接合したが、前者は 2 次被熱を受けており、取り残された土器であることを確認した。

⑵　5 号窯

5 号窯構造分類

構造名：A2 類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・焼成部：え類	排煙口・煙道：Ⅰ類か

5 号窯窯体計測表（単位は cm、cm 以外は記入、最終床基準）

窯体実効長：－	最大幅　：175	窯体実効高　：残 245	焼成部床傾斜：42°(32 ～ 49)
窯体水平長：残 437	焚口幅　：83	窯体内最大高：残 77	燃焼部床傾斜：－ 19 ～－ 13°
窯体実長　：残 499	焼成部口幅：44	窯体床面積　：残 5.36㎡	残存　：奥壁欠け
焼成部長　：(水) 残 365	奥壁幅　：残 91	焼成部床面積：残 4.94㎡	
：(実) 残 453	煙道径　：－	燃焼部床面積：0.42㎡	修復回数　：壁 4、床 3
燃焼部長　：72	煙道長　：－		時期　：10C 前

①　窯体部

焚口と燃焼部

焚口前に落ち込みをもち、その落ち込みが燃焼部と一体となって土坑状を呈するもので、土坑の途中に焚口があるというもの。燃焼部は奥に向かって傾斜する下降傾斜燃焼部構造（え類）。傾斜角は－ 19 ～－ 13°。壁は白色硬化しており、激しい燃焼をうかがわせる。床は後述の通り当初平坦な床を 4 ～ 5 回修復および嵩上げして、傾斜を強くする。

焼成部口

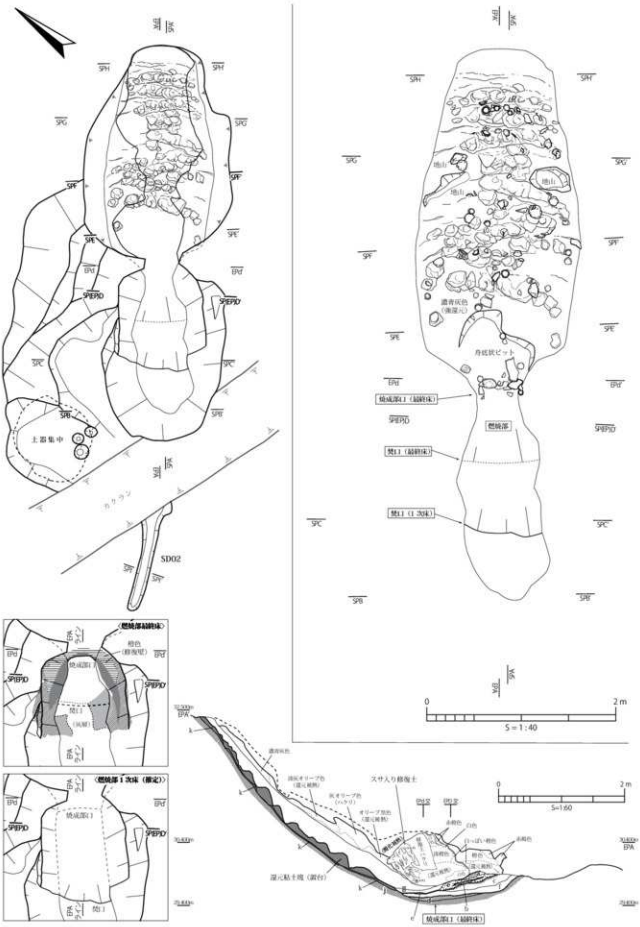
焚口から最も下降する地点（EPd － d' 断面付近）に位置し、絞り口が完存する。絞り口は最終時で幅 44cm の規模で、1 次床時のほぼ 2 分の 1 となり、かなりの絞り込みをもつものに変わっている。最終時に焚口側から製品を出した可能性は低く、排煙口側から製品を出した可能性があるが、排煙口ではその痕跡は確認できていない。

壁は EPd － d' 断面右側に少なくとも 5 枚確認でき、所々にスサ入り粘土の補填が確認できる。

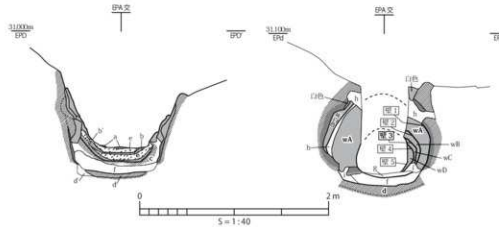
焼成部

胴の張る釣り鐘形の平面形状で、窯奥部に向かって窄まる。粘土塊置台（馬爪形）が段状に構築され、還元被熱する。中腹部から裾部にかけて崩落した粘土塊が堆積していた。

段は、7 号窯（平成 16 年度報告）で見られたような階段状ではなく、粘土塊置台 1 つ 1 つの形が



第 13 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　５号窯平面図・断面図１



第 14 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　5 号窯断面図 2

5 号窯 床下断面 土層註

層名：Hue V/C ／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考

a 層：10YR4/2 ／灰黄褐色砂土／ NS ／ NS ／ VH ／炭化 B，焼土 B，還元 B 多量。
　上面が弱い還元（かなり強い酸化被熱）でガチガチ。下方は酸化。燃焼部の最終床面

a' 層：a 層が被熱しない

b 層：10YR4/2 ／灰黄褐色砂土／ NS ／ NS ／ VH ／炭化 B，焼土 B，還元 B 多量。
　上面が弱い還元（かなり強い酸化被熱）でガチガチ。下方は酸化。燃焼部の 3 次床

b' 層：黄色状態でガチガチ。やや還元気味に被熱する。

c 層：7.5YR4/6-3/4 ／褐色～暗褐色砂壌土／ SS ／ SP ／ S ／ a 層のよう。上面酸化被熱して硬い（5YR4/6）。燃焼部の 2 次床

d 層：10YR4/2 ／灰黄褐色砂壌土／ NS ／ NS ／ VH ／ a 層のよう。燃焼部の 1 次床

d' 層：d 層が被熱しない。

e 層：10YR2/1 ／黒色壌土／ S ／ SP ／ H ／焼土粒（燃焼部の灰層）

f 層：10YR2/2 ／黒褐色壌土／ SS ／ P ／ H ／褐色 B が 3 割，還元小 B 多量

1 次床から 2 次床へのかさ上げ用の土

g 層：5Y3/2 ／オリーブ黒壌土／ NS ／ NS ／ H ／褐色 B が下方で多量。床還元

h 層：7.5YR5/6-5/8 ／明褐色壌土／ NS ／ NS ／ H ／還元小 B 少量。

i 層：10YR4/6 ／明褐色壌土／ SS ／ SP ／ S ／灰黄褐色土 3 割，炭化大 B 多量

f' 層：10YR4/6 ／明褐色壌土／ SS ／ SP ／ S ／還元大 B，極めて多量。この隙間に褐色土が入る感じ（還元 B：褐色土＝ 7：3）

j 層：地山酸化被熱

k 層：還元土。非常に薄く，窯奥部以外は 1mm 程。

wA 層：2.5Y8/1 ～ 7/2，7.5Y6/1 ～ 5/1 ／灰白～灰黄色，灰色／還元良好（ガリガリ）。
　1 次壁側が良く焼ける。スサ入り

wB 層：5PB4/1 ／暗青灰色／還元パリパリでアメ色に融解。ブロック状。スサ部分が焼けた？

wC 層：7.5Y6/1 ～ 5/1 ／灰色

wD 層：5PB4/1 ／暗青灰色

わかるものである。所々に補強の跡があり、そういった箇所は焼きが甘い。

排煙口及び煙道

不明。おそらく奥部開口型を呈す。

壁・床の修復

燃焼部床には砂質土（d 層）が焼成前に充填され、その上部に嵩上げ（c、f 層）および修復（a、b 層）を行い、1 次床時から最終床時へ下方傾斜を急にする（EPD － D' 断面）。また焼成部口絞り込みの修復は入念で、前述の通り少なくとも壁が 5 枚認められる。EPd － d' 左側壁の厚みのある wA 層は複雑で分層できなかったが、もし 1 回の修復であるとすれば、右側壁の一方向から絞り込みを行ったことになる。

焼成部では明確な修復痕跡は認められなかった。

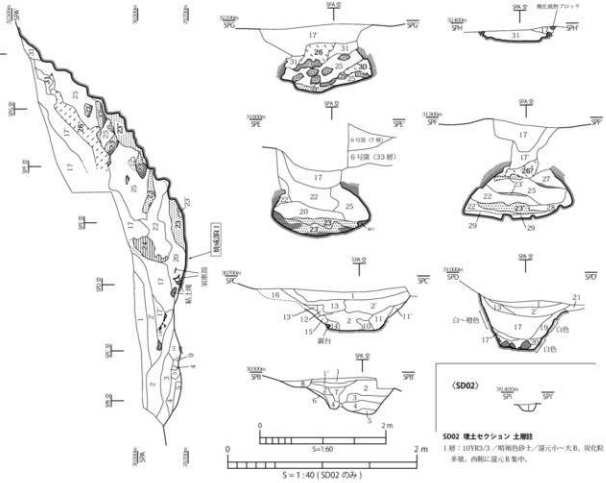
床下遺構（舟底状ピット）

断面図 g 層を舟底状ピットと判断し、浅く掘り込むタイプ（B 類）に分類。EPd － d' 断面を観察する限りでは、最終床焼成後は掘り込まず埋まった状態である。

埋土

焚口～燃焼部付近に混ざる還元被熱ブロックは仮設天井土と推測される。燃焼部床には滑落した置台である還元粘土塊が残る。焼成部は下層に還元被熱した天井崩壊土、その上層に地山崩壊土、隙間に地山質の流土が入り込む。

掘り方横断面を見ると焼成部口を境に SPD － D' 断面では台形状であるが、SPE － E' 断面より奥では楕円形状となる。仮設天井を架構する焚口～燃焼部と地山掘り抜きで恒久天井となる焼成部の違い



第 15 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　５号窯セクション図

５号窯 セクション 土層註

層名：Hue V/C／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考

1 層：7.5YR4/4-4/6／褐色埴壌土／Ｓ／ＶＰ／Ｓ／還元中Ｂが少量

1' 層：10YR2/3／黒褐色埴壌土／Ｓ／Ｐ／ＳＳ／褐色土５割、還元中Ｂが多量（1 層と３層の漸移層）

2 層：10YR2/1-2/3／黒褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／Ｓ／炭化Ｂ、白色砂土大Ｂが少量

2' 層：10YR3/2／黒褐色埴土／Ｈ／Ｐ／Ｓ／白色土中Ｂ、焼土中Ｂ、還元細片多量　暗褐色土と５割で混在。

3 層：10YR3/2／黒褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／Ｓ／炭化中Ｂ、白色砂土大Ｂが少量

4 層：10YR2/1-2/2／黒褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／Ｓ／還元Ｂ特大、炭化小～大Ｂ多量

5 層：10YR3/2／黒褐色砂埴土／Ｓ／Ｐ／Ｓ／黄褐大Ｂが極多量。焼土中Ｂ多量

6 層：7.5YR5/6／明褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／ＳＳ／暗褐色土（10YR3/3)4 割混在。明褐色焼土（7.5YR5/8）少量

7 層：10YR2/3／黒褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／ＳＳ／褐色小Ｂ、焼土小Ｂ、炭化小Ｂ少量

8 層：10YR3/3-3/4／暗褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／ＳＳ／還元中Ｂ極多量。焼土Ｂ多量

9 層：10YR2/3／黒褐色埴土／Ｓ／Ｐ／Ｓ／褐色小Ｂ、焼土Ｂ、炭化Ｂが多量

10 層：10YR2/1-2/2／黒（褐）色埴土／Ｈ／ＳＰ／Ｓ／褐色中Ｂ、白色砂土中Ｂ、焼土中Ｂが極多量

11 層：10YR2/3／黒褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／Ｓ／暗褐色（10YR3/3)3 割、焼土小～特大Ｂ極多量、炭化大Ｂ少量

11' 層：10YR2/3／黒褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／Ｓ／炭化小Ｂ多量、焼土なし

12 層：10YR3/3／暗褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／ＳＳ／焼土小Ｂ、炭化小Ｂ、少量

13 層：7.5YR4/4／褐色埴土／Ｓ／ＥＰ／ＳＳ／黒色・炭化小Ｂ、焼土・還元中Ｂ多量

13' 層：7.5YR4/4／褐色埴土／Ｓ／ＥＰ／ＳＳ／還元小Ｂ、少量

14 層：10YR3/4／暗褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／ＳＳ／還元大Ｂ、焼土大Ｂ、焼土中Ｂ多量

15 層：10YR4/6／褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／ＳＳ／焼土特大Ｂ(5YR4/8) あり

16 層：10YR4/6／褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／ＳＳ／還元小Ｂ、炭化極小Ｂ、少量（側方土？）

17 層：10YR5/6-4/6／黄褐色埴土／Ｓ／ＳＰ／ＳＳ／還元Ｂ・炭化Ｂ・焼土Ｂ少量

17' 層：Z 層に近いが Z 層と 17 層の中間

17'' 層：基本は 17 層。焼土中Ｂ、炭化小Ｂ、少量のみ

18 層：10YR5/6-4/6／黄褐色埴土／Ｓ／Ｐ／ＳＳ／還元Ｂ多量。黒褐色土２割程

19 層：7.5YR4/6／褐色埴土／Ｈ／ＳＰ／ＳＳ／還元小Ｂ、炭化中Ｂ少量。焼土小～大Ｂ多量

20 層：7.5YR4/2／褐色埴壌土／Ｓ／Ｐ／Ｓ／焼土中～大Ｂ極多量、還元小～特大Ｂも多量

21 層：10YR4/6-5/6／（黄）褐色埴土／Ｈ／ＳＰ／ＳＳ／還元小Ｂ、少量

22 層：7.5YR4/6-5/6／（黄）褐色埴土／Ｈ／ＶＰ／ＳＳ／還元Ｂ、焼土塊中、少量

22' 層：基本は 22 層。若干色味に濁り。夾雑物、極めて少ない

23 層：5YR6/6／赤褐色埴土／Ｌ／ＶＰ／Ｓ／天井崩壊土の隙間に褐色埴土(7.5YR4/6)5 割程入る。最下底に還元Ｂ（天井）。

23' 層：還元Ｂ（天井崩落土）。

23'' 層：還元Ｂの間に、28 層が入る。

24 層：絞りロ修復壁

25 層：7.5YR4/6／褐色埴土／Ｓ／ＶＰ／ＳＳ／焼土小～特大Ｂ多量、還元小Ｂ少量　赤褐色土 (5YR4/6)3 割程が混在

26 層：7.5YR4/6／褐色埴土／Ｓ／Ｐ／ＳＳ／焼土中Ｂ、極少量。粘土壁地山が落下したもの

27 層：5YR5/6+3/4-3/6／（明）赤褐色埴土／Ｓ／Ｐ／ＳＳ／種々な色の焼土Ｂが入る。地山被熱土が落下したもの

28 層：基本的に 22 層だが、還元・焼土小～特大Ｂが多量

29 層：10YR4/6／褐色埴土／Ｌ／Ｐ／Ｓ／夾雑物なし。室内に流れてたまる流土層

30 層：7.5YR5/8／明褐色埴壌土／Ｈ／Ｐ／ＳＳ／還元中～特大Ｂ、焼土中～大Ｂ少量　天井崩壊時の地山流土

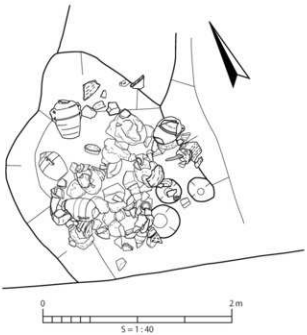
31 層：7.5YR5/6-4/6／（明）褐色埴土／Ｌ／Ｐ-ＶＰ／Ｓ／焼土中～特大Ｂ、２割、還元小～中Ｂ、少量

を示すものと考えられる。

遺物出土状況

坏A、埦A、埦B、皿B、壺瓶類、鉢類、甕類、専用焼台を確認した。高台部分だけの転用焼台や、須恵器片を粘土塊に貼り付けて置台として利用したものも含まれる。全体的に白色や灰白色調が多く、土師器色調（黄褐色～橙色）の製品も混ざる。

窯構造は瓦を焼いた１－Ａ号窯（平成 16 年度報告）に似るが、瓦の出土はない。



第 16 図　5 号窯土器集中　平面図

②　窯外部

前庭部

前述の通り土坑状で、流土が厚く堆積する。左側部には双耳瓶 6 個体と壺を中心とした土器集中がある。

⑶　6 号窯

6 号窯構造分類

構造名：A2 類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・焼成部：え類	排煙口・煙道：Ⅰ類か

6 号窯窯体計測表（単位は cm、cm 以外は記入、最終床基準）

窯体実効長	： －	最大幅	：135	窯体実効高	：残 261	焼成部床傾斜	：39°(11 ～56)
窯体水平長	：残 524	焚口幅	：89	窯体内最大高	：残 98	燃焼部床傾斜	：－ 20 ～－ 17°
窯体実長	：残 572	焼成部口幅	：83	窯体床面積	：残 5.98㎡	残存	：奥壁欠け
焼成部長	：(水) 残 396	奥壁幅	：残 95	焼成部床面積	：残 4.77㎡		
	：(実) 残 495	煙道径	：－	燃焼部床面積	：1.21㎡	修復回数	：壁 1 以上、床 3
燃焼部長	：128	煙道長	：－			時期	：9C 末～ 10C 初

①　窯体部

焚口と燃焼部

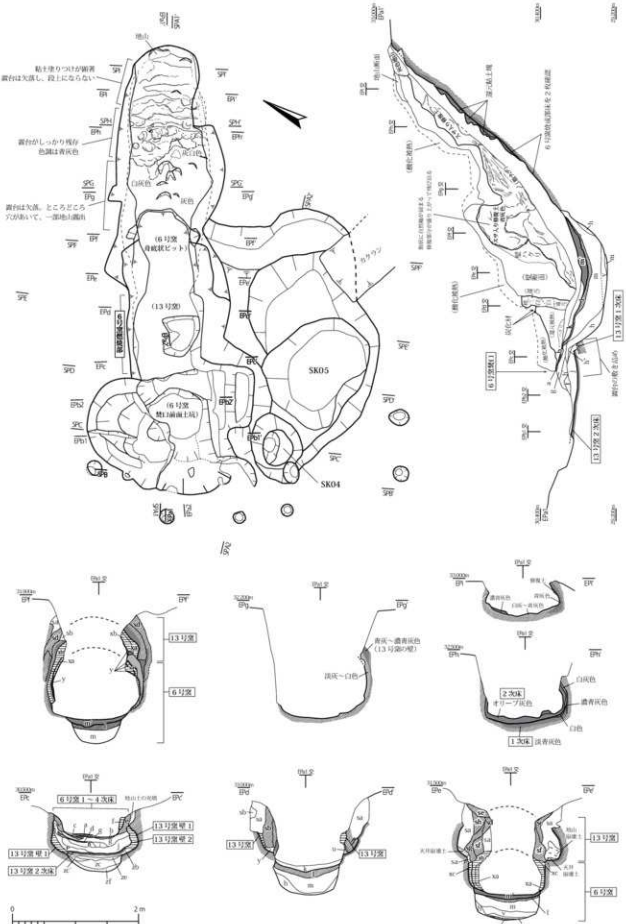
焚口は EPc － c' 断面付近に位置する。燃焼部は奥に向かって傾斜する下降傾斜燃焼部構造（え類）で、13 号窯床面を嵩上げして傾斜をつける。4 枚の床（a ～ d 層）が確認でき、傾斜を増している。床は硬化し、炭化物や還元ブロックを多く含む層が堆積する。

焼成部口

焚口から下降しきった辺りの EPd － d' 断面と e － e' 断面の間に絞り口が完存する。修復の痕跡があり、5 号窯同様絞り込みの補強や調節を行ったと思われる。

絞り口手前（燃焼部側）の埋土からは底に孔のあいた双耳瓶と石が各 1 点出土した。双耳瓶は仮設天井崩壊土（25 層）の上に接して出土していることから、焼成後の天井崩落時に上から投げ入れたものである。

側壁および天井残存部からは構築材と思われる炭化材を確認した。炭化材①は天井に渡すような状態で横向きに、炭化材②は右側壁地山に垂直に打ち込まれ、炭化材③は右側壁の 6 号窯から 13 号窯の埋土中で窯主軸方向に沿って検出された。



第 17 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　６号窯平面図・断面図

6 号窯 床下断面 土層註

層名：Hue V/C ／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考

a 層：10YR7/6-4/6 ／明黄褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／黒色炭少量、6 号窯 4 次（燃焼部）床、還元色まで広く至らず

b 層：5YR4/6 ／赤褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／黒色炭少量、6 号窯 3 次（燃焼部）床、酸化被熱、奥へ向かって左側上面 a 層と同じ

c 層：5YR4/6 ／赤褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／黒色炭少量、6 号窯 2 次（燃焼部）床、酸化被熱、奥へ向かって左側上面 a 層と同じ

d 層：5YR5/8 ／明褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／ 6 号窯 1 次（燃焼部）床、酸化被熱、奥へ向かって左側上面 a 層と同じ、2 次床よりも硬化

e 層：5YR4/6 ／赤褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／ 6 号窯壁 1、地山被熱、表面 a 層類似

f 層：10YR6/6 ／明黄褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／ 6 号窯壁 2、修復壁、スサ入らず、e 層側酸化色

g 層：10YR2/1-2/2 ／黒褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／褐色中 B 多量、焼土中～大 B 多量、還元小 B 少量、6 号窯のかきあげ

h 層：10YR3/2 ／黒褐色土／ H ／ NP ／ NS ／焼土多量、褐色小 B 多量、還元小 B 多量、にぶい褐色土 4 割混在、かきあげもしくは舟底状ピット埋土

h' 層：10YR2/1-2/2 ／黒褐色土／ VH ／ NP ／ NS ／還元小～中 B 多量、明黄褐色焼土 B 多量、赤褐色小～中 B 多量、基本 g 層に焼被物がぎっしりつまる

h" 層：10YR3/2 ／黒褐色土／ H ／ NP ／ NS ／基本 h 層ににぶい褐色土 2 割程混在

i 層：10YR5/4 ／にぶい褐色土／ H ／ NP ／ NS ／還元小 B 多量、焼土小 B 少量、黒褐色土 2 割混在、6 号窯のかきあげ土

j 層：7.5YR4/6 ／褐色土／ H ／ NP ／ NS ／還元小～大 B 多量、焼土小～中 B 多量、にぶい褐色土 3 割混在、6 号窯のかきあげ土

j' 層：7.5YR4/6 ／褐色土／ H ／ NP ／ NS ／基本 j 層に還元壁多量に混じる

k 層：10YR2/1 ／黒色土／ H ／ NP ／ NS ／炭化 B 多量、褐色中 B 多量

l 層：5YR4/4 ／にぶい赤褐色で m 層の被熱層、被熱弱い、表面は a 層に類似の硬化面

m 層：10YR3/3 ／暗褐色砂壌土／ H ／ NP ／ NS ／炭化小 B 多量、還元小 B 多量、黒褐色土 3 割、褐色土 1 割混在、6 号窯奥底状ピット埋土

m' 層：m 層が還元するもの

o 層：10YR4/4-4/6 ／褐色土／ H ／ NP ／ NS ／還元小 B 多量、焼土小 B 多量、炭化小少量、黒褐色土 1 割混在、13 窯焚から 6 窯壁崩小のための充填

p 層：10YR4/4-4/6 ／褐色土／ H ／ NP ／ NS ／還元小～大 B 極多量、13 窯焚が崩れた土

q 層：10YR4/4 ／褐色土／ H ／ NP ／ NS ／焼土中～特大 B 量、13 窯焚が崩れた土

r 層：10YR3/4 ／暗褐色土／ H ／ NP ／ NS ／焼土大 B 多量、炭化大 B 多量、還元大 B 多量、褐色中～大 B 多量

sa 層：7.5YR5/8-4/6 ／明褐色～褐色土／ H ／ NP ／ NS ／還元小～大 B 多量、焼土小～大 B 多量、炭化中 B 多量、13 窯から 6 窯への充填土（sh 層まで）

sb 層：7.5YR5/8-4/6 ／明褐色～褐色土／ H ／ NP ／ NS ／焼土小～中 B 少量

sc 層：2.5YR/1 ～ 8/4 ／灰白色～淡黄色土／スサ入り粘土が還元、スサ多量、補修

sd 層：5YR5/6 ～ 5/8 ／橙色～明赤褐色土／ sa 層が被熱

se 層：5YR4/8 ／赤褐色土／明赤褐色 B(5YR5/6) が多い。sa 層が酸化被熱

sf 層：10YR7/6 ／明黄褐土／すきまに明褐色土 (7.5YR5/8) の酸化土

sg 層：sa 層が弱酸化被熱、暗い赤色の土

sh 層：7.5YR5/8-4/6 ／明褐色～褐色土／基本 sa 層と同質、酸化被熱層

i 層：10YR4/2 ／灰黄褐色砂壌土／ H ／ NP ／ SS ／還元 B 多量、褐色土 (7.5YR4/4)3 割混在

u 層：10YR3/4 ／暗褐色壌土／ H ／ NP ／ SS ／還元中 B 多量、焼土多量、6 号窯修復土の内側で焼けて酸化被熱

v 層：7.5YR3/4 ／暗褐色砂壌土／ S ／ NP ／ S ／焼土多量、褐色土 (7.5YR4/4)4 割混在、m 層と同質だが色があっぽい

w 層：10YR4/8 ／赤褐色壌土／ S ／ SP ／ SS ／炭 B 少量、砂 B 少量、地山土 B 少量暗赤褐色土 (5YR3/4)5 割混在

xa 層：5YR/1 ～ 7/2 ／灰白色修復壁、スサがとても多い

xb 層：5YR/1 ／灰色修復壁、スサなしい

xc 層：7.5Y3/2 ／オリーブ黒色修復壁

y 層：自然堆積、透き通った緑色の釉がびっしり、かなりの高温が出た痕跡

焼成部

最大幅が窯中腹より下がる下膨れ状で寸胴な平面形状を呈する。床は 2 枚、壁には 3 回以上の修復を確認した。平均傾斜角は 39°。

床面は粘土塊置台を並べて段構築する。下段と最上段付近は置台の崩落が激しいが、中段～上段にかけて良好に残存する。

壁には所々に修復の痕跡が認められ、最終壁はかなりの凹凸をもって蛇腹状にうねる。火のめぐりを調節する何らかの工夫だろうか。

排煙口及び煙道

不明。おそらく奥部開口型となる。

壁・床の修復

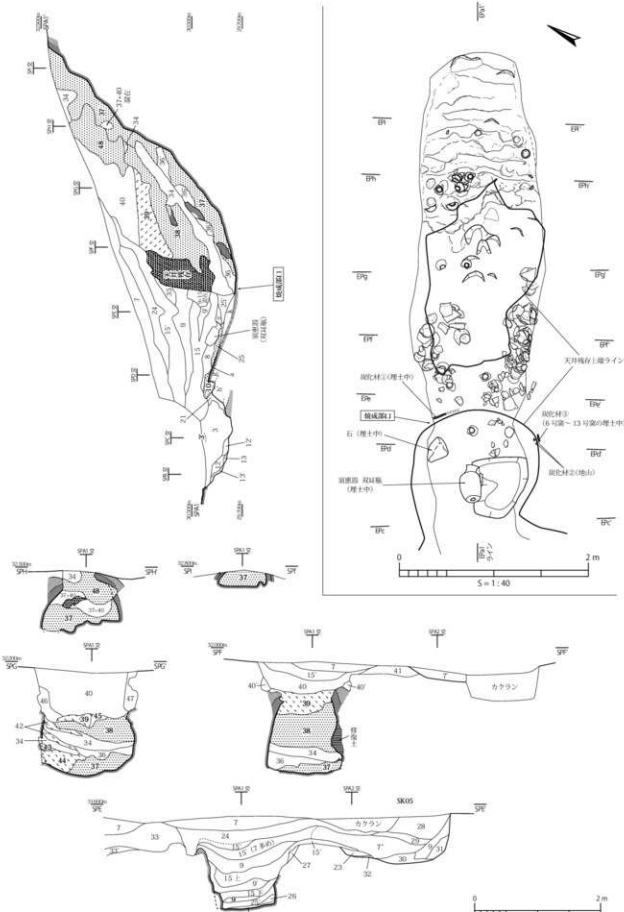
各部位の項でも述べている通り、床や壁の修復が多数あり、壁には指ナデの痕跡が生々しく残る。窯体は下層で検出された 13 号窯焚口から約 1.5m 奥にずらして構築している。EPe － e' 断面と f － f' 断面では 13 号窯を大きく掘り込んで 6 号窯を構築した様子が確認できる。13 号窯側壁部分には掘削後に sa ～ sh 層の土を充填して窯幅を調節している。

床下遺構（舟底状ピット）

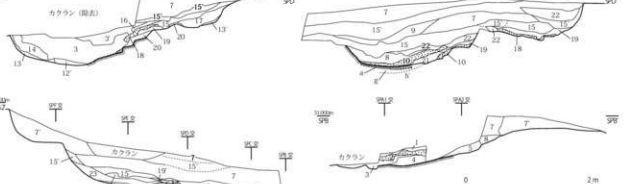
燃焼部～焼成部の一部に及ぶ範囲（縦 211cm × 横 114cm）に広く掘削する。埋土の上に酸化被熱層（l 層）が認められるため、l 層以下は埋まった状態で焼成が行われたと判断できる。l 層直上の還元被熱層（m' 層）は k 層によって掘り込まれており、最終床焼成後に浅く掘削されたと考えられる。EPe － e' 断面の下底面にも酸化被熱層（l 層）が薄く残るが、地山面や他の断面では被熱が確認できないため、掘削時に残った床面の一部だろうか。

埋土

燃焼部床付近に被熱土が混じる土（25 層）が残り、仮設天井崩壊土と推測される。



第 18 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　遺物出土状況図・セクション図１



第 19 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　6 号窯セクション図 2

6 号窯 セクション 土層註

層名：Hue V/C ／土色・土性／密度／可塑性／粘性／斑紋・夾雑物・備考

1 層：10YR2/1 ／黒色埴土／ H ／ SP ／ NS ／褐色土大礫極多量（4 割）、還元大 B、焼土大 B 極多量。

2 層：10YR1.7/1 ／黒色埴土／ S ／ SP ／ NS ／焼土大 B、炭化大 B 多量、還元大 B 少量。炭層

3 層：10YR2/1-2/3 ／黒褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／明褐色土と褐色土が 2 割混在。還元小～特大 B 極多量。炭化特大 B、焼土特大 B、焼土小～中 B、多量

3' 層：基本 3 層で、混在物も同じ。褐色 B が 3-4 割。

4 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ H ／ VP ／ SS ／還元中 B、焼土中 B 多量。黒褐色 B が 1 割

5 層：10YR4/3 ／にぶい黄褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／還元小～中 B 極多量

6 層：10YR4/2 ／灰黄褐色埴土／ H ／ P ／ S ／炭化小 B、還元小 B 少量

7 層：10YR4/6 ／褐色埴土／ S ／ EP ／ SS ／還元中～特大 B 極多量、焼土中 B 多量

7' 層：10YR4/6 ／褐色埴土／ H ／ SP ／ NS ／還元大 B 少量

7" 層：9 層に近い 7 層

8 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ S ／ VP ／ S ／還元小 B、焼土小 B 微量

9 層：10YR4/4-4/6 ／褐色砂埴土／ S ／ SP ／ SS ／還元中 B 少量

9' 層：9 層ベース。還元特大 B、炭化中～大 B 多量

9" 層：7.5YR4/4-4/6 ／褐色土／ P 層とやや異なり粘質。流土か

10 層：10YR2/1-2/2 ／黒褐色埴土／ S ／ P ／ S ／焼土中～大 B、炭化中～大 B 多量。炭層

11 層：10YR4/6 ／褐色埴土／ S ／ SP ／ SS ／隙間に黒褐色土 3 割。焼土小 B 少量

12 層：10YR2/3 ／黒褐色埴土／ S ／ SP ／ SS ／褐色砂土中～大 B が 3-4 割。還元大～特大 B、炭化小 B、焼土中 B、多量

12' 層：10YR2/3 ／黒褐色埴土／ S ／ SP ／ SS ／基本 12 層と同じ。褐色 B 少量

13 層：10YR4/6 ／褐色砂埴土／ S ／ NP ／ S ／黒褐色土が 3 割。炭化小 B 少量

13' 層：10YR4/6 ／褐色砂埴土／ S ／ NP ／ S ／基本 13 層と同じ黒褐色土 5 割。炭なし。

14 層：10YR3/3 ／暗褐色砂埴土／ S ／ NP ／ SS ／炭化小～大 B、焼土小～大 B 多量。褐色砂土 3 割混在

15 層：10YR3/3 ／暗褐色埴土／ S ／ SP ／ NP ／還元大 B、焼土大 B、少量。

15' 層／ 7 層と 15 層の混在層。還元 B 特大が極多量、炭片もあり

16 層：10YR4/3 ／にぶい黄褐色埴土／ H ／ NP ／ NS ／隙間に黒褐色土が 4 割。還元大 B、焼土小 B、炭化小 B、多量

17 層：10YR2/1-2/2 ／黒褐色埴土／ S ／ SP ／ S ／還元大～特大 B 極多量。焼土 B 大少量。SK04 理土

18 層：10YR1.7/1 ／黒色埴土／ S ／ NP ／ SS ／炭化小～大 B 極多量。炭層

19 層：7.5YR5/6 ／明褐色砂埴土／ VH ／ NP ／ NS ／焼土大 B、炭化大 B の隙間に暗褐色土を 3 割ほど（たたきしめられたように、しっかりしている）

19' 層／ 19 層の夾雑物が入らない層

20 層：10YR3/3 ／暗褐色埴土／ H ／ P ／ SS ／褐色粘土小 B が 2 割、還元中 B、少量

21 層：10YR3/2-2/1 ／黒褐色埴土／ S ／ P ／ S ／焼土中 B、還元 B、炭化中 B、多量。3 層に似る

22 層：15 層に黒褐色 (10YR3/2) が 3 割程混ざる。炭多量

23 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ S ／ VP ／ S ／還元中 B、炭化 B 少量。暗褐色土 5 割

24 層：基本は 15' 層だが、15' 層のように、層行等入らない。焼土小と炭化小 B のみ。

25 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ S-H ／ P ／ S ／所々、赤褐色土 (2.5YR4/8) や明褐色砂質土 (10YR6/6) （転設大甘崩壊土）

25' 層：7.5YR4/4-4/6 ／ S ／ P ／ S ／赤褐色焼土大 B、白色生焼け還元 B 多量。還元中 B 少量

26 層：2.5YR4/8-2.5YR3/6 ／赤褐色～暗褐色／還元 B 極多量、隙間に暗褐色 (10YR3/3-3/4) が入る。ガラガラ

27 層：7.5YR4/4-4/6 ／褐色砂埴土／ S ／ SP ／ SS ／還元 B、炭化小 B 微量

28 層：7.5YR4/6 ／褐色砂埴土／ S ／ SP ／ SS ／還元特大 B、焼土小 B 少量

29 層：7.5YR5/6、7.5YR4/2 ／明褐色埴土、灰褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／明褐色土、灰褐色土 5 割ずつ。還元小～大 B、炭化小 B 多量

30 層：7.5YR5/6 ／明褐色（軽）埴埴土／ VH ／ P ／ SS ／還元大 B（粘土を置いた痕跡）

31 層：7.5YR4/6 ／褐色埴埴土／ S ／ P ／ SS ／還元 B（地山ではない、夾雑物入らず）

32 層：10YR5/6-6/6 ／明黄褐色～黄褐色軽埴土／ S ／ VP ／ S ／（粘土を置いた痕跡）

33 層：7.5YR4/4-4/6 ／褐色埴土／ H ／ SP ／ SS ／還元特大 B 極多量

33' 層：基本的に 33 層と同層。33 層はやで還元 B 小さく、微量

34 層：7.5YR5/6 ／明褐色埴埴土／ S ／ VP ／ S ／白色粘土小 B 多量。焼土 B 少量。

35 層：7.5YR4/6-5/6 ／（明）褐色埴土／ H ／ SP ／ NS ／明赤褐色 B(5YR5/6-5/8) 極多量。還元小～中 B 多量、還元特大 B 少量

36 層：5YR4/8-4/6 ／明褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／隙間に褐色 (10YR4/4) が 4 割

36' 層／ 36 層と同質だが明褐色 B が 5 割で粘性強い。

37 層：還元大 B の隙間に褐色 (10YR4/4-4/6) が 5 割（大甘崩壊土）

38 層：還元大 B やスサ入り還元 B の隙間に入るように（黄）褐色 B が 5 割程入る。焼土中～特大 B 極多量、しまりない（大甘、原壁の崩壊土）

39 層：7.5YR4/3-4/6 ／褐色埴土／ L ／ P ／ SS ／わずかに還元中 B（地山崩壊土）

40 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ H ／ P ／ SS ／炭化中 B、焼土中 B、灰黄褐色 (10YR7/2) 埴埴土中～大 B、多量に混在

40' 層：7.5YR5/6-4/6 ／（明）黄褐色埴土／あとは 40 層と同じ

41 層：7.5YR4/3-4/4 ／褐色埴埴土／ S ／ VP ／ SS ／流土層

42 層：5YR5/8 ／明褐色埴埴土／ S-H ／ P ／ SS ／褐色埴土 (10YR4/4)3 ～ 4 割混在。焼土小～中 B 多量（地山崩壊土）

43 層：2.5YR4/6 ／赤褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／褐色埴土 (10YR4/4)1 ～ 2 割混在（地山機化被熱崩壊土）

44 層：2.5YR4/6 ／赤褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／褐色埴土 (10YR4/4)2 割、明褐色埴埴地山土 3 割と混在。還元天井特大 B 含む、還元小 B が 1 に集中。（地山機化被熱崩壊土）

45 層：7.5YR4/6-5/6 ／（明）褐色埴土／ S ／ VP ／ SS ／焼土 2 割混在。焼土大 B、還元中 B 少量（40 層と 38 層の中間）

46 層：10YR4/3-4/6 ／褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／焼土小 B、還元小 B 少量（40 層より薄る）

47 層：基本は 40 層、ただし、明赤褐色埴埴地山土が 3 ～ 4 割混在。

48 層：7.5YR4/6 ／褐色埴土／ S ／ P ／ SS ／焼土 B(5YR4/8) 小～大 2 割程、還元小～大 B 多量。焼土が下に集中（大甘崩壊土）

焼成部口の天井部は良好に残存し、絞り込みが明瞭である。

焼成部は下層に還元被熱した天井崩壊土、その上層に地山崩壊土、隙間に地山質の流土が入り込む。

また５号窯同様、掘り方断面が焼成部口を境に SPE － E' では台形～方形状であるが、SPF － F' 以降の奥部は楕円形状あるいは天井部が丸くなり、ここでも天井構造の違いが断面に表れているものと推測される。

遺物出土状況

坏 A、埦 B、皿 A、皿 B、盤 A、壺瓶類、鉢類、甕類、専用焼台、陶錘を確認した。高台部分の転用焼台も含まれる。

床面出土が多く、焼成部右側壁沿いに須恵器が寄せて積み上げられており、片付けと思われる。

第 20 図　6 号窯舟底状ピット　平面図

② 窯外部

前庭部

13 号窯を切って焚口前面土坑を掘り込む。窯右側部に向かってステップがあり、SK04・SK05 への昇降に利用したものと考えられる。

焚口前面土坑手前には前庭部を囲むようにしてやや不規則にピットが並ぶ。何らかの施設と考えられるが、覆屋とするには配列に難があり、機能は不明である。

③ 窯側部

窯右側部で SK04 と SK05 を検出した。平場をもち、粘土層（30･32 層）を下面に伴っているため、粘土置き場や作業場としての機能が想定される。

(4) 13 号窯

6 号窯の下層から検出した。平成 12 年度試掘調査時に既に 12 号窯まで窯番号を付けていたため、新たに 13 号窯として追加した。

13 号窯構造分類

構造名：A2 類（地下式焼成部掘り抜き式）	焚口・焼成部：あ類	排煙口・煙道：－類

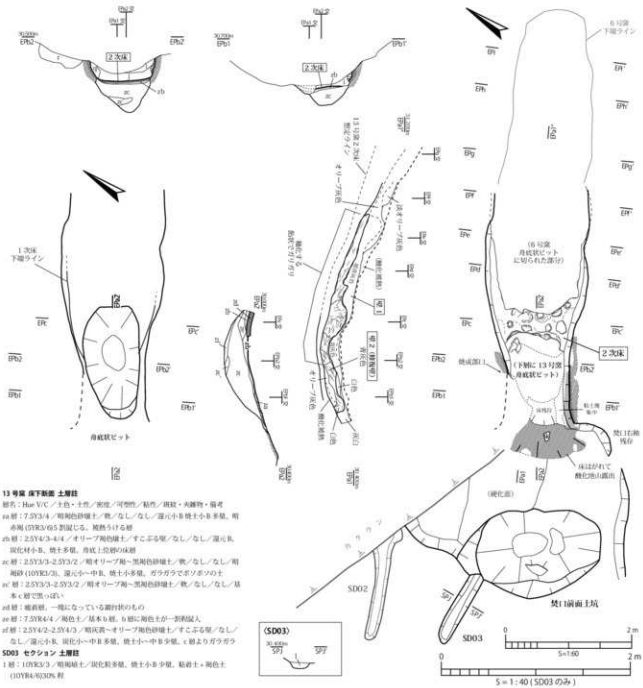
13 号窯窯体計測表（単位は cm、cm 以外は記入、最終床基準）

窯体実効長：－	最大幅　：152	窯体実効高　：－	焼成部床傾斜：15°(3 ～ 25)
窯体水平長：残 175	焚口幅　：推 115	窯体内最大高：－	燃焼部床傾斜：－ 15°
窯体実長　：残 180	焼成部口幅：98	窯体床面積　：－	残存　：焚口左側部欠け
焼成部長　：(水) 残 97	奥壁幅　：－	焼成部床面積：残 1.17㎡	焼成部～奥壁欠け
：(実) 残 96	煙道径　：－	燃焼部床面積：推 0.83㎡	修復回数　：壁 1、床 1
燃焼部長　：78	煙道長　：－		時期　：9C 中～後

① 窯体部

焚口と燃焼部

焚口は右側部が残存し、前面には酸化焼成痕が広がる。一般構造型（あ類）に分類したが、下降傾斜するため、過渡的な構造かもしれない。燃焼部床は手前がわずかに残り、床奥部は舟底状ピットに切られ、壁は高温被熱のため飴状にガラス化する。



第 21 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　13 号窯平面図・断面図

焼成部口

絞り込み位置は明瞭で、EPb1 － b1' 断面と b2 － b2' 断面の右側壁に、修復の痕跡がわずかに認められる。

焼成部

床の大半は 6 号窯の大型舟底状ピットに切られて消失する。燃焼部同様に最終床と壁は飴状にガラス化する部分があり、 床に敷き詰められた粘土塊置台および専用焼台全体も癒着し 1 枚の塊となっている状況が認められた。

横断面の床面から復元すると平均傾斜角 15°で、6 号窯よりも緩い傾斜である。主軸には 3 ～ 4°の若干のずれが認められる。

壁・床の修復

断面で見ると、6 号窯 EPa1 － a1' 断面で床の嵩上げが、EPc － c' 断面で壁の修復があり、床 2 枚（嵩上げ 1 回）と壁 2 枚（修復 1 回）を確認した。

床下遺構（舟底状ピット）

縦 178cm ×横 86cm の範囲を掘削する。ピット上面に被熱床面があることから、最終焼成（2 次床）時はピットが埋まった状態で、なおかつ焼成後も床が壊されなかったと判断される。

遺物出土状況

遺物量は少ないが、坏 A、坏 B 蓋、盤 A、壺瓶類、焼成部に敷き詰められた置台や焼台を確認した。

②　窯外部

前庭部

左側部は撹乱によって切られている。硬化面をはさんで、前面土坑がある。土坑からは排水溝（SD03）が延びる。

２　灰原

⑴　4 号窯の灰原

A 区および D 区に広がる。窯焚口右側部には 6 層出土土器が集中する（写真図版参照）。D 区側は近現代の切土と盛土によって撹乱が激しく、残存状況は悪い。灰層下層の斜面に長く堆積する 21 層は窯掘削に伴う土となるかもしれない。

⑵　5・6・13 号窯の灰原

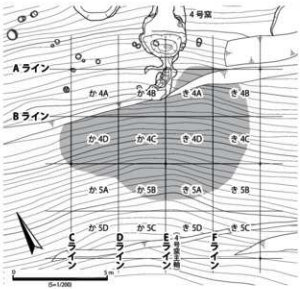
E 区および E － I 区に広がる。4 号窯同様に撹乱が激しいが、調査区西側で厚く灰層が残る。3 基の灰原範囲は現段階では明確に分けられなったが、遺物の観察で明らかにしたい。

第３節　まとめ

今調査では、須恵器窯跡 5 基（4 号窯＝ 4 － I 号窯および 4 － II 号窯：9 世紀前半、5 号窯：10 世紀前半、6 号窯:9 世紀末～ 10 世紀初頭、13 号窯:9 世紀中頃～後半）、2 カ所の灰原、土坑（SK01・SK02・SK04・SK05）、炭窯（SK03）、工房跡？（SK07）、焼土坑（SK06・SK08）、土師器焼成坑（SJ01 ～ 04）を検出した。そのうち窯跡および窯関連遺構、灰原の報告を行った。

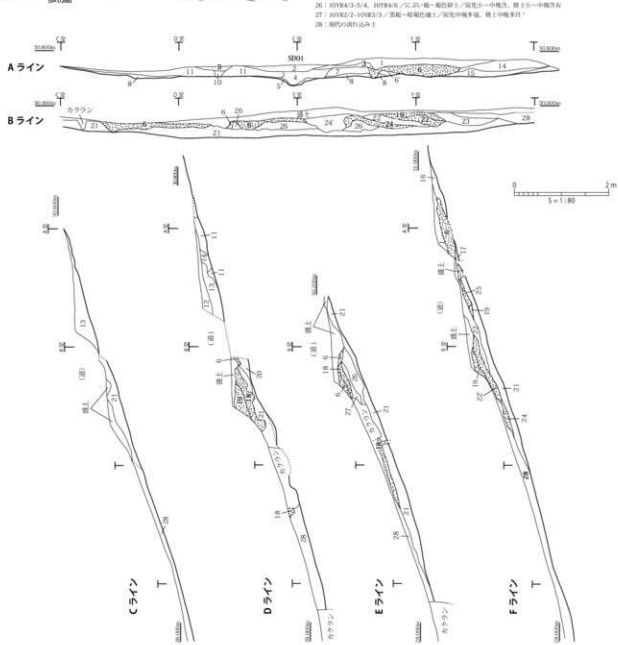
平成 13 ～ 15 年度発掘調査区域と同様果樹園造成による削平や撹乱が至る所に認められるが、窯の天井や床、焚口、燃焼部などの残存は比較的良好であった。すべて地下掘り抜き構造で、特に 5 号窯と 6 号窯では、焼成部境の絞り口が完全に残っており、さらに天井の一部も残存していた。また、全ての窯で壁・床の修復や床嵩上げが認められ、造り替えや再利用されている窯もあった。4 号窯では、窯全体を奥へずらした造り替えの痕跡が明らかで、4 － I 号窯（古）と 4 － II 号窯（新）に分けた。6 号窯と 13 号窯は重複しており、13 号窯廃棄後に空洞を利用して 6 号窯が構築されているが、傾斜と主軸を変えて改造している。9 世紀代の須恵器窯（4 号窯・13 号窯）は、これまで南加賀古窯跡群での検出が 5 基のみであることから、とても貴重な事例となる。窯跡の詳細な操業時期については、遺物編で明らかにしていきたい。

窯付設の施設として、窯の前庭部に焚口前面土坑が掘り込まれ、そこから排水溝（SD01 ～ 03）が延びることと、窯の左右で作業場や廃棄場として使用したと考えられる土坑状の窪み（SK01・SK02・SK04・SK05）を形成することが特徴となっている。4 号窯と 6 号窯にはピット群がみられ、

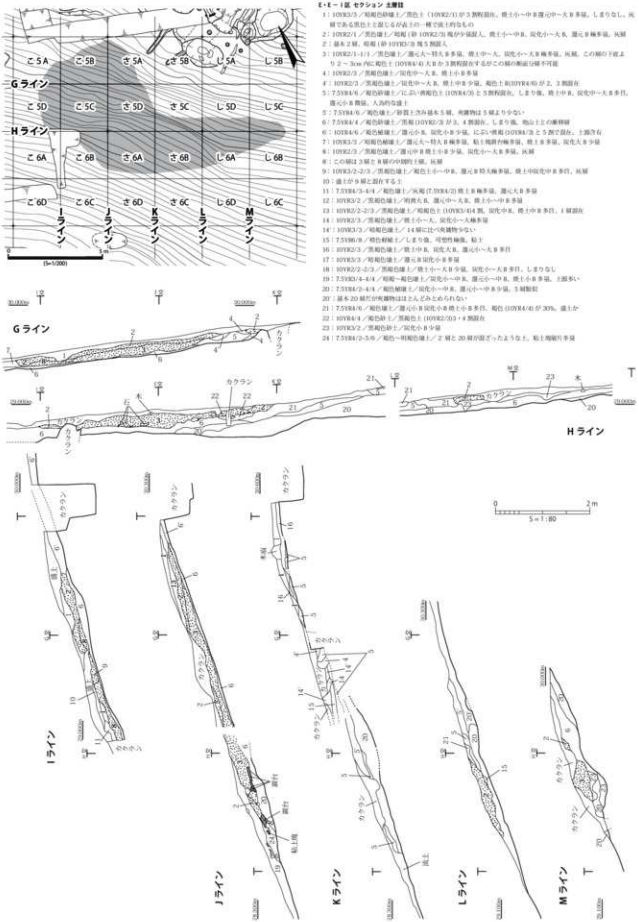


A・D区セクション 土層註

1：10YR4/2～10YR4/4／灰黄褐色～褐色土／遺物多量、盛土と見ざるとも、しまりあり
2：10YR4/4-6/6／褐色砂土／遺元多微土 8φ0.5～1.5多量、しまりあり
3：10YR4/6／褐色砂土／遺元多微土 8φ0.5有、しまりあり
4：10YR3/3-10YR4/6／暗褐色～褐色土／遺元多、微土、炭多量、しまりややあり
5：10YR4/2-10YR4/4／にぶい黄褐～褐色土／遺元多微土 8少量、しまりややあり
6：10YR3/3-10YR3/2／黒褐～暗褐色土／焼土、炭多量、土器多量、しまりややあり。炭層
6'：10YR4/4／褐色土／焼土多微量、地山に近いかんじ、しまりあり
7：10YR4/4-6/6／褐色土／焼土多φ10、遺元多少量、しまりあり
8：10YR4/4／褐色土／焼土多遺元多微量、しまりあり
9：7.5YR4/6／褐色土／焼土含有、しまりあり
10：7.5YR4/4／褐色土／遺元多、焼土、炭多量
11：10YR4/4-6/6／褐色砂質土／焼土多遺元多少量、しまりあり
12：10YR4/3-10YR4/4／にぶい黄褐～褐色土／遺物含、遺元多、炭少量、しまりややあり
13：10YR4/3-10YR4/4／にぶい黄褐～褐色砂土／遺物多量、焼土多、遺元多、炭含有、褐色土含、しまりややあり
14：10YR4/3-10YR4/4／にぶい黄褐～褐色砂土／遺物多量、炭含有、しまりややある、混れこみか
15：10YR4/4／褐色土／炭微量、地山に似る、しまりややあり
16：10YR4/3-10YR4/6／にぶい黄褐～褐色土／粘性強、焼土多混入、しまり強い
17：10YR3/3-10YR4/6／暗褐～褐色砂土／焼土ブロック混入、しまり強い
18：10YR3/3-3/4／暗褐色壌土／炭化小粒～中粒多量、焼土中粒少量、灰層（6層類似）
19：10YR3/4-4/6／暗褐～褐色壌土／炭化小粒～中粒多有、18層と似るがながらすい
20：10YR5/6／にぶい黄褐色粘壌土／粘性強、炭化微小粒微量、褐色砂中粒含有
21：10YR5/3、10YR4/4～4/6／にぶい褐～褐色壌土／土器含有
22：7.5YR3/4-4/6／暗褐～褐色土／焼土微細多量、遺元小～大粒多量、炭化中粒含有
22'：10YR2/3-3/3／黒褐～暗褐色壌土／焼土小、炭化小粒少量、土器多量
23：10YR4/3、10YR4/4～4/6／にぶい褐～褐色土／焼土中粒少量、遺元小粒多量、土器多
23'：10YR3/2-10YR3/3／黒褐～暗褐色土／炭化小～大多量、焼土小粒微量、6層と18層に似る、灰層
24：24層と似る（19層とも似る）24層よりもうすく、褐色土砂質多が混在
25：10YR2/2／黒褐色壌土／炭化材小粒多量、焼土中～大粒多有、灰層
26：10YR4/3-5/4、10YR4/6／にぶい褐～褐色砂土／炭化小～中粒含、焼土小～中粒含有
27：10YR2/2-10YR3/3／黒褐～暗褐色壌土／炭化中粒多量、焼土中粒多有？
28：現代の流れ込み土



第 22 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　4 号窯灰原（A・D 区）平面図・セクション図



第 23 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群２　５・６・13 号窯灰原（E・E-Ⅰ区）平面図・セクション図

衝立、足場杭、覆屋等の機能が想定された。

窯跡に伴う灰原については断面でも明らかなように、近現代の撹乱が多いが、数層の灰層を確認した。5・6・13号窯灰原は重複するため、遺物編にて各窯範囲の特定を試みたい。

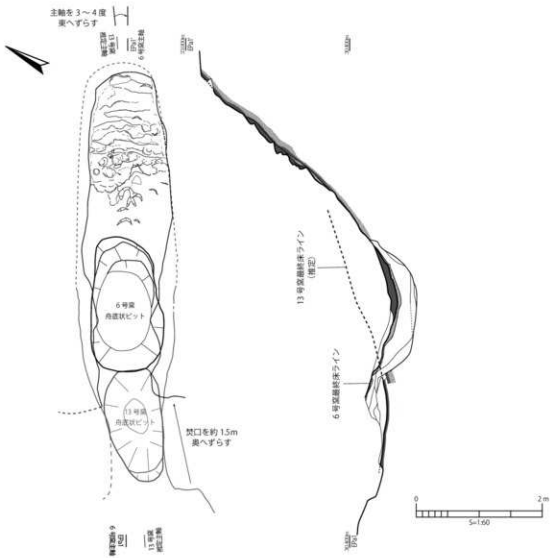
この他、土師器焼成坑（SJ01 ～ 04）や炭窯（SK03）、焼土坑（SK06・SK08）など被熱を伴う遺構が多く検出されている。土師器焼成坑は土師器を焼成した遺構で、連なって構築されていた。炭窯は底面に排水溝を伴う大型遺構で、炭の焼成に関わるものである。また、最も標高の低い調査区端で検出された平坦な底面をもつ土坑状遺構（SK07）は、工房跡と想定される。続きが調査区外に及ぶため、保存区域にもこのような遺構が確認される可能性が極めて高い。これらの遺構については補遺編で詳細を報告する。

参考文献

小松市教育委員会 2005 年『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』

望月精司 2010 年「第 1 部第 2 章第 3 節 窖窯構造をもつ須恵器窯跡の各部位構造とその理解」

「第 3 部第 9 章 北陸」『古代窯業の基礎研究―須恵器窯の技術と系譜―』窯跡研究会



第 24 図　二ツ梨豆岡向山窯跡群 2　6 号窯・13 号窯（合成）平面図・断面図

第Ⅲ章　小松城跡発掘調査

第１節　調査に至る経緯等

小松市丸の内町地内において、住宅新築工事が計画された。この地は、隣接地のアパート建設工事に伴い試掘調査が実施されており、周知の埋蔵文化財包蔵地である「小松城跡」の曲輪の一つである中土居に該当することが判明していた。そのため、平成 24 年３月 16 日付けで埋蔵文化財の取扱いについての協議書が原因者より提出された。同日付けで、埋蔵文化財に対し保護措置が必要との内容で回答書を出している。その後、小松城の石垣という遺跡の重要性から、保存したまま住宅を建築できないかとの協議を行った。しかし、地盤調査の結果、改良杭本数の調整は難しいとの結論に至り、影響範囲 160㎡を対象に緊急発掘調査を実施することとなった。平成 24 年４月５日付けで、石川県教育委員会へ「土木工事のための発掘届」が、また、小松市教育委員会へ４月 24 日付けで発掘調査の実施依頼書が提出された。

調査費については、個人住宅が原因であることから、国庫補助事業として実施した。５月７日付けで協定書を締結し、５月 11 日より現地調査に着手した。

第２節　調査の経過

１　調査の概要

調査区は、中土居の南東隅部付近に該当する。もとは水田であったが、土砂及び砕石により道路面まで埋立てられていた。重機による表土除去では、その下の水田耕作土まで除去を行った。以下の面から人力による掘削を開始し、石垣の検出作業を行った。４級基準点測量及び３級水準点測量は業者に委託して行い、その基準点を基に５ｍグリッドを調査区に設定した。調査区の全体図及び測量ポイントの位置は、国土座標を基準に光波測距儀により作成した。石垣に関しては、効率性を重視し、検出状況に合わした測量ポイント設定し、手実測で実施した。図化は、１/20 及び１/50 を必要に応じて使い分けている。

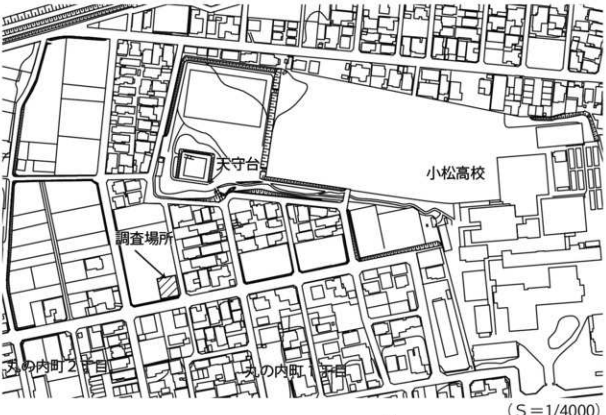
２　調査の経過

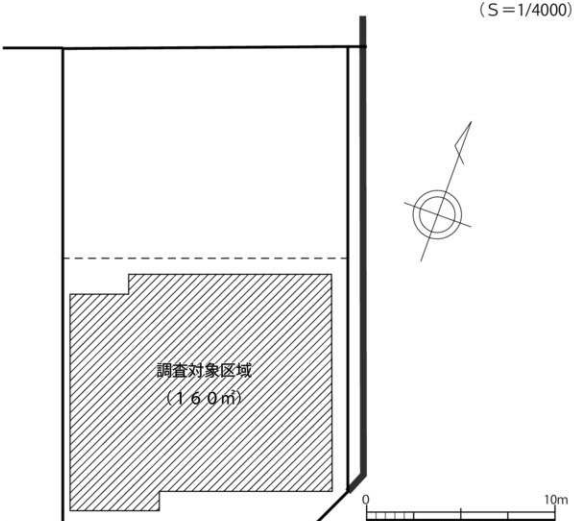
平成 24 年５月 16 日より、作業員を投入しての現地調査を開始した。調査区周囲に排水溝を掘削、石垣前面の検出を行う。石垣は下底２段のみであり、城内側遺構面は削平されていることが判明したため、裏込め石の露出作業も同時に行った。５月 22 日より、城内側の精査を実施し、造成状況の確認を行った。合わせて、石垣の図化作業を継続して行い、５月 27 日までにほぼ完了することができた。翌日より断ち割り作業に入り、石垣背面の確認作業を行った。

調査区内の湧水はとても激しく、調査を難航させるものであった。また、湧水は砂の噴出しを伴うため、石垣前面が直ぐに埋まってしまい、検出状態を維持するのがとても困難であった。よって、石垣背面に深い穴を掘り、そちらに水を流す方法を試みたが、胴木下部まで水位を下げることはできなかった。６月１日には、全ての作業を完了し、４日に重機による埋め戻し、５日に器材の撤去を行い、原因者に対し引き渡しを行った。

３　出土品整理

出土遺物の整理は、洗浄・注記・分類・接合・実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成 26 年度に実施した。デジタルトレース等の報告書作成作業についても、平成 26 年度内に実施したものである。





第 25 図　調査区の位置及び配置図

第３節　既往の調査

１　小松城跡の概要

小松城は、梯川下流の低湿地に築かれた平城である。標高は、本丸で約４ｍ、三の丸で約 2.5 ～３ｍを測る。各曲輪の周囲を水堀が囲み、北側と西側の外堀を梯川とする。堀幅が広く、各郭が島状に浮かぶ姿から、「小松の浮城」とも呼ばれた。縄張りは、本丸の周囲を郭が二重に囲むように、二の丸、三の丸、中土居、葭島、枇杷島、竹島、牧島・愛宕、泥町口が配置されている。東西約 750 ｍ、南北約 950 ｍ、面積約 71ha（21.6 万坪）という広大な敷地をもつ。

寛永 16 年（1639）前田利常が隠居城とすることを幕府より許可されると、ほぼ新しい城に造りかえた（寛永の大改修）。城内に庭園や花畑を設け、数寄屋を建てるなど、利常の好みが反映されたという。現在は、本丸及び二の丸が県立小松高校の校地、三の丸が芦城公園となっている。

２　現存遺構と調査履歴

本丸櫓台石垣は、完全な姿で現地に残る唯一の遺構である。底辺で北・南面が約 21.3 ｍを測り、東・西面は約 19.8 ｍを測りやや短い。現地表面から８段に積まれ、高さは平均で約 6.3 ｍである。西面に西から登る階段が付き、北面には井戸の上屋のほぞ穴が刳られている。石材は、地元産の凝灰岩を主体としながら、隅角を中心に戸室石を使用している。切石積石垣で、不整形石を使用した乱積である。築造時期は不明であるが、利常在城時には完成していたと考えたい。

本丸堀石垣は、西側一部が残存するのみである。櫓台石垣と同様の積み方から、ほぼ横目地の通る積み方（四方積か）へと続く。現存部分では戸室石の使用は認められないが、石川県の発掘調査（後述）で戸室石石材が出土しており、本丸（旧二の丸含む）主要部分には使用された可能性がある。

発掘調査は、石川県立小松高等学校の校舎改修工事を原因とした調査が４次（平成 11 年度～ 16 年度）にわたり行われている。二の丸内部（利常在城時は三の丸）では、井戸跡や礎石跡は確認されているが、後世の攪乱や湧水の激しさなどにより、屋敷跡や建物跡の構造把握には至っていない。しかし、本丸側と二の丸にかかる調査区（１次調査区）では、堀跡を挟んで石垣が検出されるなど、城郭構造解明につながる成果が出ている。

利常入城以前の初期城郭の可能性がある遺構は、１次調査の井戸群、３次調査区の礎石、４次調査で確認された石垣である。１次調査区 B 区では、調査区南端に井戸群が確認されている。調査区全域で９基あり、その内５基が南端に所在する。井戸枠の残るものは、全て結桶式である。この場所は、天和３年（1683）の「小松御城中絵図」（以下、天和３年絵図）によると、馬廻り番所の北側空白地にあたり、利常入城以降の場内では井戸が所在は明確ではない。ただし、後述する上・下層面の分層が確認できないことから、上・下どの面とみるかで評価が変わってくる。標高から、おそらく過去の造成により上層面が存在しないと考えるが、確証はない。17 世紀前半の遺物を含む SK28 が SK30（井戸）を切っているのならば、調査区南端群の井戸はそれよりも古い時期という判断が可能である。

３次調査１区は、天和３年絵図によると、二の丸南側入り口の内枡形門付近から北側の空閑地に位置する。そこから南北軸に並ぶ２基の礎石（根石か）が検出されている。調査報告書では、両者の間隔は約４ｍあり、２脚の門ではないかと推測している。しかし、調査区で検出された礎石が全てではなく、失われている可能性もある。その検出レベルから、下層遺構だと判断されている。絵図にある枡形門の二の門は、櫓門とされ東西方向に開口する。前述の礎石が門であるならば、開口方向が同じという共通点が指摘できる。

４次調査区は、３次調査区よりさらに北側の空閑地に該当する。調査区北端で長さ２ｍ、高さ 0.9

m部分が検出されている。写真でみる限り、野面であり、背後のSK08から16世紀後半～17世紀初頭の備前系擂鉢が出土していることから、下層面の時期と考えられている。しかし、当該石垣についても、裏込め石内に燻し瓦片を含むことから、その年代を判定する必要がある。

石垣は、一次調査区において、東西方向に長さ6.5 m、高さ2 m（4段）分が確認されている。基底部には、角材の胴木が設置され、海抜－2 mの位置にある。下2段が粗加工石積みで、上2段が切石積である。報告では、4段目を寛文地震後の積み直しと想定している。金沢城石垣との比較では、4期（寛永年間頃（1624 ～ 1644））にあたる五十間長屋（西）下部に類似している。三の丸では、公園整備工事における立会調査で、大手部分の堀と石垣の大部分が残存していることが確認された。地中には大手門から橋へ放射状に延びる取り付き部分の石垣や、橋西側の石垣（東側は崩れている）、対岸の護岸石垣が残存している。大手側（南面）の東隅部付近では、東西方向に長さ11.3 m、高さ2 m（4段）分の石垣が確認された。石垣の基底部は、丸太材の胴木が設置され、海抜0.2 mの位置にある。二の丸に比べ、約2 m高い位置からの構築である。また、胴木の設置された面が、砂層ではなく、腐植土上からであった。最下段のみが粗加工石であり、根石とみられる。上3段が切石積で、正面縁取り加工と不整形石の使用から、金沢城6期（宝暦～安永年間頃（1751 ～ 1781））相当と考えられる。

以上の調査によって、石垣が比較的地中に残存していることが分かった点が大きな成果といえる。また、三の丸では、絵図に描かれなかった石垣が検出され、利常死後にも大きな普請があった可能性がある。城代・城番時代の小松城のあり方について、再考する必要があろう。

一方で、利常在城時より前の遺構が存在することも確実視される。天正期まで上る軒平瓦の年代観が許容されるのならば、少なくとも二の丸部分については、村上氏が城主だった期間に、瓦葺き建物が存在した可能性がある。

また、遺構から加賀焼や珠洲焼が出土し、一向一揆勢の小松城よりも前から土地利用された場所であったようで、報告では墓地であった可能性も指摘されている。

小松高校敷地内での調査で把握された、大改修後以降と考えられる上層面と、大改修前の下層面が確認されたことは重要な成果といえる。今後、下層面と遺物との関係を再検討し、評価を確定させることが必要となっている。

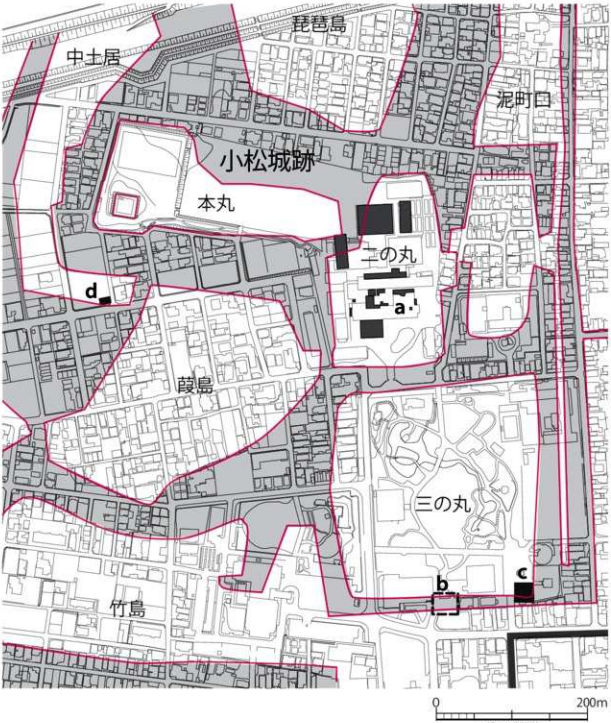
引用参考文献

新修小松市史編集委員会 1999『新修小松市史資料編1 小松城跡』石川県小松市
石川県教育委員会・(財)石川県立埋蔵文化財センター 2007年『小松市小松城跡』

第4節　発見された遺構

1　確認遺構の概要

今回の調査では、小松城中土居の南東から北西に伸びる方向の石垣と、城内及び堀の一部を検出している。中土居は、本丸の西側を囲むように配置された郭で、堀護岸に石垣の使用頻度が高い。調査地点は、庭園であった葭島に渡る手前の位置にあり、堀幅が最も広い箇所である。承応元年（1652）「加州小松城之図」によると、幅八十五間（約154 m）、深さ五尺（約1.6 m）である。確認された石垣は、2段のみであり、堀底までは0.9 mであるため、現地が水田化されるまでに少なくとも0.7 m程度は削られていると考えられる。また、安政2年（1855）「小松城御堀石垣高サ并渡り間数控御絵図」によると、兎門前の引き橋土台で、水上4尺2寸、水中1尺8寸、地中2尺8寸を測る。概ね高



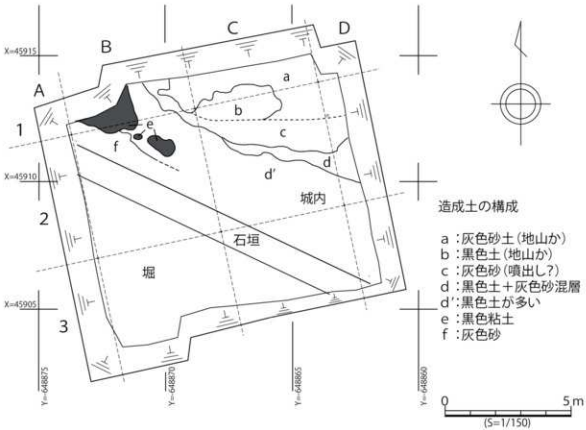
a　発掘調査（H11～16）　調査主体：石川県

b　工事立会い調査（H20）　調査主体：小松市

c　発掘調査（H21）　調査主体：小松市

d　本報告の調査区（H24）　調査主体：小松市

第 26 図　小松城における調査履歴図



第 27 図　グリッド配点・遺構構成・造成土の状況図

さ 2.67 m で 6 段程の石垣と想定される。注目すべきは、幕末の時点で既に約 0.85 m分地中に石垣が埋まっていたとみられることである。石垣 2 段分程の高さであり、近代に破壊を免れた要因となった可能性が指摘できる。

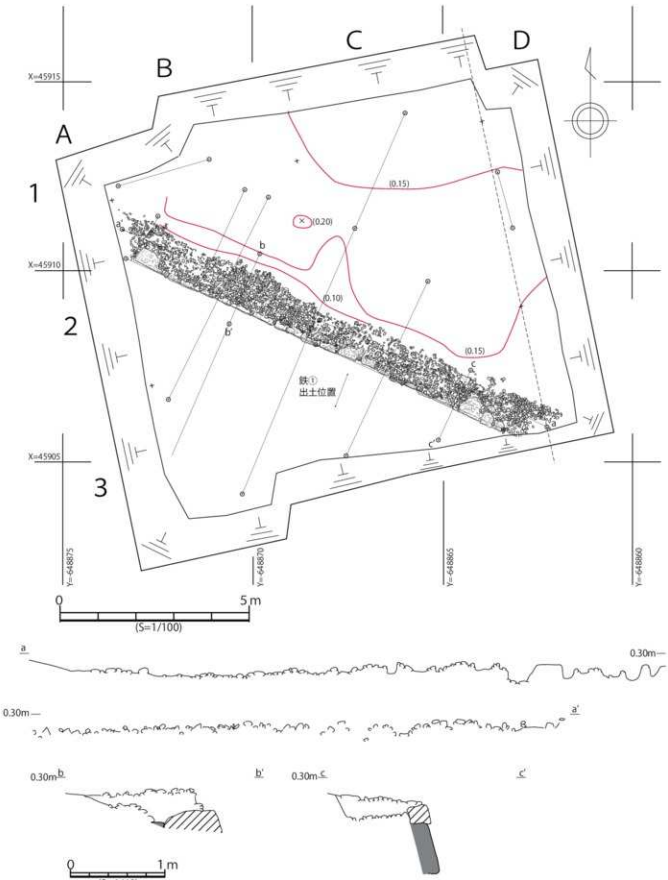
2　石垣

中土居から葭島に渡る橋の西側に検出された石垣で、東西方向に長さ 11.5 m、高さ 0.9 m部分が検出された。前述のとおり、石垣は調査区外へ伸びていることが確認されている。石材は、確認された範囲では全て凝灰岩製で、鵜川石など地元の石材と考えられる。根石には幅 50 ～ 60㎝、高さ 40㎝程度の石材が使用され、上段には幅 40 ～ 50㎝、高さ 20 ～ 30㎝程度の一回り小さい石材が使用されている。加えて、20cm 角程度の小型の石材も使用されている。奥行きは下段が 0.8 m～ 1.2 m程度あり、上段は 0.5 ～ 0.9 mを測る。上段の方が小振りな傾向はあるが、調査区西端石材のみ、幅 0.7 m以上、高さ 0.5 mの大型石材が使用されていた。ただし、奥行きは 0.4 m程度と薄いものである。石材の表面は鑿打ちされ、下段東端の石材と、上段西から 5 個目の石材に刻印が確認された。前者は三角形で、後者は串団子 2 個形である

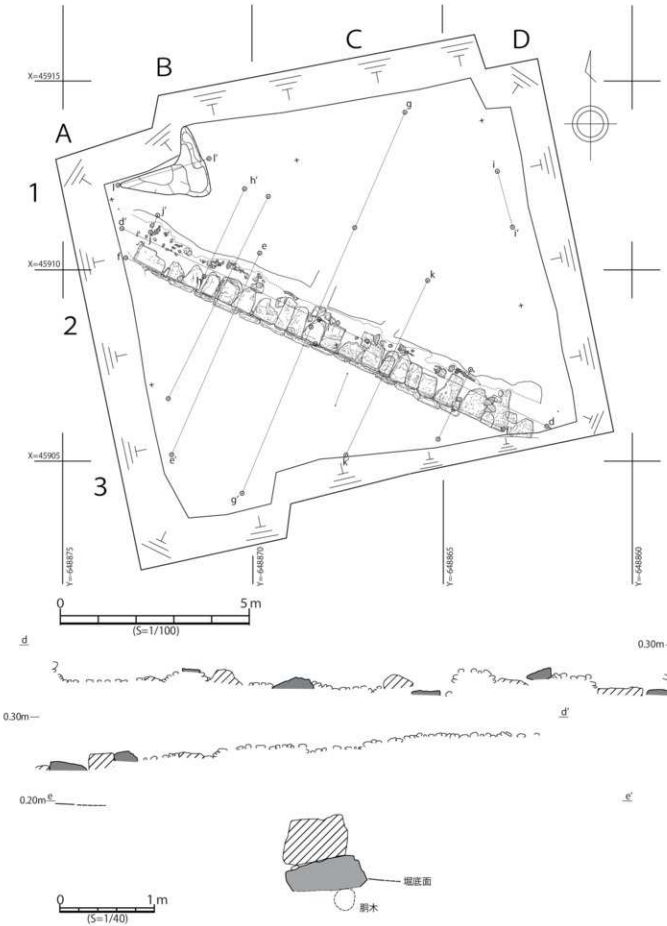
胴木は、石垣の基底部に設置されていることは確認できたが、噴出する砂と水で直ぐに埋没するため、記録作成は不可能であった。よって、推定ではあるが、石垣は海抜約－ 1 mからの構築と考えられる。勾配は、約 11°である。

ぐり石は、非常に幅が狭いのが特徴で、上段で 0.5 m程度、下段では 0.25 m程度しか存在しなかった。また、ぐり石内に杭が打ち込まれた箇所があり、おそらく石垣構築に関わるものであると推察される。

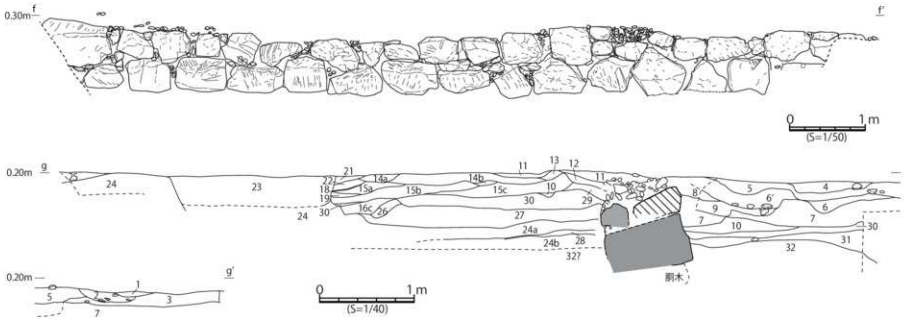
粗加工石積みで、残された石垣をみる限りでは、小型の刻印が確認されることから寛永期頃とみられる。ただし、上段と面を合わせるため、上半を削る加工が施された石材があり、積み直しが行われ



第 28 図　石垣検出面平面図・エレベーション図



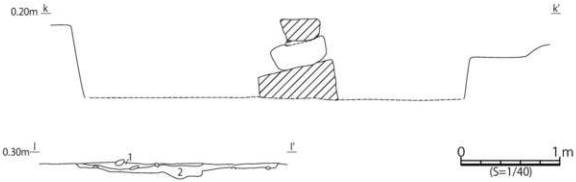
第 29 図　石垣露出面平面図・エレベーション図



土層断面注

1 層　5Y4/1 灰色植土 (締り良い、粘性やや強、腐植物極少量混)
2 層　5Y4/1 灰色植土 (砂混)(締り弱い、炭化物粒極少量、瓦片多い、玉石含む)
3 層　5Y3/2 オリーブ黒色植土 (締り良い、粘性強、腐植物少量含む、砂 1 層より多い)
4 層　7.5Y4/1 灰色植土 (砂混)(締り普通、粘性弱、炭化物ブロック、玉石、凝灰岩くず少量含む)
5 層　5Y4/1 灰色植土 (砂混)(締り良い、炭化物粒極少量、腐植物繊維含む、玉石少量含む、砂粒多め、粘性強)
6 層　7.5Y3/1 オリーブ黒色軟植土 (腐植土)(締り普通、炭化物粒、凝灰岩くず少量含む、粗質)
6' 層　7.5Y3/1 オリーブ黒色軟植土 (腐植土)(締り良い、やや砂少量含む、凝灰岩くず極少量、玉石少量含む)
7 層　7.5Y4/1 灰色植土 (腐植土)(締り弱い、炭化物粒含む、凝灰岩くず極少量含む、粗質)
8 層　5Y3/1 オリーブ黒色植土 (砂混)(締りやや良い、炭化物粒少量含む)
9 層　7.5Y3/1 オリーブ黒色軟植土 (砂混)(凝灰岩くず、玉石多く含む、木製遺物含む、粘性やや強、炭化物粒極少量含む)
10 層　10BG1.7/1 青黒色砂 (玉石 (大～小) 凝灰岩くず)(埋立土層)
11 層　7.5Y4/1 灰色砂植土 (締り良い、炭化物粒極少量含む、裏込の覆土)
12 層　7.5Y5/1 灰色砂に 2.5Y3/1 黒褐色軟植土が帯状に入る (腐植系) 繊維のみ残る裏込の覆土
13 層　2.5Y4/1 黄灰色軟植土 (締り良い、粘性弱、炭化物粒極少量含む、砂混 (少量))
14a 層　2.5Y4/1　黄灰色植土 (砂混)(締り良い、炭化物粒極少量含む)
14b 層　5Y4/1 灰色軟植土 (腐植系、締り良いに 7.5Y5/1 灰色砂が乱雑に混在、炭化物粒極少量含む、瓦片埋土)
15a 層　5Y3/1　オリーブ黒色軟植土 (砂混)(締り良い、炭化物粒極少量含む)
15b 層　5Y3/2　オリーブ黒色軟植土 (砂混)(締り良い、炭化物粒ブロック極少量含む、若干砂多い)

第 30 図　石垣立面図・土層断面図



造成痕土層註

1 層　2.5Y3/2 黒褐色埴壌土 (締り良い、玉石含む)

2 層　2.5Y3/1 黒褐色軽埴土 (締り良い、腐植系、玉石、木質極少量含む)

上層断面註（つづき）

15c 層　7.5Y3/1 オリーブ黒色軽埴土 (締りやや良い、粘性弱、腐植土 (木質残る)、砂混 (土中に万遍なく混じっている感じ)、下位な程砂の割合高くなる)

16a 層　5Y4/1 灰色砂壌土 (b より締り良い、粘土ブロック少ない)

16b 層　5Y4/1 灰色砂壌土 (締り普通、炭化物ブロック極少量含む、2.5Y3/1 黒褐色 (腐植系) 埴土ブロック含む)

17 層　2.5Y3/1 黒褐色軽埴土 (締りやや良い、粗質、腐植系)

18 層　2.5Y3/2 黒褐色腐植土 (粗質)

19 層　2.5Y4/1 黄灰色軽埴土 (木質含む、やや粗質、粘性強)

20 層　2.5Y3/2 黒褐色腐植土 (粗質)

21 層　2.5Y3/2 黒褐色軽埴土 (締り良い、粘性やや強、炭化物粒極少量含む、木質含む)

22 層　5Y4/1　灰色軽埴土 (締り良い、砂少量混、木質含む)

23 層　10Y5/1　灰色粗砂 (2.5Y3/2 黒褐色軽埴土 (腐植系) ブロックで少量含む)

23b 層　5Y5/2 灰オリーブ色砂 (軽埴土ブロック若干少ない)

23c 層　7.5Y4/1 灰色粗砂 (締り良い、2.5Y3/2 黒褐色軽埴土 (腐植系) が少量ブロックで混じる)

24 層　2.5Y3/2　黒褐色軽埴土 (砂帯状に入る裂け目に炭化物粒ブロック極少量含む、締り良い、木質若干残る、やや粗質)

24b 層　2.5Y3/2　黒褐色軽埴土 (若干木質多く砂多い、粘性弱)

25 層　7.5Y5/2　灰オリーブ色砂 (24 層のブロック含む造成土、締り良い)

26 層　2.5Y4/1　黄灰色 (砂少量混) 重埴土 (締り良い、木質極少量含む)

27 層　2.5Y3/1　黒褐色 (砂混) 軽埴土 (腐植系、締り良い、粘性強、木質含む)

28 層　5Y4/1　灰色砂 (腐植土混)(締り弱い、木質多く含む)

29 層　2.5Y4/1　黄灰色砂壌土 (締り良い、木質少量含む)

30 層　5Y4/1　灰色砂 (締り弱い、円礫少量含む、木質含む)

31 層　5Y3/1　オリーブ黒色泥炭層 (締り弱い、粗質気味、若干粘性あり)

32 層　7.5GY5/1　緑灰色極細粒砂 (締り弱い、木質含む)

33 層　5Y3/1 オリーブ黒色埴壌土 (締り良い、砂少量混、木質少量含む、粘性強)

第 31 図　石垣エレベーション図・造成痕土層断面図

た可能性が残る。

3　堀跡及び造成面

中土居堀部分は、北岸の一部分であり、全体の状況に反映できるかは不明である。石垣構築の基盤となったのは、32 層である。非常に細かい粒度の砂層であり、上層を掘り抜いた瞬間に水が湧き出して止まらなくなる。検出した時点で、根石の 1/ 3 が埋没しており、胴木は完全に埋まった状態であった。その直上層は泥炭層で、約 2 m離れた地点より落ち込み傾向を見せていることから、堀は深さを増すとみられる。この層が堀の最下層堆積とみられ、直上に薄い砂層が堆積する。その砂層上面に、石垣に接して凝灰岩のケズリ屑で埋め立てた面が形成されている。この段階で石垣の修復があった可能性を考えたい。面合わせでの石上半分の削り込みと連動したものと考える。その後、6 ・ 7 層といった腐植土の堆積が続いている。 4 ・ 5 層については、堀埋立て時の埋土と思われる。今回出土した燻し瓦の多くは 2 層からの出土である。よって、この時期に燻し瓦を葺いた建物の破却もあったとみられ、それは堀が埋め立てられた廃城決定以降に行われたと判断する。

城内側については、前述通り遺構面は既に削られた状態であり、遺構は確認できない。23 層に切

られているため背面の立ち上がりが不明だが、石材背面から 2.85 m以上が石垣構築時の掘方である。その掘り込みを受けている 24 層以下が地山であろう。24 層が途切れることなく城内側に続くことからも立証される。h－h′によると、木杭は裏込め間近の位置に 27 層面から打ち込まれていた。16 b 層の面には、ごく一部ではあるが、10 層と同じ凝灰岩屑のみで形成される層がある。10 層と同様の時期と考えれば、16 b 層より上位は、修復時の埋土とも考えられる。11・12 層は、上段破却後の土層であろう。23 層は、腐植土ブロックが混ざった粗砂層である。平面（第３図参照）からみると、c 部分に該当するとみられ、弧状でやや不整形に分布している。形状からは暗渠とは考え難く、i－i′断面から判断すれば、湧水と共に噴出した砂とも考えられる。

第５節　出土遺物

1　鉄製品

堀内埋土中層上面より鉄の板材が出土している。長さ 92.05㎝、幅 6.55㎝、厚さ 0.3㎝の鉄板である。片方の端部を幅 3.25㎝で直角に折り曲げてあり、２個並列で鋲を打つための孔が 11 列 22 孔開けられている。一対の鋲間幅は、3.6 ～ 4.0㎝（約１寸２分弱から１寸３分）間隔である。列間では、先端から１－２列目と折り曲げ部に一番近い列間が 8.3㎝（約２寸７分）で、最も狭い。先端から２～５列目間と６－７列間が、8.45 ～ 8.5㎝（約２寸８分）である。残りの５－６列間・７～ 10 列目間が 8.7 ～ 8.8㎝（約２寸９分）間隔である。このように、鋲間隔には最大で約５㎜の誤差が認められる。鋲の長さは 1.3 ～ 1.45㎝で、頭径 1.2 ～ 1.4㎝、厚さ 0.2 ～ 0.3㎝である。折り曲げ部側から１列目のみ、長さ 2.25㎝の長い鋲が使用されている。また、折り曲げ側から４列目まで残存した状態であった（1・２列目は片側を欠く）。これは金沢城の石川門などにみられる、門柱や門扉に打ち付ける部材である。２個並列孔の部材は、金沢城では石川門表門北柱及び南柱に類例が存在している。ただし、金沢城では先端を折り曲げた部材ではなく、どの位置で使用したかは不明とのことである（金沢城調査研究所教示）。しかし、小松城の城門に使用された可能性は非常に高く、伝世した部材以外では初めての建具関係出土品と評価できる。

②は鉄釘で、長さ四寸である。釘頭は、斜めに潰れた状態であり、同じく門に使用されたものであろうか。石垣上に存在した土塀に使用された可能性もあろう。因みに、調査地に最も近く所在した門は、天和３年（1683）「小松御城中絵図」によると、葭島に渡る橋の兎門である。

2　陶磁器

今回の調査では、陶磁器片の出土は非常に少なく、図化した２点と、時代の下る白磁片（未図化）の３点である。１は陶器丸碗で、灰釉が施されたものである。口縁端部のみ緑色が濃く発色し、体部は黄色に発色している。再興九谷の陶器碗とみられ、19 世紀前半以降の年代が与えられる。石垣裏込部分からの出土であるが、11・12 層は石垣破壊時かその後と判断されるため、石垣の築造年代を寛永期とする見解には影響が無いと考える。２は、鉄釉の掛かった天目茶碗で、包含層出土資料である。白色の精緻な胎土であり美濃産の可能性がある。

3　瓦

瓦は、最も多く出土した遺物で、堀内埋土からまとまって出土している。出土層位は、全て上層である。殆どが燻し瓦で、195 点を数える。極少量ではあるが、釉薬瓦が混入することから考えると、明治初期の破城に伴う廃棄である可能性が高い。

全 195 点の内、160 点が平瓦であり、隅数比率でみても多い状況にある。平瓦と丸瓦との構成比率は、隅数で 2.5 倍強である。なお、本出土瓦には、刻印資料は含まれていなかった。

軒丸瓦（１・２）は少なく、全て瓦当が外れた状態であり、採用された文様は不明である。１は、瓦当との接着部に櫛目を施しており、その位置から瓦当部が凸型を呈することがわかる。また、接着後に凸面側に粘土を足し、ヨコナデを施し仕上げている。丸瓦部凹面には、棒状痕があり、タタキというよりは、台ハガシ用に差し込まれたものではなかろうか。２は、小片だが、１とは造作が異なる。瓦当接合部に櫛目を施すのは共通するが、凹面側に粘土を足している。凸面端部のヨコナデは行われていない。内面には、密な棒状タタキ痕跡が残る。これらの調整痕跡と、胎土の特徴から日末（２号窯か）産とみられる。

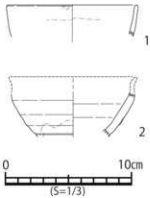
３～５は一文字軒瓦で、瓦当文様は、小松城や金沢城の軒平瓦に類例はなく、中央に円と十字文を組み合わせたものであり、両側には唐草文？を配している。基本的な造作は同じで、平瓦凸面片側に粘土を足し肥厚することで、瓦当面下端に直線を作りだしている。よって、両側端部が最も肥厚幅が大きい。顎部も継ぎ足し粘土により整形されたもので、接着面には、櫛状工具により平瓦凸面に刻みを入れている。成形後に型を押し当て瓦当文様を施し、凸面側両側端の瓦当面から 6.4㎝の位置に抉りを入れるのが特徴である。３と４には、顎厚の違いや上端部面取の有無、文様型の違いなど差異が認められる。５は、基本的な造作は同じだが、比較的作りが薄手である。一文字軒瓦自体は、小松城跡二の丸調査において、おそらく３と同じタイプが一点出土している。

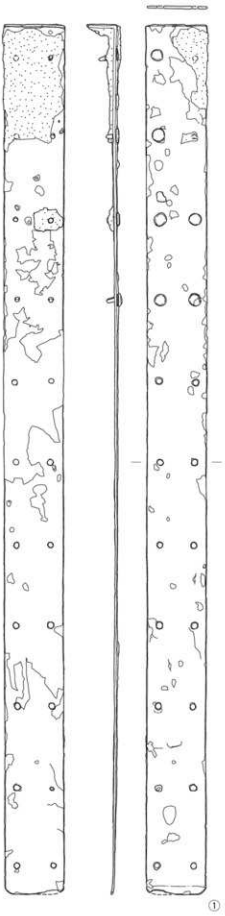
６～15は丸瓦で、全て玉縁式である。粘土板の切り離し痕は、コビキＢのみである。全長・全幅の判明する資料は無く、復元幅で 13.7㎝前後と推測される。この数値は三の丸調査出土品とも合致する。６～10は玉縁部で、別づくりの玉縁を筒部に接合する製作技法である。おそらく接合用粘土足し筒部を挟むように接着するとみられる。そのため、接合部が肥厚するのだが、肥厚があまり顕著ではない８が存在することから、技法差が存在すると考えられる。また、接合後に凸面段差部に施す筒部側ヨコナデは、より筒部側に粘土が伸びている６の幅が３㎝と広く、接合幅の狭い他の個体が１㎝程度なのは、両者に相関関係があることが予想される。

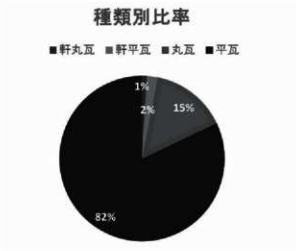
なお、丸瓦は、凹面縁を面取調整しており、その手法にも差が存在する。また、調整しない場所に残る圧痕跡にも差異が認められる。基本的には、縦に平行して入るスジ状の圧痕で、スジ１条の太さや形、上下の連続性に違いが認められる。布補強糸の「刺し子」と言う意見があり、「刺繍痕」とする記述もある。ただし、近代瓦生産の事例では、粘土板を丸芯に巻きつける段階で莚を使用する例もあることから、ここでは「スジ状圧痕」と仮称しておく。６・９・10が連続する線状痕跡（スジＡ）であり、７・８が線が比較的太く（紡錘状という表現もあり）、短い単位で切れたものが連続する痕跡（スジＢ）である。今回の資料では、これら２種類のみが確認されるが、金沢城石川門前土橋では格子状など他の痕跡も存在している。同じ玉縁部でも残存する位置に違いがあり、６・８は接合した玉縁に無く、７・９・10は玉縁まで連続して伸びているものである。よって、前者が玉縁接合より前段階の痕跡、後者が接合後に付いた痕跡と考えることができる（註１）。胎土は、７～９が比較的精良なで質感が類似し、総じて焼き締りが甘い。６・10は、焼き締りは良いが、胎土はやや粗い。特に、６は黒色粒が目立つ胎土である。

12・15は、筒部凹面に吊り紐痕が残存するものである。両者とも先述の凹面スジ状痕はごく薄く付く程度である。12は、吊り紐が筒部に直交して円弧状に入るもので、痕跡から縄であると考えられる。15は、筒部に平行に円弧状に入るもので、痕跡から紐である可能性が高い。胎土は、12が黒粒の目立つ６と同じといえ、15は粗い特徴である。凸面では、12の方が成形時の縦方向ヘラナデ痕跡が強く残り角張った状態であり、15は滑らかな状態である。

11･13･14は、筒部下端部である。11は右端付近であるが、隅部を欠く。凹面先端部のナデ幅が 2.4







第 2 表　出土瓦片集計表

	軒丸瓦		一文字軒瓦		丸瓦		平瓦	
破片数	2	1%	4	2%	29	15%	160	82%
隅数	2	4%	2	4%	12	26%	31	66%

※丸瓦・平瓦破片数には、軒丸瓦・一文字軒瓦の破片を含む可能性あり。

第 32 図　出土陶磁器実測図 (1/2・1/3・1/4)

㎝程度と狭く、筒部には布目痕とその上からスジＢが残存する。端部に行う面取りは丁寧で、しっかりと角が立つ。凸面は、端部から2.2㎝の位置に１条のみヨコナデをするという他には無い特徴がある。13は左隅部であり、11に比して凹面端部面取り幅3.0㎝と広めである。面取りもシャープで角が立つ。ただし、筒部にはヘラによる不整ナデ痕跡が残る特異なものである。14は右隅部で、凹面端部面取り箇所や幅もほぼ同じであり13と同じ系統と考えられる。しかし、面取りが甘く角が丸いことや、不整ヘラナデも雑で、不用意な指紋も残り作りが稚拙である。凹面筒部に、スジＡ痕が確認される。胎土も同じである。11は、やや粗い胎土であり、技法の差異と同期するようである。

16～27は平瓦で、全形のわかる資料は存在しない。その中でも16は、最も残存率の良い破片で、狭端部で幅が25.4㎝以上であることがわかる。また、基本的な製作技法が同じであり、丸瓦ほど有意な差異は見出し難い。ナデ調整の差異、面取り位置の違い、側面切り取り角の違いなどで分類可能な見通しはあるが、全形のわかる破片が少なすぎるため、憶測の域を出ない。以下、160点の中から抽出した破片の特徴を述べる。

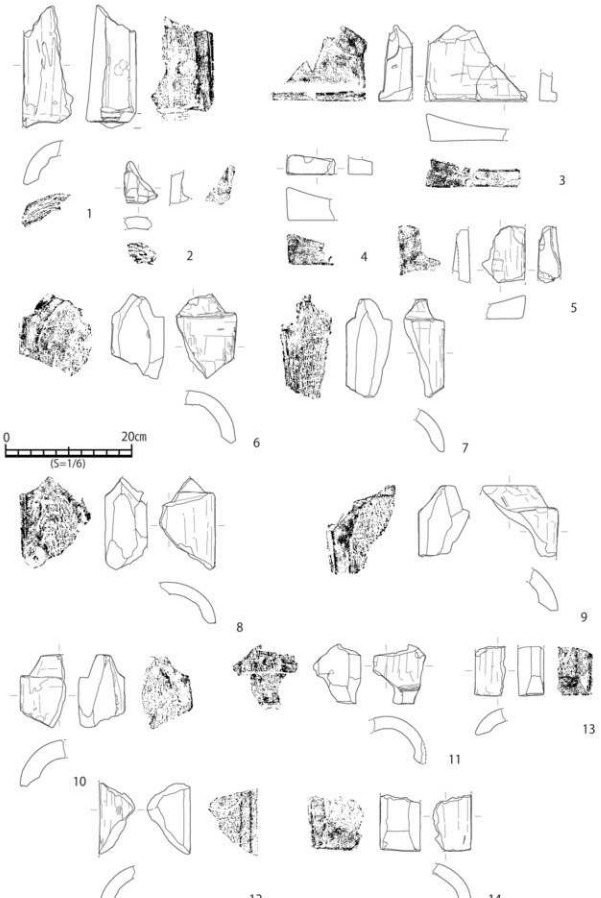
17は、作りが精緻である。成形時に凸面を斜め方向にナデつけ、凹面ナデ調整、面取りとも丁寧で角がきれいに立つ。18は、凸面に端部でヘラをナデ抜いた痕跡が見える。指圧痕も比較的多く残るため凸面調整を行った印象は受けない。凸面端に幅広い面取り(0.9～1.5㎝)が施されている。19は、乾燥時に潰れたのか凸面端部が肥圧し、端面もやや歪む。また、端面には砂が多く付着している。炭素の吸着は不十分で、灰色を呈する。約5mm大の小礫が目立つ胎土である。

20は、凸面側に縦方向のヘラナデと端部面取りが認められる特異なものである。端部より11.1㎝の位置に平行する２条沈線を焼成前に刻んでいる。同様に沈線を刻む破片はもう１点（未図化）確認されるが、沈線の意図するところは不明である。この型式のみ凹面に離れ砂（粉）が付着している。21は、凹面端付近のタテナデを約4.2㎝と幅広く行うものである。ナデが荒く、雑な印象を受ける。胎土にスジが入る特徴から日末産の可能性が考えられる。22は、成形台の傷かナデヘラによる圧痕が凸面に残るもので、総じて調整は粗い。23は、比較的精緻な作りである。凸面隅部に22と同様の痕跡が残る。24も凹面側端付近を約4.6㎝と幅広にタテナデするものであり、凸面をヨコナデだけでなくタテナデも行い丁寧に仕上るものである。21とは、胎土が異なる印象を受ける。25は、凸面にタテナデも行うものであるが、凹面のナデ調整や面取り、側面調整からも非常に雑な作りである。凸面ヨコナデも波打つ。26も凹面側端を幅広くタテナデするもので、約6.5㎝と広い。また、凸面隅部に22・23と同様の痕跡が残る。しかし、厚さ2.2㎝と厚手な作りであり、明らかに粗い胎土を使用している。焼き締りは非常に良く、凹面は炭素が銀色化している。火の温度が高い窯の中の良い位置で焼かれた製品なのであろう。27は、厚さ2.1㎝と厚手で、細かい黒粒が目立つやや粗い胎土である。比較的精緻な作りで、凸面の縦方向のナデも行われている。炭素が殆ど吸着しておらず、須恵質に焼きあがっている。

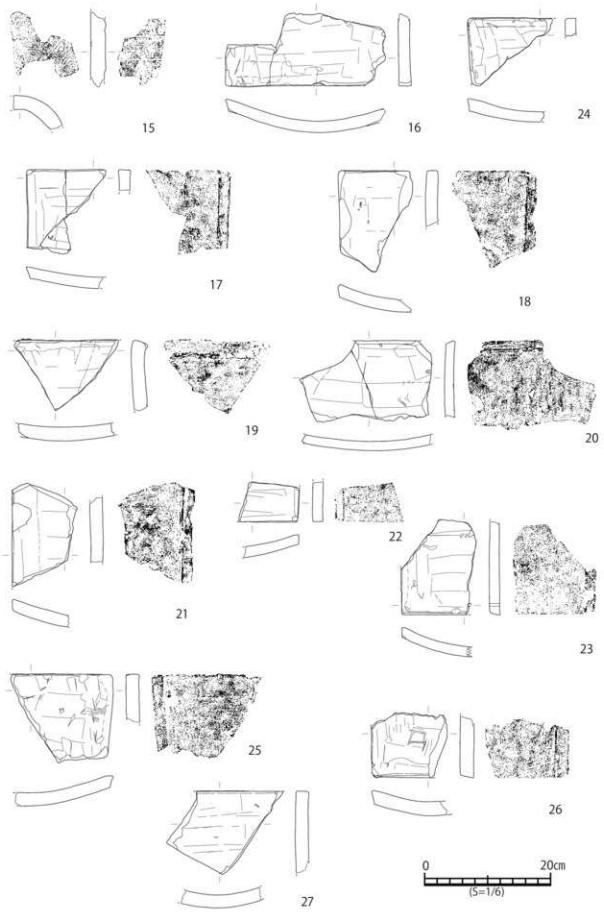
註１　丸瓦作りに布は、昭和に工業化されるまで使用されたとされる。また、今戸焼での瓦製作において、マルガワラキリカタ（凹型）やマルガワラシアゲカタ（凸型）など製作道具が集成されているが、布が実際どのように使用されたかは不明瞭であり、スジ状圧痕がどの工程で付着したのか釈然としない。

参考文献

江戸東京博物館 1997『東京都江戸東京博物館調査報告書第４集　館蔵資料報告１　今戸焼』
ＩＮＡＸギャラリー企画委員会 1997『瓦　日本の町並みをつくるもの』ＩＮＡＸ出版



第 33 図　出土瓦実測図 (1/6)



第 34 図　出土瓦実測図 (1/6)

第 3 表　出土陶磁器観察表

図	No.	遺構	素材	器種	口径	器高	他	釉薬・装飾等	胎土色	実測 No.	特記事項
32	1	ぐり石上層 11-12 層	陶器	碗（丸碗か）	10.2	2.5		灰釉	灰白	1	再興九谷、19 世紀
	2	表土除去	陶器	天目茶碗	〔10.2〕	3.6	肩径 9.8	鉄釉	灰白	2	瀬戸・美濃か

単位：cm、〔　〕内は復元想定値

第 4 表　出土金属器観察表

図	No.	遺構	種別	長	幅	厚	重量 (g)	実測 No.	特記事項
32	①	堀内中層上面	戸板金？	92.05	横 6.55、底 3.25	0.3	1029.1	4	鉄門部材か
	②	掘アゼ上層	鉄釘	12.1	1.08	0.46	11.51	3	

単位：cm

第 5 表　出土瓦観察表

図	No.	遺構	Gr	種別	表面処理	全長	幅	厚	高	他	整理 No.	丸瓦面取り位置／特記事項
33	1	ホリ A 上	B-3	軒丸瓦	燻し	(14.4)	(6.95)	2.4	(8.0)		1	5L か 6-7
	2	ホリ A 上	B-3	軒丸瓦	燻し	(6.7)	(5.3)	1.9	(3.1)		2	
	3	ホリ A 上、排水（ホリ上）	B-3	一文字軒瓦	燻し	(12.0)	(16.1)	1.9		軒部厚 5.2、顎幅 1.5、顎厚 0.8	1	十字文？抉り
	4	ホリ A 上	B-3	一文字軒瓦	燻し	(3.1)	(7.8)			軒部厚 5.17、顎幅 2.4、顎厚 1.6	2	
	5	ホリ A 上	B-3	一文字軒瓦	燻し	(9.0)	(6.8)	3.54			3	抉り
	6	排水（ホリ上）	B-2	丸瓦	燻し	(13.4)	(9.6)	2.3	(8.3)	玉縁長（3.6）	1	3A-4-5-6-7 / 復元幅 13.9
	7	排水（ホリ上）	B-2	丸瓦	燻し	(15.6)	(6.4)	1.8	(6.65)	玉縁長（3.1）	2	3B1-4-5L-7
	8	排水（ホリ上）	B-3	丸瓦	燻し	(14.6)	(8.9)	1.8	(6.5)	玉縁長（2.2）	4	3B2 I -4-5L-7
	9	ホリ A 上	B-3	丸瓦	燻し	(11.3)	(12.0)	2.3	(8.0)	玉縁長 3.8	7	1-2-3B2 I -4-5L-7
	10	排水（ホリ上）	C-3	丸瓦	燻し	(11.6)	(7.2)	2.8	(7.4)	玉縁長 3.6	23	2-3B1-4-5L-7
	11	ホリ A 上	B-3	丸瓦	燻し	(9.5)	(7.3)	1.9	(7.5)		10	5L か 6-8-9
	12	ホリ A 上	B-3	丸瓦	燻し	(11.3)	(5.5)	1.9	(6.5)		12	5L か 6-7
	13	ホリ A 上	B-3	丸瓦	燻し	(7.85)	(4.8)	2.0	(4.2)		13	5L か 6-7-8-9
	14	ホリ A 上	B-3	丸瓦	燻し	(8.9)	(6.1)	1.9	(6.8)		14	5L か 6-7-8-9
34	15	ホリアゼ上		丸瓦	燻し	(11.9)	(7.7)	2.3	(5.4)		21	
	16	ホリ A 上	B-3	平瓦	燻し	(11.5)	(25.4)	1.8	(5.3)		1	
	17	ホリ A 上表土除去	B-3	平瓦	燻し	(13.4)	(12.6)	1.8			5	
	18	ホリ A 上	B-3	平瓦	燻し	(16.1)	(11.8)	1.9			6	
	19	ホリ A 上	B-3	平瓦	燻し	(11.4)	(16.6)	2.1			11	
	20	ホリ A 上	B-3	平瓦	燻し	(12.9)	(21.0)	1.4			28	
	21	ホリ A 上	B-3	平瓦	燻し	(16.4)	(10.3)	1.9			32	
	22	排水（ホリ上）	B-2	平瓦	燻し	(6.4)	(9.7)	1.6			82	
	23	排水（ホリ上）	B-3	平瓦	燻し	(15.1)	(11.3)	1.6			85	釘穴か？
	24	排水（ホリ上）	B-3	平瓦	燻し	(10.8)	(13.4)	1.6			87	
	25	ホリ A 上	B-2	平瓦	燻し	(14.2)	(16.3)	2.1			116	
	26	ホリ A 上	B-2	平瓦	燻し	(10.3)	(12.1)	2.2			117	
	27	ホリ A 上	B-2	平瓦	燻し	(13.2)	(18.4)	2.1			119	

単位：cm、（　）内は残存値

第６節　まとめ

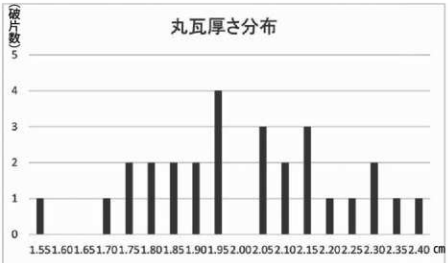
明治５年（1872）に金平徒刑場が三の丸に移転し、囚人たちによって城の取り壊しが行われた。殆どの範囲が耕地化され、石川県第四中学校が移転した本丸・二の丸や芦城公園となった三の丸以外は、公売払い下げとなった。このことによって、小松城跡は、ごく一部の石垣以外、既に破壊されたものと認識されている。しかし、今回の調査によって、基部のみではあるが石垣が地中に残存していることが明らかになった。また、それが寛永期とみられることから、利常入城に伴う改修当初からの石垣である可能性が高い。さらに、粗加工石積である点は、小松城にも切石積み以外の石垣が存在したことを示す成果といえる。

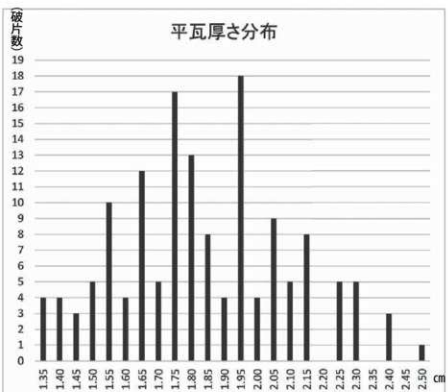
出土遺物の内、最も多く出土したのが燻し瓦である。溝内埋土出土であるが、ある程度層位が限定されることから、幾つか気付いた点を提示しまとめに代えたい。

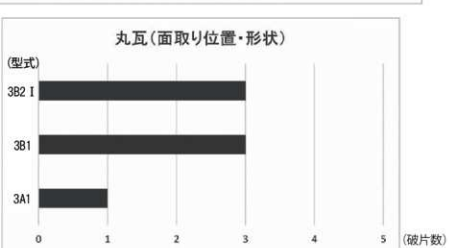
今回出土した丸瓦凹面に残るコビキ痕は、コビキＢのみである。コビキＢは、金沢城跡の様相によると元和６年（1620）の火災後に普及したとされ、本資料もそれ以降とみて良いと考える。ただし、二の丸採取品の中にはコビキＡ片が存在し、加えて金沢城で元和火災の片付け前とされる桐文軒平瓦が、二の丸石垣裏込め石内より出土している。利常入城以前の年代を示す瓦として重要で、出土地点から寛永改修時に混入したとも考えられる。改修時に金沢城から古い瓦を運んだ可能性はゼロではないが、前田家領有後の瓦葺き建物が既に存在した可能性を示すものと考える。ただし、石垣は寛文改修も想定されており、瓦の廃棄時期は下る可能性があろう。

第二に、丸瓦及び平瓦厚さ分布から当該資料をみる。丸瓦は 2.0㎝に、平瓦は 1.9㎝に分布の落ち込みがあり二分される。最も多い厚さは、丸瓦と平瓦とも 1.95㎝と共通する。平瓦については、一括遺構を検討した金沢城のデータと比べると、最大ピークから漸移的に幅を減じる傾向と異なる印象を受ける。おそらく、２時期以上の製品が含まれることも考えられ、1.95㎝と 1.75㎝に厚さのピークがある。金沢城跡 2005 －８Ⅲｂ層よりさらに薄い個体も多く存在している。時期がさらに下るのであろうか。

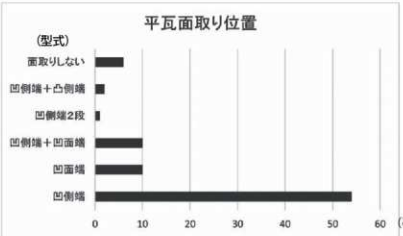
第三に、丸瓦に残る痕跡について検討を行う。注目すべきは、凹面調整時の端部面取り位置である。面取り位置は、第 36 図中段のように分類した。特に、３－４位置と５－６位置に差異を見出すことができる。３については、小松城跡では採取資料も含めて６型式を確認している。玉縁端部厚で、厚いものをＡ、薄いものをＢと大別し、３－４が分かれるものを１類、一体的に施すものを２類とした。２については、端部角方向に斜めに抜けるⅠ、上方向に直角に抜けるⅡ、方向を変えず直線的に抜けるⅢに細分される。５については、６部分を端まで一体的に施すものを５Ｌ（long）とした。今回の出土資料に限れば、第 35 図「丸瓦（面取り位置・形状）」のとおり、３ＡⅠ類と３Ｂ１・２Ⅰ類の構成である。数でいえば３Ｂ類が多くを占める傾向があり、採取資料を加えても１：６と量比が同じである。３Ａ類は基本的に少なく、現状では５－６方法での面取りのみである。３Ｂ類では、５Ｌを施すのが殆どで、Ｂ２ⅠとＢ２Ⅱに１点ずつ５－６方法が存在する。５－６と５Ｌの違いは、時期的変遷による省力化か、時期的差異でなく産地差の両者が想定される。胎土からは、３Ａ類に日末産とされる胎土が認められないこと、３Ｂ類には日末産とそれ以外の胎土（蓮代寺産か）が認められるという違いがあり、両者に５－６方法が認められる。確実に日末産とされる巴文軒丸瓦（新修小松市史３掲載）は、３Ｂ２類で５Ｌ方法である。この問題は、廃棄時期が限定される資料を比較検討すれば、解決される問題といえ、より明確な相関関係が見出せる。しかし、小松城跡の現状資料では、不可能である。

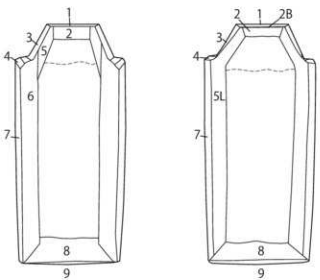

丸瓦厚さ分布
(破片数)
0
1
2
3
4
5
1.55 1.60 1.65 1.70 1.75 1.80 1.85 1.90 1.95 2.00 2.05 2.10 2.15 2.20 2.25 2.30 2.35 2.40 cm


平瓦厚さ分布
(破片数)
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
1.35 1.40 1.45 1.50 1.55 1.60 1.65 1.70 1.75 1.80 1.85 1.90 1.95 2.00 2.05 2.10 2.15 2.20 2.25 2.30 2.35 2.40 2.45 2.50 cm

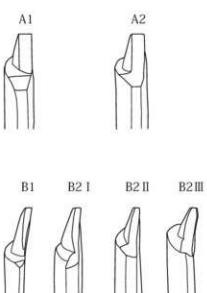

丸瓦（面取り位置・形状）
(型式)
3B2 I
3B1
3A1
0
1
2
3
4
5
(破片数)

第 35 図　瓦集計図 1



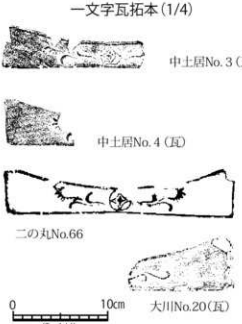


丸瓦面取り場所



3－4位置における面取り方の違い

一文字瓦拓本(1/4)



第 36 図　出土瓦集計図 2

丸瓦には、凹面内の圧痕に、細いスジ状に連続するものと、太く断続的なもの（紡錘状）という２種類がある点は、前節で報告したとおりである。ただし、この痕跡が付着する位置について、玉縁のみに付く・付かない、筒部に付く・付かない、玉縁と筒部で異なるなど差異が認められる。何を原体とし、どの工程において、どのように使用するかを圧痕から明らかにすることが課題として残る。

なお、平瓦は、全形のわかる資料が存在せず、製作技法と産地に相関関係を把握できていない。第36図のグラフ「平瓦面取り位置」は、側縁端部の面取り手法の違いについて統計をとったものである。側端は角部分で、面端は角では無く、側端の面側を比較的幅広く面取りしたものを指す。凹側端を１段のみ面取りするものが突出して多く、２段面取りなど他の例については、10点以下と少数派である。

第四に、採取資料も含めた小松状跡出土瓦を、金沢城跡で得られた成果に照らし合わせてみたい。軒丸瓦では、巴Ⅰ－１・Ⅲ－１（ａ）・Ⅲ－１（ｂ）が小松城跡で確認できる。金沢城跡での年代観からみれば、寛永８年の大火以前から寛文８年（1668）頃まで使用されたとされ、小松城における利常在城時期（寛永17年（1640）～万治元年（1658））と矛盾しない。一方で、軒平瓦は、前述の桐文以外では２個体のみと極端に少ない。金沢城跡に存在する三葉文や花文に分類される個体は存在せず、文様から天正後期にまで上がる可能性も指摘されるものである。利常在城時に該当する軒平瓦は、まだ判明していない。

最後に、一文字軒瓦について取り上げたい。本報告の出土瓦中では、４点確認されている。また、県調査においても、カクランからではあるが、二の丸より１点出土している。いぶし瓦であり、近代の桟瓦製品とも異なる。現在のところ金沢城跡からの出土例はない。小松では、城下町でも出土例があり、大川遺跡土坑（ＳＫ－37）より１点出土している。ただし、本報告資料とは、裏面の抉りが無い点（註１）や瓦当文様が異なる。瓦当文様については、唐草先端の細かい描写が省略されたものといえ、小松城出土瓦より後出的とみることもできる。一緒に出土した陶磁器は、18世紀後半頃に上限が設定されるもので、その頃には町屋で使用されていたようだ。現時点では、出現した年代をどこまで上げて良いのか不明であるが、小松城跡出土品についても、18世紀後半以前に使用が開始されたと考えておきたい。

小松城跡での瓦の使用状況や、いぶし瓦の生産・供給体制については、まだまだ不明瞭な点が多い。引き続き検討資料数を増やしていく必要があり、今後の課題としたい。

今回の報告で、小松市立博物館に採取資料の調査について便宜を図って頂いた。また、滝川重徳氏からは、金沢城跡出土瓦において、多くのご教示を頂いた。記して感謝申し上げる次第である。

註１　大川遺跡出土資料は、破片なので本報告資料とは異なる位置に抉りがあったのかもしれない。

参考文献

新修小松市史編集委員会 1999『新修小松市史資料編１小松城跡』石川県小松市
新修小松市史編集委員会 2001『新修小松市史資料編３九谷焼と小松瓦』石川県小松市
石川県教育委員会・(財) 石川県立埋蔵文化財センター 2007 年『小松市小松城跡』
石川県金沢城研究調査室 2006『金沢城跡Ⅱ　３ノ丸第１次調査』
石川県金沢城調査研究所 2011『金沢城跡－河北門（本文編）』
石川県金沢城調査研究所 2014『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書Ⅱ』
(財) 瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの　生産と流通』資料集
山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社

第Ⅳ章　薬師遺跡Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ次発掘調査

第１節　調査に至る経緯

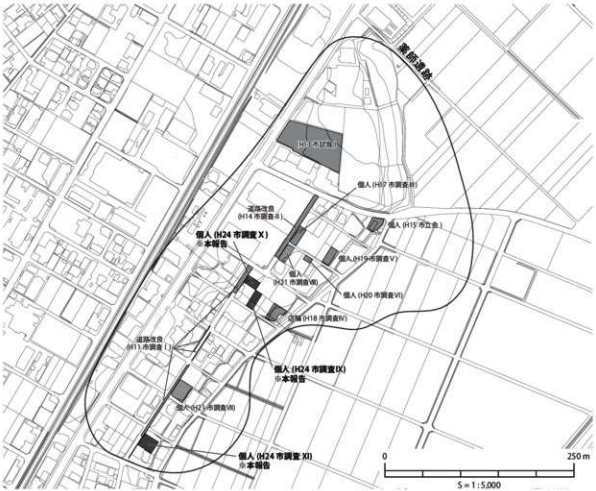
今報告は平成 24 年度に小松市矢崎町地内（薬師遺跡）で計画された住宅新築工事に伴う３件の発掘調査報告で、経緯はそれぞれ以下の通りである。

⑴　Ⅸ次調査

平成 24 年２月 29 日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査は３月９日に実施し、区域内に６箇所設定した試掘坑すべてにおいて埋蔵文化財を確認し、３月 12 日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。

計画されていた住宅部分の施工範囲は盛土内に収まるもので、現状保存が可能と判断された。ただし、付随する駐車場舗装工事については、現況地盤面より更に掘削が及ぶため、協議の結果、舗装工事範囲 44.145m^2 において発掘調査による記録保存を講じるものとして合意に至った。４月５日付けで文化財保護法第 93 条に基づく発掘届および発掘調査依頼が提出された。

発掘調査は、個人住宅を原因とするため国庫補助事業として実施するものとし、協議の結果を４月６日付けで協定書を交換して確認し、４月 10 日に着手した。



第 37 図　薬師遺跡　調査地位置図

⑵　Ⅹ次調査

平成24年7月2日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは同日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査は7月12日に実施し、区域内に3箇所設定した試掘坑すべてにおいて埋蔵文化財を確認し、7月13日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。

計画されていた住宅は地盤を表層改良し、隣地境界線にL型擁壁工事を行う設計であり、協議の結果、埋蔵文化財の現状保存は不可能との結論に達した。よって表層改良範囲及び擁壁工事範囲172.17m^{2}において発掘調査による記録保存を講じるものとして、8月1日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届および発掘調査依頼が提出された。

発掘調査は、個人住宅を原因とするため国庫補助事業として実施するものとし、協議の結果を8月16日付けで協定書を交換して確認し、8月20日に着手した。

⑶　Ⅺ次調査

平成24年10月25日付けで個人より埋蔵文化財の取り扱いについて協議書が提出され、埋蔵文化財センターは翌26日付けで試掘調査による埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。試掘調査は11月12日に実施し、区域内に5箇所設定した試掘坑のうち区域東側の2箇所で埋蔵文化財を確認し、11月15日付けで適切な保護措置が必要な旨を通知した。

計画されていた住宅は地盤改良を行わないベタ基礎工法で、隣地境界線にL型擁壁工事を行う設計であった。協議の結果、住宅部分は保護層が十分確保されるため現状保存が可能であるが、擁壁部分については掘削が埋蔵文化財確認面に達するため、発掘調査等の保護措置が必要になるとの結論に達した。ただし擁壁部分は狭小範囲で通常の発掘調査が困難であると判断され、擁壁工事範囲50m^{2}において工事立会による記録保存を講じるものとして、平成25年1月22日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出された。

工事立会は2月14日に実施したが、予想以上に埋蔵文化財確認面が高い箇所から確認され、良好に遺存していることが判明した。よって再協議の上、詳細な記録作成が必要と判断され、着工が迫る中で同日に発掘調査着手となった。

第2節　調査の概要

1　調査の方法

調査は隣地境界杭を原点として、グリッド設定や区割り等を行った。平面図及びセクションポイントは、4級基準点測量及び3級水準測量成果に基づき光波測距儀で得られた座標を用いて、必要に応じて50分の1、40分の1、20分の1に図化した。土坑番号は既報告からの通し番号に倣った。

2　調査の経過

⑴　Ⅸ次調査

4月10日、1区から表土除去を開始し、4月12日、包含層掘削及び遺構の精査と掘削を進めた。必要に応じてセクション図を作成し、1区の平面図を作成した。4月13日、1区写真撮影後、2区の表土除去を開始。　4月16日、2区の包含層掘削及び遺構の精査と掘削後、必要に応じてセクション図を作成し、2区の平面図を作成した。同時に1区埋め戻しの開始。4月17日、2区の写真撮影と残りの平面図作成を行い、埋め戻しまで完了した。

⑵　X次調査

8月20日、表土除去を開始、8月21日、グリッド設定を行い、8月22日、廃土運搬を効率良く行うためC・D区から包含層掘削を開始する。須恵器片や土師器片等の遺物をまばらに含み、C2・C3・D2・D3区にやや集中していた。包含層下層では遺物出土量が減り、土坑（SK17・18）および倒木痕の上では、包含層の土色が若干変化したがプラン検出できず、褐色地山面まで掘り下げた。8月27日、遺構精査し土坑と倒木痕のほかにピットを確認、掘り下げる。8月28日、必要に応じて写真撮影とセクション図作成を行い、C・D区の平面図を作成する。

9月5日、A・B区包含層を掘削開始、C・D区に合わせて褐色地山面まで掘り下げる。9月7日、遺構精査し、ピットを確認。必要に応じて写真撮影とセクション図作成を行う。9月13日、A・B区の平面図を作成開始。10月1日、埋め戻し及び器材撤収を完了。

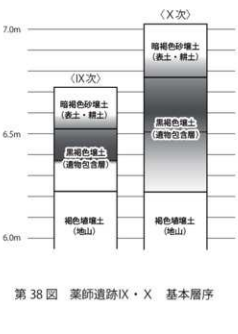
⑶　XI次調査

2月14日、再協議の上、工事立会を発掘調査に変更。重機による表土除去の後、直ちに作業員を増援し、遺構精査と掘削を開始。並行して水準点測量、図面作成を行う。2月15日、引き続き遺構掘削と図面作成を行い、作業を完了した。

第3節　層位の所見

右に、Ⅸ次調査とX次調査の基本層序を示した。調査前はどちらも畑地として利用されていたため、20cm程の耕土が堆積する。耕土にも若干遺物が混じるが、遺物が多いのはその下の黒褐色土である。この包含層は、Ⅸ次調査地では下層（厚さ15cm程、土性にほぼ変化無し）に遺物が無く、X次調査地でも下層に遺物が少なく地山直上には遺物をほとんど含まない。よって遺物包含層とした黒褐色土中に生活面があると推測される。

なお、XI次調査地は遺構断面図に示したとおり、現況面から遺構検出面まで20～35cmと比較的浅い。



第38図　薬師遺跡Ⅸ・X　基本層序

第4節　遺構と遺物

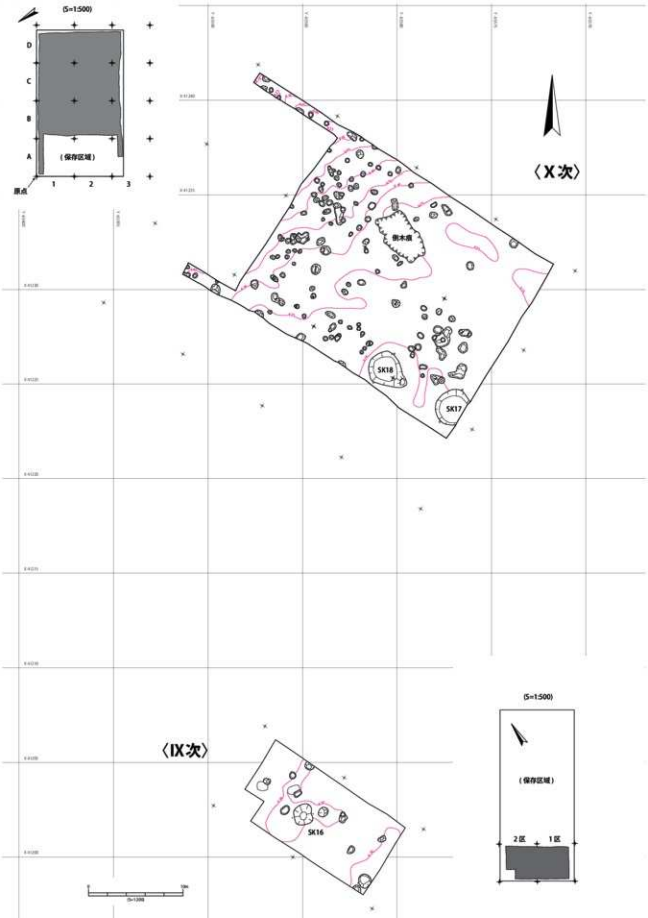
1　遺構（第41・42図）

16号土坑（SK16）

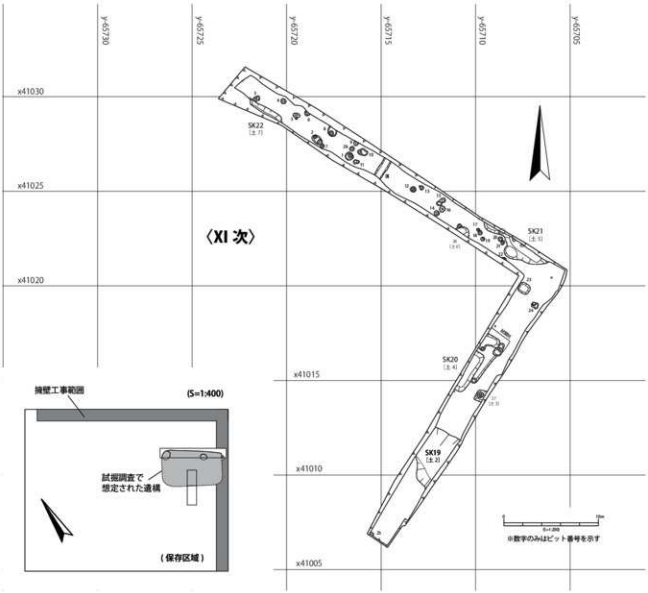
Ⅸ次調査2区で検出された、1辺約80cmで深さ22cmのやや角が歪む方形状の土坑で、層中には地山質のブロックが含まれる。遺物は出土せず周辺に関連する遺構がないため、詳しい時期や性格は不明だが、包含層中から鍛冶滓が一定量出土しており、鍛冶生産との関わりが可能性の1つとしてあげられる。

17号土坑（SK17）

X次調査D2～D3区で検出された土坑で、一部調査区外へ出るため正確な平面形は不明であるが、径200cm、深さ40cmの楕円～円形状の土坑と推測される。底面はほぼ平坦に整地されており、遺物は須恵器片と土師器片がごくわずかに出土した。図化遺物はNo.7。



第 39 図　薬師遺跡Ⅸ・Ⅹ　平面図とグリッド配点図



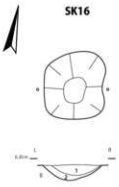
第 40 図　薬師遺跡 XI　平面図

18 号土坑（SK18）

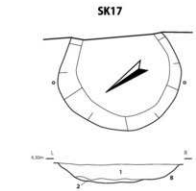
X次調査 C2 ～ C3 区で検出された、長径 225cm ×短径 180cm で深さ 22cm の楕円形状の土坑である。若干窪みはあるがほぼ平坦な底面をもち、土坑内は 1 人ないしは 2 人が作業できる程のスペースがある。遺物は須恵器片と土師器片がごくわずかに出土した。図化遺物は No.6 と 15。

19 号土坑（SK19）［土 2］

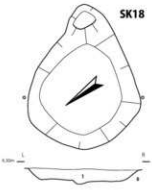
XI 次調査で検出された。4 層まで掘り下げた段階で調査区外に広がる大型土坑と判断したが、断ち割りの結果、4 層下の 5 層は地山質の黄褐色調で 4 層より堅く、その下に地山ブロックを多く含む黄褐色土と褐色土の互層を確認した。さらに下層へ掘り下げ、断面右下に右から斜めに流れ込むしまりの弱い土層を確認した。この段階で遺物の出土は皆無となった。坑は断面左下方へ続いていく。下層で確認したこの流れ込みの層序は、地下式坑の可能性を示すものである。遺物は須恵器片と土師器片のほかに、粘土塊 1 点と鉄製品 2 点（鏃（やじり）状 1 点、釘状 1 点）が出土した。図化遺物は No.20、21、33。鉄製品は銹化が激しく図化が不可能であったため、写真図版で示した（No.34、35）。これら遺物は混入の可能性がある。



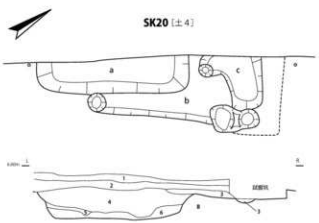
層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：10YR 2/2；黒褐色；埴土；なし；軟；弱；埴埴土塊あり
2：10YR 2/3；黒褐色；埴埴土；弱；軟；弱；地山粒現状に変化
B：(地山)　10YR 4/6；褐色；埴埴土；弱；軟；弱；



層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：10YR 2/2；黒褐色；埴土；弱；堅；弱；地山現多れ、モグラ穴あり
2：10YR 2/3；黒褐色；埴埴土；弱；堅；弱；地山粒含む
B：(地山)　7.5YR 5/6；明褐色；埴埴土；弱；堅；弱；



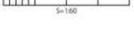
層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：10YR 2/2；黒褐色；埴土；弱；堅；弱；モグラ穴あり
B：(地山)　7.5YR 5/4；にぶい褐色；埴埴土；弱；堅；弱；



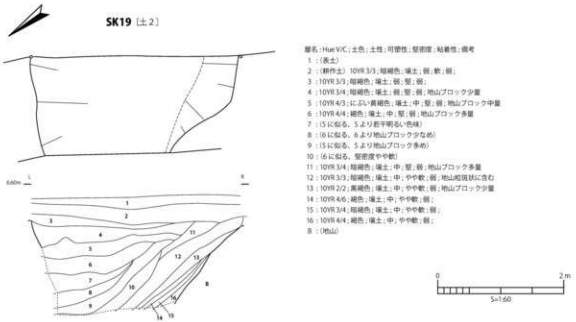
層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：(表土)　10YR 4/1；褐灰色；砂埴土；なし；しょう；弱；
2：(耕作土)　10YR 3/3；暗褐色；埴土；弱；軟；弱；
3：10YR 3/4；暗褐色；埴土；弱；堅；弱；
4：10YR 3/2；黒褐色；埴土；弱；堅；弱；
5：10YR 3/4；暗褐色；埴土；弱；堅；弱；
6：10YR 3/1；黒褐色；埴土；弱；堅；弱；
B：(地山)　10YR 4/6；褐色；埴埴土；強；すこぶる堅；弱；

層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：(表土)　10YR 4/1；褐灰色；砂埴土；なし；軟；なし；
2：(耕作土)　10YR 3/3；暗褐色；埴土；弱；軟；なし；
3：10YR 3/2；黒褐色；埴土；弱；堅；弱；
4：10YR 4/2；灰黄褐色；埴土；弱；堅；弱；地山ブロック含む
B：(地山)　10YR 5/6；黄褐色；埴埴土；強；すこぶる堅；弱；

層名；Hue V/C；土色；土性；可塑性；堅密度；粘着性；備考
1：(表土)　10YR 4/1；褐灰色；砂埴土；なし；しょう；なし；
2：(耕作土)　10YR 4/2；灰黄褐色；埴土；弱；軟；弱；
3：10YR 4/4；褐色；埴土；中；堅；弱；地山ブロック多量
4：10YR 3/4；暗褐色；埴土；弱；堅；弱；地山ブロック若干含む
5：10YR 3/3；暗褐色；埴土；弱；堅；弱；
5'：10YR 3/3；暗褐色；埴土；弱；堅；弱；地山ブロック少量
6：10YR 4/3；にぶい黄褐色；埴土；中；堅；弱
7：10YR 5/3；にぶい黄褐色；埴土；中；すこぶる堅；弱
8：(地山)　10YR 5/6；黄褐色；埴埴土；強；すこぶる堅；弱



第 41 図　薬師遺跡Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ　遺構実測図



第 42 図　薬師遺跡 XI　遺構実測図

20 号土坑（SK20）［土 4］

XI 次調査で検出された。遺構の一部は試掘時に検出され、長辺約 600cm ×短辺約 320cm の平面長方形状を呈すると想定されたものである（全体図参照）。今調査で、検出された遺構端部からいくつかの掘削が重複していることが分かった。平面で見ると掘削 a ～ c が認められ、断面観察との整合を考えると、掘削 a は 5・6 層、掘削 b は 4 層、掘削 c は 3 層にそれぞれ照合できると推測される。本来ならば各掘削を別遺構として捉えるべきかもしれないが、掘り方土坑としての捉え方もでき、遺物の取り上げも一括したため、現段階では 1 つの遺構としておく。遺物はわずかな須恵器片と土師器片のほか、鍛冶滓が 1 点出土した。図化遺物は No.23、32。

21 号土坑（SK22）［土 5］

XI 次調査で検出された。大半が調査区外にあるため全容を知り得ないが、検出部分から不整な形状が想定される。底面は断面で平坦に見えるが、全体的に見るとやや窪みが目立つ。また土坑内にはピットが掘り込まれ、断面でも一部確認できる（3 層）。遺物は須恵器片と土師器片がごくわずかに出土した。

22 号土坑（SK21）［土 7］

XI 次調査で検出された。調査区内での検出部分はわずかで、断面も土坑端をかすめている状況である。平面形は直線的で図左側にコーナー部が認められるため、楕円～円形よりは方形寄りの形状が想定される。底面は平坦となる。遺物は須恵器片と土師器片がごくわずかに出土した。図化遺物は No.22。

2　遺物　（第 43 ～ 46 図）

(1)　IX次調査

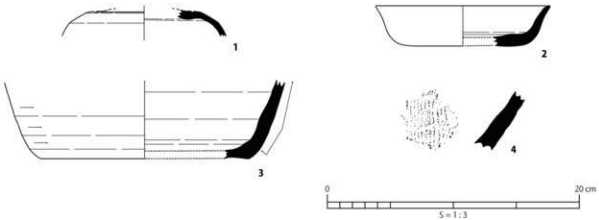
図化遺物は全て遺構外出土である。

1 は須恵器坏 H の蓋とした。

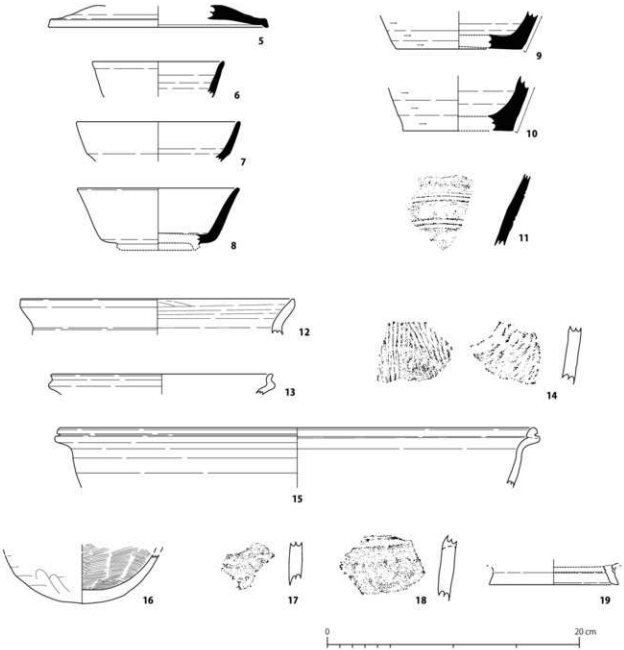
2 の須恵器坏 B の身は、底部が平たくやや丸みをもって外傾に立ち上がる器形で、古代Ⅲ期の 8 世紀前半に位置づけたい。

3 はおそらく須恵器壺の底部と思われる。

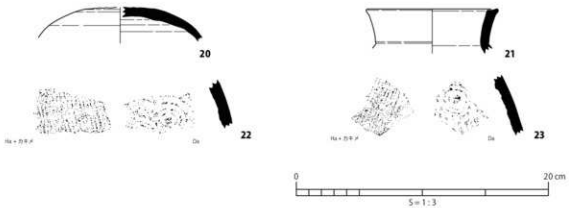
4 は最上層（表土）から出土した珠洲焼の擂鉢である。



第 43 図　薬師遺跡Ⅸ　遺物実測図



第 44 図　薬師遺跡Ⅹ　遺物実測図



第 45 図　薬師遺跡 XI　遺物実測図

鍛冶関連として、24 ～ 28 の鍛冶滓、29 の炉壁があり、すべて鉄を含む。

⑵　X次調査

遺構に伴うものとして、SK17 から 7 の須恵器坏の身、SK18 から 6 の須恵器坏の身と 15 の土師器鍋がある。小破片のため時期の判別は難しいが、15 は口縁端部の折り返しから古代Ⅵ期に比定でき、9 世紀後半から 10 世紀前半と考えられる。

その他図化できたのは遺構外出土の遺物である。

5 は須恵器坏 B の蓋で、扁平気味の器形をもち端部がやや外に開く。8 は須恵器坏 B の身で、台径がやや小さく、外傾する特徴がある。これらは古代Ⅳ・Ⅴ期の範疇と思われる。

9 と 10 は須恵器長胴瓶の底部、11 は沈線の入る須恵器瓶の頸部か。

12 は土師器長胴釜で、ロクロ調整の痕跡があり口縁端部を軽く面取りする。概ね古代Ⅲ・Ⅳ期に比定される。

13 は口径から釜としたが、残存が悪く鍋の可能性もある。端部の特徴から古代Ⅵ期に比定される。

14 はタタキ・カキメ調整が入る釜もしくは鍋の胴部片である。

16 は外面ナデ内面ハケ調整の土師器小釜の丸底部。

17 と 18 はタタキ・カキメ調整の破片で器形は判別しづらいが、肉厚で直線的であるため土師器甑の可能性がある。

19 は土師器埦 B もしくは皿 B の高台で、断面が方形で若干つま先立ちとなる。9・10 世紀頃のものとしておきたい。

鍛冶関連遺物として、30 の炉壁、31 の椀形鍛冶滓がある。鍛冶滓のみ鉄を含む。

これら遺物の出土傾向として D 区包含層からの出土が多い。

⑶　XI 次調査

遺物は小破片が多く、器形や時期の分かるものが少ない。

20、21、33 は SK19 出土である。20 は須恵器坏 H の蓋で、ヘラ切り痕が残り、稜が少なく天井が丸い。古代Ⅰ期か。21 は須恵器壺の口縁部で、端部の面取りは古代の新しい要素と言える。33 は焼成粘土塊で、表面には親指・人差し指・中指で握ったような指頭痕が残る。この他、遺構の説明で述べたとおり 2 点の鉄製品がある（写真図版 34・35）。

22 と 23 は須恵器甕の胴部片で、22 は SK22、23 は SK20 からそれぞれ出土した。

32 は鉄を含んだ鍛冶滓で、SK20 からの出土である。

第５節　まとめ

本遺跡はこれまで小規模調査が積み重ねられ、6 世紀中頃～ 12 世紀までに至る集落遺跡の姿が明らかにされてきている。特に移民系集団の存在を裏付けるオンドル型カマドや数多くの製鉄・鍛冶関連遺物の出土など、古代の月津台地を語る上で重要な発見が相次いでいる。以下にⅨ・Ⅹ・Ⅺ次調査の成果を述べる。

１　Ⅸ・Ⅹ次調査の成果

Ⅸ次とⅩ次の両調査区は谷部および傾斜部に該当もしくは近接し、これまでの調査に比べて遺構・遺物密度がやや低くなることが分かった。両調査区は南側に谷部を控えた場所に立地し、またⅩ次調査区北側では北西から南に向かって緩く傾斜しており、生活場所とするには難があったのだろうか。このことは平成 11 年度Ⅰ次調査（小松市教委 2003）でも一部確認されており、今調査においても同様の傾向が認められた。ただしⅩ次調査区の傾斜が下りきった平坦な箇所とⅨ次調査区（標高 6.2 ～ 6.25m 付近）では計３基の土坑が検出され、包含層から鍛冶滓が多く出土しており、遺構・遺物密度が高くなっている。

またⅨ次調査区から南東に約 20m 離れた平成 18 年度Ⅲ次調査区の同標高付近で、竪穴建物１棟と掘立柱建物２棟、土坑３基が確認されている（小松市教委 2008）。これらの成果は平坦地を積極的に利用していたことを示唆し、本遺跡の土地利用の一端を把握できたと言えよう。

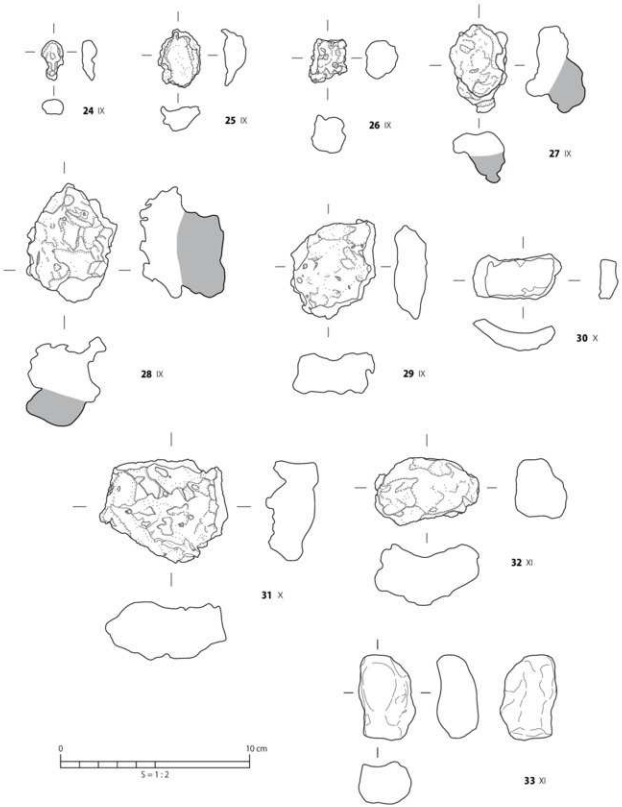
２　Ⅺ次調査の成果

Ⅺ次調査では土坑４基を確認したが、詳細な時期や性格を明らかにできなかった。ただし、周知範囲の縁辺まで遺跡が広がることを改めて確認することができた。

SK19 は土層の観察から地下式坑の可能性をもつ遺構である。市内では発掘調査事例含めて 20 遺跡 45 基の地下式坑が確認されており、墓坑や貯蔵坑の性格が推測されているが、出土遺物は少ない（宮下 2007）。SK20、21、22 は竪穴建物の可能性もあるが、調査が遺構の一部にとどまったため、不明な点が多い。SK20 に関しては、試掘調査時点で１つの遺構と推測されたが、今調査でいくつかの掘り込みが重なったものであることが判明した。その他文中では割愛したが、検出されたピットの中には硬化面をもつもの（ピット番号 1、12、22、27）が含まれており、掘立柱建物の存在が想定される。

参考文献

田嶋 明人 (1988)「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』
珠洲市立珠洲焼資料館 (1989)『珠洲の名陶』珠洲市
出越 茂和 (1997)「北陸古代後半における椀皿食器（前）」『北陸古代土器研究』第６号
小松市教育委員会 (2003)『薬師遺跡』
宮下 幸夫 (2007)「南加賀における地下式坑と中世横穴」『小松市立博物館研究紀要』第 43 号
小松市教育委員会 (2008)『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅳ』



第 46 図　薬師遺跡IX・X・XI　鍛冶関連遺物とその他の遺物

第６表　薬師遺跡Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ　出土遺物属性表

図	番号	実測	出土位置	分類	器形	部位：寸法 / 残率	色調	胎土	焼成	備考
43	1	R3	試掘跡２	須恵器	坏Ｈ蓋	高：(2.0)	5Y 5/1-6/1	緻密	良好	
	2	R2	１区包含層	須恵器	坏Ａ身	口：[13.8]/-, 底：[9.0]/0.25, 高：3.2	2.5Y 8/1-8/2	密	生焼	8C 前半（Ⅲ期）
	3	R1	２区包含層	須恵器	壺？	底：[16.5]/0.089, 高：(6.2)	2.5Y 6/2-7/2	密	並	
	4	R4	２区表土耕土	陶器	擂鉢	高：(4.5)	N 6/0	密	良	珠洲
44	5	Y3	A1 区包含層	須恵器	坏Ｂ蓋	口：[17.4]/-, 高：(1.7)	N 7/0-8/0	密	並	8C 後半-9C 前半（Ⅳ-Ⅴ期）
	6	Y11	SK18 覆土	須恵器	坏身	口：[10.3]/0.1, 高 (2.75)	5Y 7/1	密	並	
	7	Y12	SK17 覆土	須恵器	坏身	口：[13.0]/0.092, 高：(3.1)	2.5Y 5/2	密	並	
	8	Y6	D2 区包含層	須恵器	坏Ｂ身	口：[12.6]/0.125, 高：(4.5)	N 5/0-6/0	密	良	8C 後半-9C 前半（Ⅳ-Ⅴ期）
	9	Y1	C3 区包含層	須恵器	瓶	底：[10.0]/0.142, 高：(3.0)	2.5Y 6/1-7/1	密	良	
	10	Y2	表土	須恵器	瓶	底：[8.6]/0.214, 高：(4.3)	N 4/0-5/0	密	良	
	11	Y14	D2 区包含層	須恵器	瓶	高：(5.1)	5GY 2/1(釉)	緻密	良	
	12	Y7	D2 区包含層	土師器	長胴釜	口：[21.6]/0.056, 高：(2.85)	5YR 6/8	やや粗	良好	8C(Ⅲ-Ⅳ期)
	13	Y13	D1 区包含層	土師器	釜	口：[17.6]/-, 高：(1.6)	10YR 8/4	密	並	9C 後半-10C 前半（Ⅵ期）
	14	Y9	D2 区包含層	土師器	長胴釜	高：(4.6)	10YR 5/3	粗	良	
	15	Y10	SK18 覆土	土師器	浅鍋	口：[37.4]/-, 高：(4.75)	10YR 5/2	密	良	9C 後半-10C 前半（Ⅵ期）
	16	Y8	D2 区包含層	土師器	短胴釜	高：(3.9)	10YR 8/6	やや粗	良	
	17	Y5	D2 区包含層	土師器	甑？	高：(3.4)	7.5YR 6/8	やや粗	良	
	18	Y4	A3 区包含層	土師器	甑？	高：(5.2)	7.5YR 6/6-6/8	やや粗	良	
	19	Y15	P43 覆土	土師器	埴（皿）B	台：[10.2], 高：(1.55)	2.5YR 8/3-8/4	密	並	
45	20	B1	SK19 覆土	須恵器	坏Ｈ蓋	高：(2.6)	10YR 7/1-7/2	やや粗	並	7C 前半（Ⅰ期）
	21	B2	SK19 覆土	須恵器	壺	口：[10.1]/0.083, 高：(3.4)	2.5Y 5/1-6/1	密	並	
	22	B3	SK22 覆土	須恵器	甕	高：(3.7)	2.5Y5/1	密	良	
	23	B4	SK20 覆土	須恵器	甕	高：(4.7)	5Y 6/1	密	並	
46	24	P7	２区包含層	鍛冶滓	鍛冶滓（含鉄）	長：2.2, 幅：1.2, 厚：0.8, 重：1.0g				メタル度：なし、磁着度：2
	25	P5	（試掘）	鍛冶滓	鍛冶滓（含鉄）	長：3.1, 幅：2.3, 厚：1.3, 重：6.9g				メタル度：H、磁着度：5
	26	P6	２区包含層	鍛冶滓	鍛冶滓（含鉄）	長：2.3, 幅：2.0, 厚：2.0, 重：4.9g				メタル度：なし、磁着度：1
	27	P4	２区包含層	鍛冶滓	鍛冶滓（含鉄）	長：4.6, 幅：3.1, 厚：3.1, 重：35.3g				メタル度：H、磁着度：5
	28	P1	２区包含層	椀形鍛冶滓	椀形鍛冶滓（含鉄）	長：6.2, 幅：4.8, 厚：4.9, 重：116.0g				メタル度：H、磁着度：5
	29	P8	１区包含層	炉壁		長：5.3, 幅：4.5, 厚：2.4, 重：48.9g				メタル度：H、磁着度：3
	30	P9	A1 区包含層	炉壁？		長：2.4, 幅：4.7, 厚：1.7, 重：20.5g				メタル度：なし、磁着度：0
	31	P2	C2 区包含層	椀形鍛冶滓	椀形鍛冶滓（含鉄）	長：5.5, 幅：6.8, 厚：3.3, 重：133.2g				メタル度：H、磁着度：4
	32	P3	SK20 覆土	鍛冶滓	鍛冶滓（含鉄）	長：3.6, 幅：5.6, 厚：3.2, 重：78.9g				メタル度：H、磁着度：5
	33	B5	SK19 覆土	焼成粘土塊		長：4.5, 幅：3.0, 厚：2.3, 重：26.9g	10YR 7/4	密	生焼	
	34	-	SK19 覆土	鉄製品	（釘状？）	長：8.7, 幅：1.6, 厚：1.6, 重：19.2g				
	35	-	SK19 覆土	鉄製品	（鎹状）	長：7.2, 幅：2.6, 厚：2.4, 重：47.6g				

・実測番号の記号は番号シールの色であり、R: 赤色、Y: 黄色、B: 青色、P: 桃色である
・単位は cm、それ以外は別途表記
・（　）は残存値、［　］は復元値、長さ・幅・厚さは最大値を示す
・色調は外面の表層色調を示す
・胎土は緻密、密、やや粗、粗の４段階、焼成は良好、良、並、生焼の４段階の相対的な評価である

第Ⅴ章　本折城跡発掘調査

第１節　調査の概要

１　調査に至る経緯

小松市白山町・大和町に跨がる当該地に、住宅の新築を予定する個人（以下、依頼主）から埋蔵文化財の取り扱いについて最初の協議書の提出を受けたのは平成 24 年６月 15 日だった。埋蔵文化財センターは、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地「本折城跡」の範囲に含まれるため、試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認する必要がある旨を回答した。

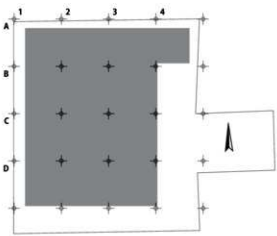
試掘調査は６月 19 日に実施した。試掘坑から遺構と遺物を確認し、６月 21 日付で、確認された埋蔵文化財について適切な保護措置が必要となる旨を依頼主に通知した。協議の結果、発掘調査による記録保存で合意、文化財保護法第 93 条の発掘届の提出を受けるとともに、協定書を交換して発掘調査に着手した。

２　調査の方法

隣地境界杭を利用して調査地内に任意の原点を定義し、5m 間隔のグリッドを設定した。

遺構の実測は、着手前に４級基準点を委託業務により設置し、これを与点として行った。グリッドは計算で得られた座標に基づいて図上にプロットしている。

平面図及びセクションポイントは光波測距儀で得られた座標をすべて野帳に記録し、必要に応じて図化した。原図の縮尺は、平面図は 50 分の１、断面図は 20 分の１である。



第 47 図　本折城跡　グリッド配点図

３　調査の経過

発掘調査は７月 11 日より着手した。調査地内に掘削土の置場を確保するために、C 杭の列を目安として調査区を南北に二分割し、重機による表土除去は７月 11 日と８月７日に、それぞれ２日間ずつ行った。また、現地にユニットハウス等を設置できるスペースも確保できなかったため、偶然ではあるが、近所に所在する埋蔵文化財センターが管理する収蔵庫をそのまま利用して現地事務所とした。

作業員を投入しての前半の調査は７月 17 日より開始し、平面図作成まですべての作業が完了したのは８月３日であった。東西に延びる２条の溝（SD01 と SD02）のプランが早い段階で確認できたものの、他の遺構は、慎重に掘り下げた結果として土坑や溝に分類したものであり、個別には次節で述べる。

後半の調査は８月９日より開始し、平面図作成まですべての作業が完了したのは８月 24 日であった。この間、地元町内会の要望で、８月 18 日に町内向けに小規模な説明会を実施した。後半の調査区は畑の畝立ての跡にほぼ全体が覆われている状況（写真図版 18）であり、検出できた遺構も東西と南北に交差する２条の小さな溝（SD05 と SD06）等わずかであった。

すべての作業が完了し、重機による埋め戻しは８月 29 日から２日間で行い、当初に計画通り８月 30 日をもって現地を引き渡した。

第 48 図　本折城跡　調査地の位置

4　出土品整理

出土遺物の整理は、洗浄・注記・分類・接合・実測作業について、臨時作業員を雇用し、平成 26 年度に実施した。デジタルトレース等の報告書作成作業についても、平成 26 年度内に実施したものである。

第２節　遺構と遺物

1　遺構（第 50 ～ 54 図）

⑴　1 号溝 [SD01]

東西にほぼ真っ直ぐ延びる溝である。検出レベルで幅が約 1m、深さが約 40cm であり、本調査で検出された溝の中では最も大きい。

⑵　3 号溝 [SD03]・4 号溝 [SD04]

SD03　ほぼ南北に真っ直ぐ延びる溝であり、SD01 とほぼ直角に接続すると思われる。

SD04　SD03 とほぼ直角に接続し、SK01 の方向に砂が流れ出した痕跡が認められた。

⑶　2 号溝 [SD02]・5 号溝 [SD05]・6 号溝 [SD06]

SD02・05　L 字または T 字に接続する小さな溝であり、SD01 より少し南に傾く。接続部はプランが崩れており、幅が広くなっている。ただし、後世の攪乱の影響や前半と後半の調査区の境目で接続するなど、確認を妨げる悪条件が重なってしまった。

SD06　SD05 とほぼ直角に交差する小さな溝である。切り合い関係は確認できなかったが、脆い砂地の地山にも拘らず交差部に崩れた痕跡もないことから、同時に存在した溝でないと思われる。

⑷　大型土坑 [SK01][SK02][SK06]

SK01　プランは不整な楕円形であり、断面の観察でも長期間掘削された状態のまま維持または放置された状態だったと思われる。少なくとも SD04 から流れ込んだ砂の堆積が認められたので、SD04 と同時期に掘削されたままの状態だったことは確認できる。

SK02・06　SK02 は SD02 が埋まった後に掘削された土坑である。SK06 と SD01 の前後関係は、試掘調査の段階で確認された土坑であり不明だが、SK02 と SK06 は非常によく似た土坑である。

⑸　中型土坑 [SK03][SK05][SK07][SK10]

SK03・05　プランは楕円形、SK03 は検出段階で拳大の円礫多数が集積されていた（写真図版 19）が、この下の掘方の部分が円礫の集積と相関するものかどうかは不明であり、また円礫に使用痕や加工痕も認められない。SK05 はプランもセクションも不整で、乱雑に掘ってすぐに埋め戻したようだ。

SK07・10　プランは不整な矩形で、平坦に均された広い底面がある。SK07 に関しては、表土除去の段階で近現代の陶磁器が大量に出土した地点でもあり、カクラン坑かもしれない。

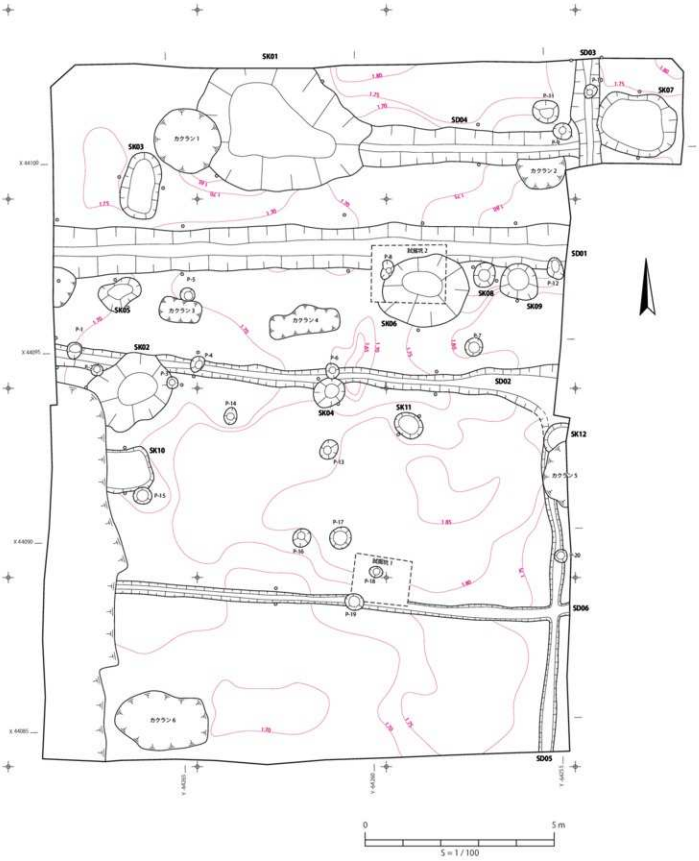
⑹　小型土坑 [SK04][SK08][SK09][SK11]

プランは略円形、SK09 が深いほかは、いずれも検出面からの掘削が浅く明確な底面がない。SK09 は SD01 より前の時期の土坑、SK04 は SD02 より前の時期の土坑である。

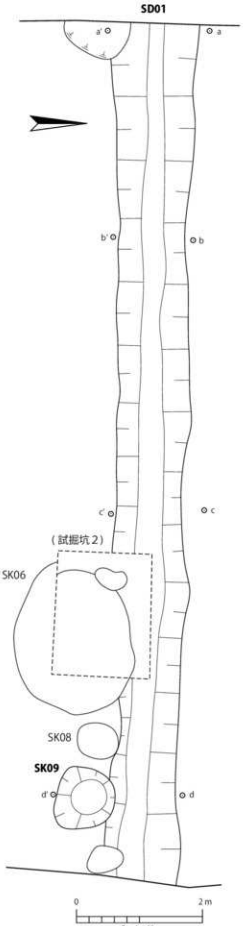
以上の⑴～⑹に分類した遺構について、前後関係が分かる遺構を整理すると、

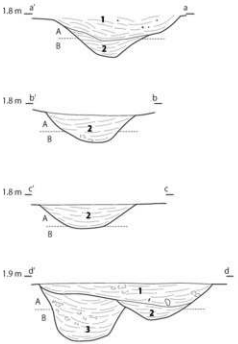
[SK02][SK04] → [SD02] ／ [SK09] → [SD01] ／ [SK01]=[SD04]=[SD03]

の３つが現地調査の段階で認められたものである。



第 49 図　本折城跡　平面図





SD01

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 炭片稀にあり、地山斑含む ,「包含層」の砂

2 : 2.5Y 3/2～3/3 ; 黒褐～暗褐色 ; 極細～細粒砂 ; 斑状～葉状

SK09

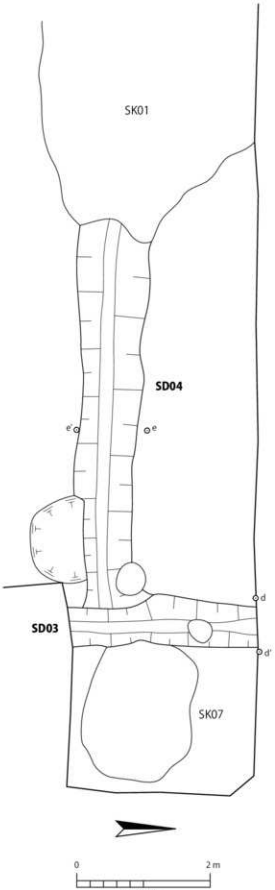
3 : 2.5Y 4/3 ; オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑顆る富む

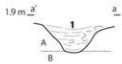
地山

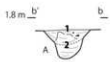
A : 2.5Y 5/6 ; 黄褐色 ; 極細～細粒砂 ; 斑状に中粒砂稀にあり

B : 2.5Y 4/3 ; オリーブ褐色 ; 斑状に中粒砂稀にあり

第 50 図　本折城跡　遺構実測図 1







SD02

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

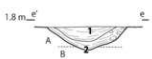
1 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 細～中粒砂 ; 地山斑あり

2 : 2.5Y 4/3 ; オリーブ褐色 ; 細～中粒砂 ; カクラン層 ?

SD03

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 炭片あり , いくらか泥質



SD04

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ;

2 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑含む

SD06

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

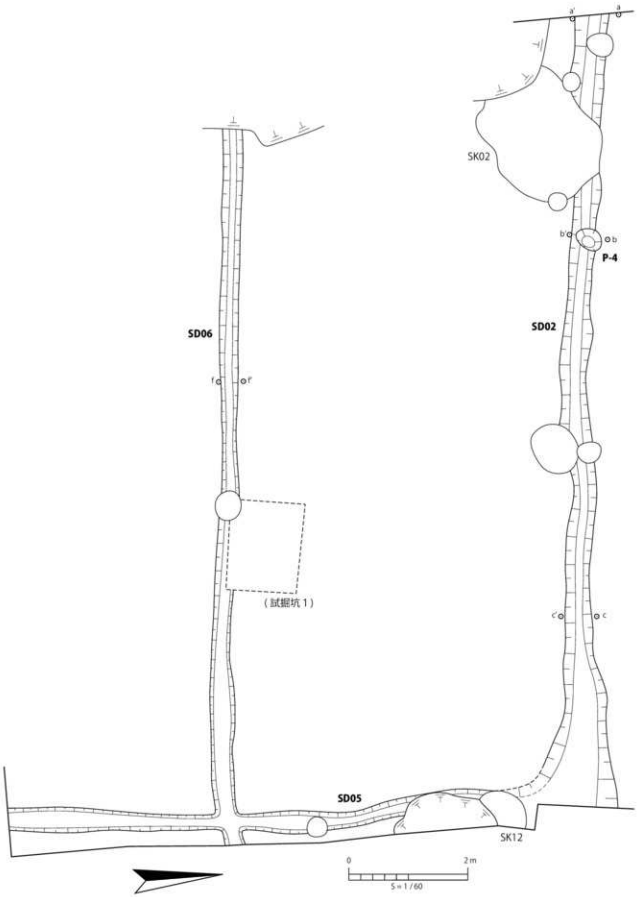
1 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑含む

地山

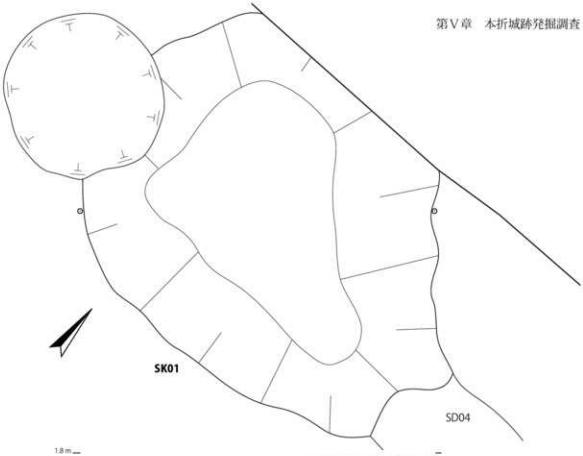
A : 2.5Y 5/6 ; 黄褐色 ; 極細～細粒砂 ; 斑状に中粒砂礫にあり

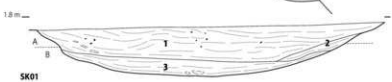
B : 2.5Y 4/3 ; オリーブ褐色 ; 斑状に中粒砂礫にあり

第 51 図　本折城跡　遺構実測図 2



第52図　本折城跡　遺構実測図 3





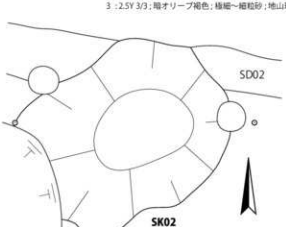
SK01

層名；Hue V/C；土色；土性；備考

1 ：2.5Y 3/2；黒褐色；極細～細粒砂；炭片あり，地山斑あり

2 ：2.5Y 4/3；オリーブ褐色；極細～細粒砂；葉状に地山砂あり

3 ：2.5Y 3/3；暗オリーブ褐色；極細～細粒砂；地山斑あり

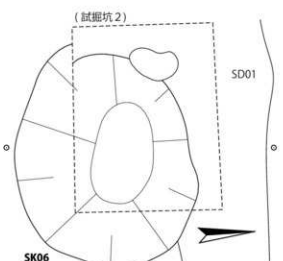


SK02

層名；Hue V/C；土色；土性；備考

1 ：2.5Y 3/3；暗オリーブ褐色；極細～細粒砂；地山斑含む，「包含層」の砂

2 ：2.5Y 3/2；黒褐色；極細～細粒砂；斑状～葉状



SK06

層名；Hue V/C；土色；土性；備考

1 ：2.5Y 3/3；暗オリーブ褐色；「包含層」の砂

2 ：2.5Y 3/2；黒褐色；極細～細粒砂；地山斑あり

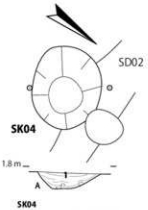
3 ：2.5Y 3/3；暗オリーブ褐色；極細～細粒砂；炭片あり，地山斑富む

地山

A ；2.5Y 5/6；黄褐色；極細～細粒砂；斑状に中粒砂傾にあり

B ；2.5Y 4/3；オリーブ褐色；斑状に中粒砂傾にあり

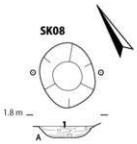
第 53 図　本折城跡　遺構実測図 4



SK04

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

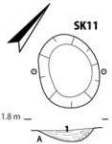
1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 下底に地山斑あり



SK08

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

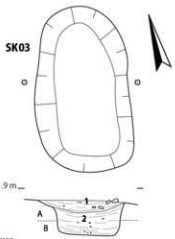
1 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑富む



SK11

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑あり

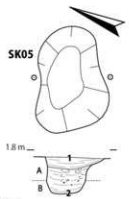


SK03

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 炭片あり , 拳大礫の集積

2 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 炭片あり

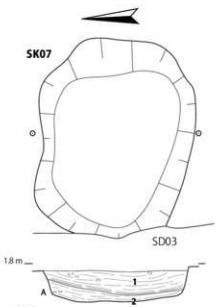


SK05

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ;

2 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 炭片あり , 地山斑富む

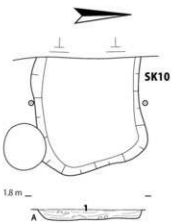


SK07

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑含む , 下底に泥湿まり

2 : 2.5Y 3/2 ; 黒褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑富む



SK10

層名 : Hue V/C ; 土色 ; 土性 ; 備考

1 : 2.5Y 3/3 ; 暗オリーブ褐色 ; 極細～細粒砂 ; 地山斑あり

地山

A : 2.5Y 5/6 ; 黄褐色 ; 極細～細粒砂 ; 斑状に中粒砂稠にあり

B : 2.5Y 4/3 ; オリーブ褐色 ; 斑状に中粒砂稠にあり

第 54 図　本折城跡　遺構実測図 5

2　出土遺物（第 55 ～ 58 図）

⑴　土師器（1 ～ 29）

いわゆるカワラケで、実測図化しなかった破片も含めて、特徴の明らかなものは京都系の手捏ね皿が主体である。出土位置は SK01・02（本報告で「大型土坑」とした遺構）が多く、他は稀である。

⑵　陶磁器（30 ～ 38）

青磁（30 ～ 32）　蓮弁文の碗である。見込みの文様意匠は不明である。

瀬戸・美濃（33 ～ 38）　33 は天目茶碗である。34 ～ 36 は順に挟み皿・卸皿・大皿、37・38 は香炉と思われる。口縁部の特徴から、34 が大窯Ⅰ期と思われるほかは、古瀬戸後Ⅲ期と思われる。

⑶　炻器・瓦器（39 ～ 54）

加賀（39・40）　大甕である。39 の口縁部の特徴は加賀Ⅴ期と考えられる。40 の押印文に最も類似するものは、那谷コテンノウダニ窯や那谷ダイテンノウダニ窯に認められる。

珠洲（41）　大甕である。

越前（42 ～ 51）　42・43 は大甕である。口縁部の特徴から、順に、越前Ⅲ期後半・Ⅴ期前半と思われる。44 ～ 51 は擂鉢である。口縁部の特徴は越前Ⅳ期後半が主体と考えられるが、48 はⅤ期と思われる。

52・53 は炻器の陶片を調整したものである。加賀か越前の大甕片を調整している。

瓦質土器（54）　燻しが不完全で酸化色を呈している。

⑷　石製品（55 ～ 61）

55 ～ 58 は行火である。56 は蓋の破片で、55 など断片的だが、D 字の器形となるようだ。

59 は円盤状に整形された石製品の一部と思われるが、何かは不明である。

60 は角形の容器か。

61 も何かは不明な石製品。方形に刳りとられた皿状の部分と角柱状の部分からなる。

⑸　鍛冶関連遺物（62 ～ 75）

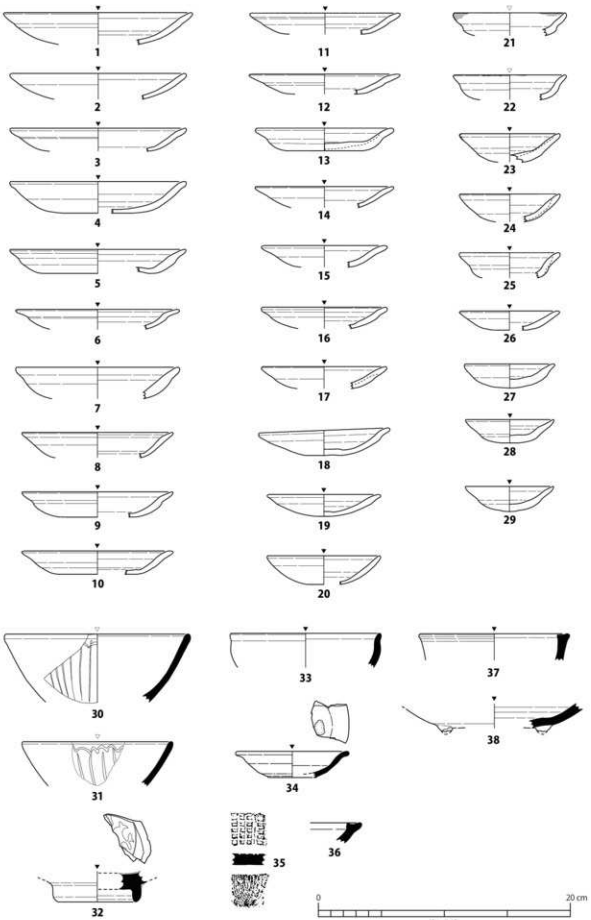
鍛冶滓は、大小併せて 80 点出土した。実測図化したものは 16 点である。

羽口や炉壁等は出土せず、包含層や SK01・SK02 の掘り下げ中に出土したことから、包含層は整地層であり、調査地の近辺に鍛冶関連施設があった可能性はあるが、今調査では確認されなかった。

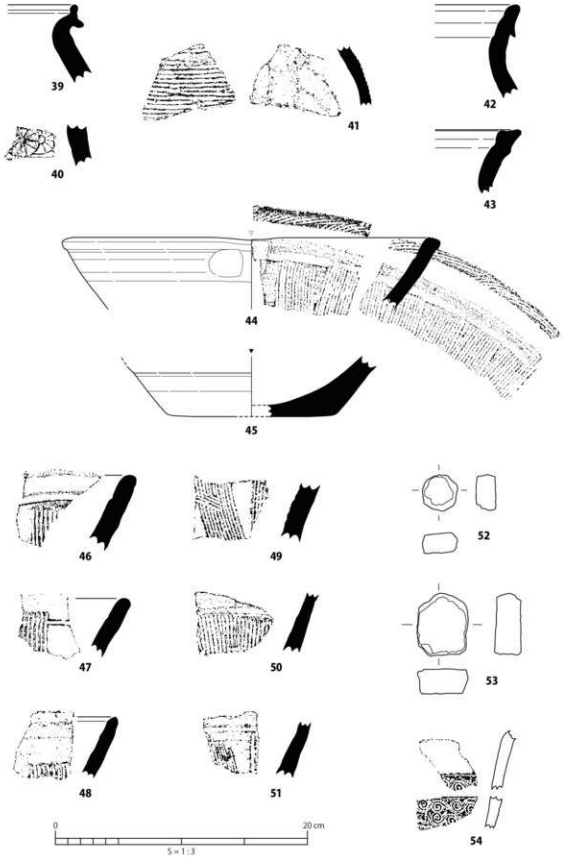
出土遺物は、大甕がおおよそ 14 世紀頃、碗皿や擂鉢がおおよそ 15 世紀～ 16 世紀前半に編年される資料である。カワラケもおおよそ碗皿と同じ時期と考えてよく、胎土や形態の特徴が明らかなものは京都系が主体である。

参考文献

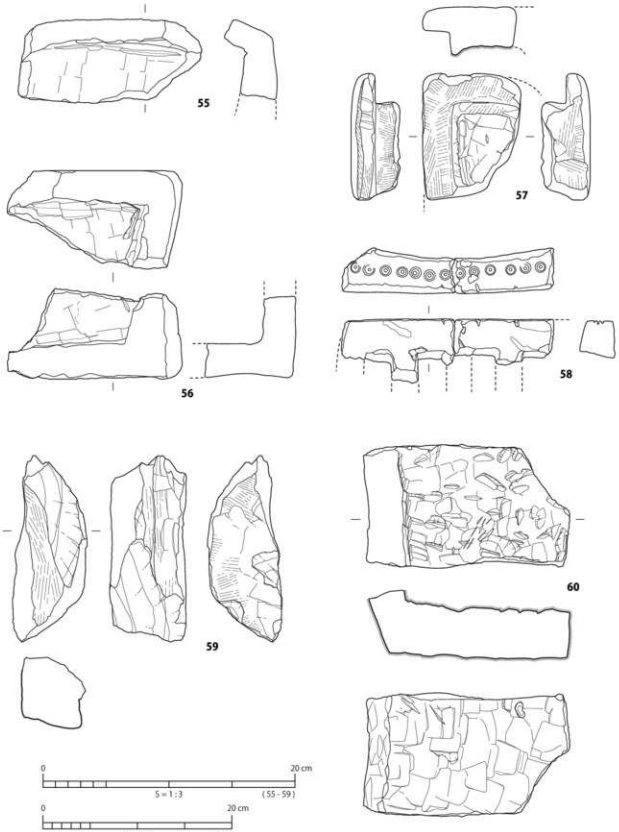
上田 秀夫 (1982)「14 ～ 16 世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』2 , 日本貿易陶磁研究会
垣内 光次郎 (1990)「中世北陸の瓦房文化」『石川考古学研究会々誌』33 , 石川考古学研究会
珠洲市立珠洲焼資料館 (1989)『珠洲の名陶』, p82-110、珠洲市
田中 照久 (1994)「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現』, 出光美術館
藤澤 良祐 (1996)「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』, 瀬戸市教育委員会（財）瀬戸市埋蔵文化財センター
藤田 邦夫 (1989)「中世土器素描―加賀地方の土師器を中心にして―」『北陸の考古学』Ⅱ , 石川考古学研究会
北陸中世土器研究会 編 (1997)『中・近世の北陸』考古学が語る社会史 , p183-p216、柱書房



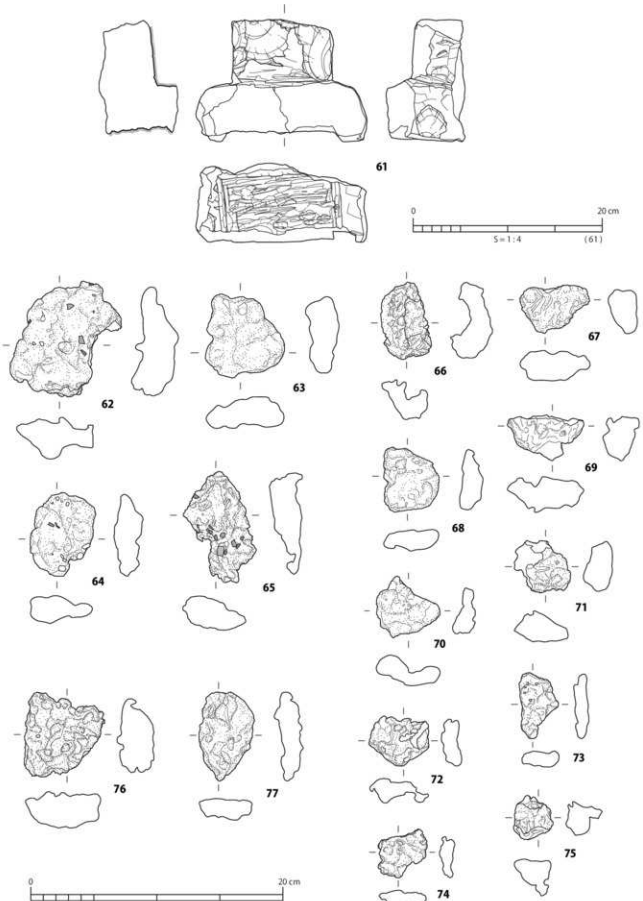
第 55 図　本折城跡　出土遺物実測図 1



第 56 図　本折城跡　出土遺物実測図 2



第 57 図　本折城跡　出土遺物実測図 3



第 58 図　本折城跡　出土遺物実測図 4

第７表　本折城跡　出土遺物属性表

実測	整理	図	番号	出土位置	分類	器形	寸法／残率	表面色調	断面色調	備考
23		55	1	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:15cm/0.750	10YR 7/4	10YR 8/4	
14			2	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:14cm/0.458	10YR 8/3	10YR 8/2	
15			3	SK02	土師器	皿	口:14cm/0.278	10YR 8/4	10YR 8/3	
19			4	SK01	土師器	皿	口:14cm/0.167, 高:2.5cm	10YR 8/2	10YR 8/3	
6			5	SD01	土師器	皿	口:14cm/0.139, 高:1.9cm	10YR 8/3	10YR 8/2	
8			6	SK02	土師器	皿	口:13cm/0.194	10YR 8/4	10YR 8/4	
29			7	SK02	土師器	皿	口:13cm/0.181	5YR 7/6	10YR 8/4	
16			8	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:12cm/0.222	10YR 8/3	10YR 8/2	
11			9	SK02	土師器	皿	口:12cm/0.167, 高:2.0cm	10YR 8/5	10YR 8/4	
20			10	SK02	土師器	皿	口:12cm/0.167, 高:1.9cm	10YR 8/3	10YR 8/3	
26			11	SK02	土師器	皿	口:12cm/0.167, 高:1.4cm	10YR 8/4	10YR 8/4	
17			12	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:12cm/0.167	10YR 8/3	10YR 8/3	
1			13	SK09	土師器	皿	口:11cm/0.167, 高:1.8cm	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	
13			14	SK02	土師器	皿	口:11cm/0.125	10YR 7/2	10YR 6/2	
28			15	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:10cm/0.250, 高:1.4cm	10YR 8/3	10YR 8/3	
18			16	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:10cm/0.250	7.5YR 7/6	7.5YR 8/4	
27			17	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:10cm/0.194	10YR 8/4	10YR 8/3	
22			18	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:10cm/0.583, 高:2.2cm	10YR 8/4	10YR 8/3	
21			19	SK02 B-1 包含層	土師器	皿	口:9cm/0.639, 高:1.8cm	10YR 8/4	10YR 8/3	
10			20	SK02	土師器	皿	口:9cm/0.194, 高:2.6cm	10YR 8/4	10YR 8/4	
24			21	SK01	土師器	皿	口:9cm/0.181, 高:1.5cm	10YR 8/4	10YR 8/4	油煙痕
25			22	SK01	土師器	皿	口:9cm/0.139, 高:1.7cm	7.5YR 7/4	7.5YR 8/4	油煙痕
7			23	カクラン坑 6	土師器	皿	口:8cm/0.528	10YR 8/4	10YR 4/1	油煙痕
3			24	SK01	土師器	皿	口:8cm/0.306	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	
4			25	SK01	土師器	皿	口:8cm/0.278	7.5YR 8/3	7.5YR 8/4	
12			26	SK02	土師器	皿	口:8cm/0.194, 高:1.5cm	10YR 8/3	10YR 8/4	
5			27	SD01	土師器	皿	口:7cm/0.889, 高:1.9cm	7.5YR 8/4	7.5YR 8/4	
2			28	SK01	土師器	皿	口:7cm/0.333, 高:1.8cm	7.5YR 7/4	7.5YR 5/1	
9			29	SK01	土師器	皿	口:7cm/0.139, 高:2.0cm	2.5YR 6/8	7.5YR 8/4	
50			30	A-2 包含層	陶磁器	碗	口:(14cm)	10YR 6/2	2.5Y 5/1	青磁
51			31	B-2 包含層 B-3 包含層	陶磁器	碗	口:12cm/0.111	2.5GY 6/1	10YR 5/1	青磁
52			32	SK01	陶磁器	碗	底:7cm/0.139	2.5Y 6/2	N 7/0	青磁
54			33	D-2 包含層	陶磁器	天目茶碗	口:12cm/0.083	7.5YR 4/6	10YR 5/1	古瀬戸
49			34	A-1 包含層	陶磁器	挽み皿？	口:9cm/0.111 高:2.1cm	5Y 8/2	10YR 8/4	瀬戸・美濃, 16c 前
38			35	SD01	陶磁器	鉢皿		10YR 8/3	10YR 8/2	古瀬戸
48			36	SD01	陶磁器	丸皿		2.5Y 6/2	2.5Y 5/1	古瀬戸, 15c 前
47			37	A-2 包含層	陶磁器	筒形香炉	口:12cm/0.069	5Y 6/3	10YR 6/2	古瀬戸, 15c 前
53			38	SD01	陶磁器	将棋形香炉？		10YR 4/3	10YR 4/1	古瀬戸？
43		56	39	SK06	炻器	大甕		2.5Y 5/1	10YR 5/1	加賀, 14c 前
42			40	SK01	炻器	大甕		2.5Y 5/1	2.5Y 7/1	加賀, 13c ？
37			41	C-2 包含層	炻器	大甕		10YR 3/1	10YR 5/1	珠洲
44			42	カクラン坑 6	炻器	大甕		7.5YR 4/2	10YR 5/1	越前, 14c 後
45			43	C-2 包含層	炻器	大甕		7.5YR 2/2	10YR 5/1	越前, 16c 前
35			44	カクラン坑 6	炻器	擂鉢	口:30cm/0.264	7.5YR 4/3	5Y 6/1	越前, 15c 後
46			45	SK01	炻器	擂鉢		5Y 5/1	2.5Y 5/1	越前
33			46	C-2 包含層	炻器	擂鉢		7.5YR 7/6	7.5YR 8/4	越前, 15c 後
32			47	SD01	炻器	擂鉢		10YR 8/6	10YR 7/4	越前, 15c 後
36			48	カクラン坑 6	炻器	擂鉢		10YR 6/1	10YR 7/1	越前, 16c 前
34			49	C-2 包含層	炻器	擂鉢		7.5YR 4/3	7.5Y 5/1	越前
31			50	SD04	炻器	擂鉢		7.5Y 4/1	5Y 6/1	越前
30			51	B-2 包含層	炻器	擂鉢		7.5Y 5/1	5Y 6/1	越前
39			52	SD04	炻器	陶片	長:2.80cm, 幅:2.80cm, 厚:1.62cm	5YR 5/4	2.5Y 5/1	越前
40			53	SK12	炻器	陶片	長:4.95cm, 幅:3.99cm, 厚:2.18cm	10YR 3/1	10YR 7/3	越前
41			54	SK02 B-2 包含層	瓦質土器			10YR 8/4	10YR 8/4	
55		57	55	SK06	石製品	行火	重:264.3g			凝灰角礫岩

実測	整理	図	番号	出土位置	分類	器形	寸法 / 残率	表面色調	断面色調	備考
58		57	56	カクラン 2	石製品	行火	重 :470.8g			凝灰角礫岩
56			57	カクラン紙 6	石製品	行火 (蓋)	重 :231.2g			凝灰角礫岩
57			58	C-2 包含層	石製品	行火	重 :190.6g			凝灰角礫岩
59			59	C-2 包含層	石製品		重 :496.3g			緑色凝灰角礫岩
60			60	SK01	石製品		重 :1,568.9g			凝灰角礫岩
61		58	61	SK01	石製品		重 :1,038.9g			凝灰角礫岩
62	1		62	SD01	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :9.8cm, 幅 :8.6cm, 厚 :3.4cm, 重 :230.5g	10YR 5/2	10YR 5/3	メタル度 : なし 磁着度 :3
63	2		63	P6	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :6.3cm, 幅 :6.7cm, 厚 :2.8cm, 重 :107.9g	10YR 5/3		メタル度 : なし 磁着度 :4
64	3		64	B-2 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :5.2cm, 幅 :6.6cm, 厚 :2.7cm, 重 :81.4g	10YR 5/3		メタル度 : なし 磁着度 :4
65	4		65	SD01	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :5.2cm, 幅 :8.9cm, 厚 :2.6cm, 重 :86.8g	10YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :1
66	5		66	カクラン紙 6	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :3.8cm, 幅 :6.0cm, 厚 :3.3cm, 重 :89.0g	10YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
67	6		67	A-3 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :5.5cm, 幅 :3.8cm, 厚 :2.5cm, 重 :47.5g	10YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :1
68	7		68	A-1 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :4.4cm, 幅 :5.1cm, 厚 :2.0cm, 重 :59.2g	10YR 5/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
69	8		69	B-2 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :6.0cm, 幅 :3.6cm, 厚 :3.0cm, 重 :55.5g	10YR 5/6	10YR 5/3	メタル度 : なし 磁着度 :2
70	9		70	A-1 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :5.1cm, 幅 :4.6cm, 厚 :2.8cm, 重 :46.2g	10YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
71	10		71	SK12	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :4.3cm, 幅 :4.3cm, 厚 :2.7cm, 重 :38.4g	10YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
72	11		72	A-1 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :4.8cm, 幅 :3.7cm, 厚 :2.1cm, 重 :40.5g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
73	12		73	A-1 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :3.0cm, 幅 :5.2cm, 厚 :1.6cm, 重 :25.1g	7.5YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :3
74	13		74	P16	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :3.9cm, 幅 :3.9cm, 厚 :1.2cm, 重 :17.8g	10YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
75	14		75	B-2 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :3.0cm, 幅 :3.5cm, 厚 :2.9cm, 重 :26.3g	10YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
76	38		76	A-2 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :6.4cm, 幅 :6.7cm, 厚 :3.1cm, 重 :120.3g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
77	39		77	B-1 包含層	梅形鍛冶津 (含鉄)		長 :4.3cm, 幅 :7.0cm, 厚 :2.4cm, 重 :70.8g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
	15			B-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.3cm, 幅 :2.7cm, 厚 :1.8cm, 重 :12.7g	10YR 5/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
	16			SD01	鍛冶津 (含鉄)		長 :5.2cm, 幅 :4.4cm, 厚 :1.3cm, 重 :6.6g	10YR 7/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
	17			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.8cm, 幅 :2.7cm, 厚 :2.3cm, 重 :16.1g	10YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	18			B-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :1.8cm, 幅 :1.7cm, 厚 :1.7cm, 重 :7.3g	10YR 8/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	19			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.4cm, 幅 :2.3cm, 厚 :1.2cm, 重 :6.8g	10YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	20			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.8cm, 幅 :1.7cm, 厚 :1.6cm, 重 :10.6g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	21			B-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :1.7cm, 幅 :1.5cm, 厚 :1.3cm, 重 :4.7g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	22			B-2 包含層	鍛冶津 (破片 13 点)		重 :14.2g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :0
	23			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.8cm, 幅 :2.8cm, 厚 :2.3cm, 重 :14.8g	2.5YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
	24			A-3 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.0cm, 幅 :3.6cm, 厚 :3.0cm, 重 :39.0g	10YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :4
	25			B-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.6cm, 幅 :2.0cm, 厚 :1.7cm, 重 :15.0g	10YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :3
	26			A-3 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.1cm, 幅 :3.8cm, 厚 :1.9cm, 重 :17.8g	7.5YR 4/5		メタル度 : なし 磁着度 :2
	27			P7	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.0cm, 幅 :1.3cm, 厚 :1.3cm, 重 :3.8g	10YR 5/4		メタル度 :1 磁着度 :2
	28			A-3 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.6cm, 幅 :2.8cm, 厚 :1.7cm, 重 :16.6g	7.5YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :1
	29			SD06	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.6cm, 幅 :2.3cm, 厚 :2.3cm, 重 :18.9g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	30			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.8cm, 幅 :3.3cm, 厚 :2.2cm, 重 :33.9g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	31			A-1 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.4cm, 幅 :2.6cm, 厚 :2.1cm, 重 :16.8g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	32			カクラン紙 6	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.2cm, 幅 :2.7cm, 厚 :1.9cm, 重 :21.7g	7.5YR 4/4	5YR 3/3	メタル度 : なし 磁着度 :3
	33			SD01	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.6cm, 幅 :2.6cm, 厚 :1.7cm, 重 :10.6g	10YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	34			カクラン紙 6	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.2cm, 幅 :2.6cm, 厚 :1.7cm, 重 :14.1g	10YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	35			SD01	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.9cm, 幅 :2.9cm, 厚 :1.7cm, 重 :12.3g	10YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	36			A-3 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.6cm, 幅 :1.7cm, 厚 :1.2cm, 重 :6.5g	5YR 4/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	37			B-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.0cm, 幅 :1.1cm, 厚 :0.8cm, 重 :1.8g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	40			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.4cm, 幅 :3.2cm, 厚 :2.3cm, 重 :26.7g	5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	41			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :5.2cm, 幅 :4.1cm, 厚 :1.8cm, 重 :24.1g	7.5YR 4/6	7.5YR 4/4	メタル度 : なし 磁着度 :1
	42			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.9cm, 幅 :3.4cm, 厚 :3.1cm, 重 :55.9g	7.5YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	43			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :5.4cm, 幅 :2.7cm, 厚 :2.1cm, 重 :34.6g	7.5YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :3
	44			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.9cm, 幅 :2.6cm, 厚 :1.9cm, 重 :12.3g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	45			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.8cm, 幅 :2.5cm, 厚 :1.7cm, 重 :16.9g	7.5YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	46			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.8cm, 幅 :3.7cm, 厚 :1.5cm, 重 :20.2g	5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	47			SK02	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.8cm, 幅 :3.1cm, 厚 :1.5cm, 重 :19.1g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	48			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :4.2cm, 幅 :2.7cm, 厚 :2.1cm, 重 :31.0g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	49			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.3cm, 幅 :3.3cm, 厚 :2.8cm, 重 :27.3g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
	50			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.0cm, 幅 :2.0cm, 厚 :1.5cm, 重 :10.8g	7.5YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :3
	51			SK02	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.4cm, 幅 :2.0cm, 厚 :1.9cm, 重 :6.8g	5YR 3/4		メタル度 : なし 磁着度 :2
	52			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.9cm, 幅 :1.9cm, 厚 :1.2cm, 重 :6.3g	10YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	53			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.5cm, 幅 :2.4cm, 厚 :1.3cm, 重 :8.9g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :1
	54			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.4cm, 幅 :2.0cm, 厚 :1.7cm, 重 :8.5g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	55			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.1cm, 幅 :1.9cm, 厚 :1.6cm, 重 :6.7g	7.5YR 5/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	56			SK02	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.3cm, 幅 :2.7cm, 厚 :1.6cm, 重 :16.6g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :3
	57			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :2.9cm, 幅 :1.7cm, 厚 :1.3cm, 重 :5.2g	7.5YR 5/8		メタル度 : なし 磁着度 :2
	58			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :1.7cm, 幅 :1.7cm, 厚 :1.5cm, 重 :6.0g	7.5YR 4/4		メタル度 : なし 磁着度 :1
	59			A-2 包含層	鍛冶津 (含鉄)		長 :1.8cm, 幅 :1.5cm, 厚 :1.5cm, 重 :4.2g	7.5YR 4/6		メタル度 : なし 磁着度 :2
	60			SK01	鍛冶津 (含鉄)		長 :3.0cm, 幅 :2.5cm, 厚 :1.1cm, 重 :4.6g	7.5YR 6/8		メタル度 : なし 磁着度 :2

実測	整理	図	番号	出土位置	分類	器形	寸法 / 残率	表面色調	断面色調	備考
	61			SK01	鍛冶滓（含鉄）		長:2.6cm, 幅:2.1cm, 厚:1.5cm, 重:9.9g	7.5YR 6/8		メタル度：なし 磁着度：1
	62			SK02	鍛冶滓（含鉄）		長:2.6cm, 幅:2.2cm, 厚:1.6cm, 重:7.2g	7.5YR 6/8		メタル度：なし 磁着度：1
	63			A-2 包含層	鍛冶滓（含鉄）		長:2.0cm, 幅:1.1cm, 厚:0.9cm, 重:1.5g	7.5YR 5/6	5YR 3/6	メタル度：なし 磁着度：1
	64			A-2 包含層	鍛冶滓（含鉄）		長:3.5cm, 幅:1.2cm, 厚:0.9cm, 重:4.3g	7.5YR 5/8		メタル度：なし 磁着度：2
	65			SK01	鍛冶滓（含鉄）		長:4.5cm, 幅:1.5cm, 厚:1.4cm, 重:7.3g	7.5YR 5/8		メタル度：なし 磁着度：2
	66			SK01	鍛冶滓（含鉄）		長:2.6cm, 幅:2.1cm, 厚:1.2cm, 重:6.4g	7.5YR 5/8		メタル度：なし 磁着度：2
	67			SK01	鍛冶滓（含鉄）		長:1.7cm, 幅:1.4cm, 厚:1.3cm, 重:2.8g	7.5YR 5/8		メタル度：なし 磁着度：1
	68			SK01	鍛冶滓（含鉄）		長:2.2cm, 幅:0.7cm, 厚:0.7cm, 重:1.1g	7.5YR 5/8		メタル度：なし 磁着度：1

第3節　まとめ

「本折城跡」は加賀国本折村を本貫地とする本折氏の城館と考えられている遺跡である。ここでいう「本折村」は中世の本折村であり、現在の「本折町」とは直接関係がない。近世に小松町が成立する以前は、おおよそ現在の九龍橋川以南、石橋川以北が「本折」と呼ばれた領域だったとされる。

埋蔵文化財包蔵地として遺跡地図に登録されているものの、実際のところ、本折城の所在については有効な情報がない。縄張りを示す資料も残っておらず、地割りにも城跡を窺わせる痕跡はない。加えて、本折氏に関する記録も極めて少ない。インターネットサイトを検索してみると、城郭愛好家の間では本折本光寺の位置が主郭跡ではないかとする情報があるようだが、口伝か文献かといった根拠となる情報源は特に示されていない。現在のように宅地化される以前は、本光寺の敷地は周囲より高かったというが、堀や土塁のような防御施設の跡らしい情報が伴わない。

今回の発掘調査で出土した陶磁器は、断片的ではあるものの、瀬戸・美濃の口縁部の特徴から概ね15世紀後半～16世紀前半に比定できるものと考えられ、富樫氏内部での守護職争い（いわゆる加賀両流相論）に伴い本折但馬入道父子の軍勢が京都から加賀に攻め入った嘉吉元(1441)年から、本折氏が加賀で活動した時期にだいたい合うと考えてよいだろう。京都系の土師器や輸入陶磁器である青磁も出土するなど、組成の面でも本折氏に関連する可能性は高い。

遺構に関しては、調査区北半の1号溝[SD01]や3号溝[SD03]は何らかの区画溝のようだと推定できるが、堀と呼べるような防御的機能を果たしうる大きな溝ではなく、城跡に直接関係するようなものではないようだ。出土遺物から遺構の年代を絞り込むことは難しいが、SK01やSK02といった大型土坑と包含層からの出土が多いことから、今調査区を含む周辺の整地された時期は15世紀後半であり、本折城はこの時期に整備されたと思われる。

調査区南半の小さな溝に関しても区画溝と考えられるが、同じ時期のものかは不明である。ただ、区画の方位は北半と南半で少しずれており、異なる時期の可能性があるが、今回の調査だけでは両者の区画溝の関係について言及することはできない。

調査区の南半では、小さな区画溝を覆い隠すように畑の畝立ての跡が認められ、溝の区画とも不一致であり、両者に相関関係はないと考えられる。出土遺物は16世紀後半のものは確認されず、耕地化されたのはこの頃以降と考えてよいだろう。

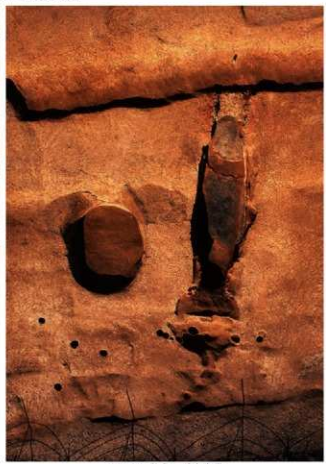
参考文献

新修小松市史編集委員会 編 (2010)『こまつの歴史』新修小松市史10 , p46-47., 小松市
橋本 澄夫 ほか 編 (2002)『ふるさと石川歴史館』, p144-145., 北國新聞社
日置 謙 (1923)『石川県能美郡誌』能美郡役所 , p642-643. p646. , 石川県能美郡

遺跡遠景（平成20年12月撮影）

A区　垂直全景

E－Ⅰ・E－Ⅱ区　垂直全景



SK01・4号窯　垂直全景

4－Ⅱ号窯 2 次床　全景

4－Ⅱ号窯 1 次床　全景

4－Ⅰ号窯 2 次床　嵩上げ部分

4－Ⅰ号窯 1 次床　全景

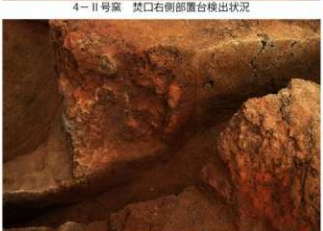
4－Ⅱ号窯　天井崩壊土検出状況

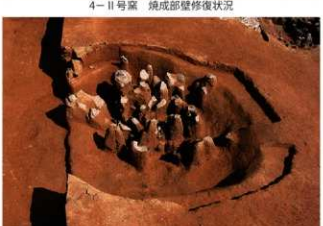
4－Ⅱ号窯　焼成部床面検出状況

4－Ⅱ号窯　焚口左側部検出状況

4－Ⅱ号窯　焚口右側部置台検出状況

4－Ⅱ号窯　焼成部壁修復状況


4－Ⅱ号窯　燃焼部壁修復状況（EPc－c′断面）


SK01　遺物出土状況

A 区灰原　遺物出土状況

5 号窯（左）・6 号窯（右）　周辺全景

5 号窯　全景

5 号窯　燃焼部～焼成部壁検出状況

5 号窯　焼成部口検出状況

5号窯　焼成部口付近断ち割り状況（EPd－d′断面）

5号窯　天井残存状況（SPF－F′断面）

E－Ⅰ区　土器集中検出状況（北から）

E－Ⅰ区　灰原検出状況

6号窯　燃焼部～焼成部壁検出状況

6号窯　焼成部口検出状況

6号窯　全景

6 号窯　炭化材①（左）・炭化材②（右）検出状況

6 号窯　燃焼部床面断ち割り状況

6 号窯　前庭部右側部検出状況（ステップ状遺構）

SK05　遺物出土状況（東から）

13 号窯　窯壁検出状況（EPd－d′断面から奥）

13 号窯　舟底状ピット完掘状況

13 号窯　全景

石垣全景　南西から

調査区全景　北から

石垣近景（西側）　南東から

石垣近景（東側）　南から

堀掘削作業　北西から

石垣検出作業　南西から

石垣検出状況　南西から

石垣検出状況近影（西側）　南西から

石垣検出状況（東側）　南西から

崩落ぐり石除去後（西側）　南西から

崩落ぐり石除去後　北西から

ぐり石の状況（西－１）　北から

ぐり石の状況（西－２）　北から

ぐり石の状況（西－３）　南から

崩落ぐり石除去後（東側）　南から

ぐり石の状況（東－１）　北から

ぐり石の状況（東－２）　北から

ぐり石の状況（東－３）　北から

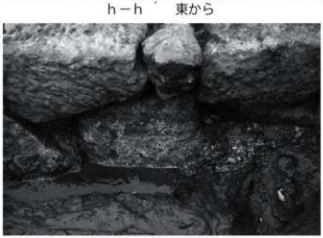
石垣背面の様子①　北から

石垣背面の様子②　北から

g－g′（石垣背面）　西から

h－h′　東から

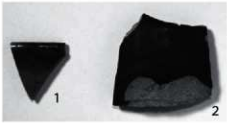
j－j′　西から


石垣刻印近影①　南西から

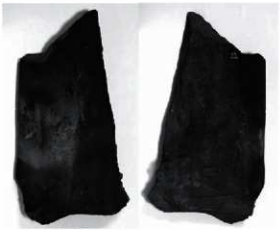
石垣刻印近影②　南西から

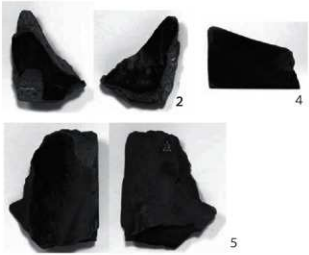
調査区完掘　南から

調査区完掘　南西から


1
2

①




2
4
5
②

1

3

7

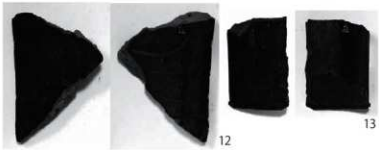
6

8

9

10

11


12

13

14

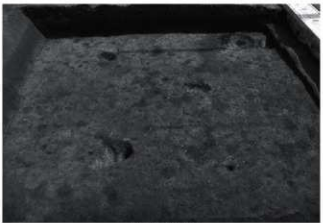
15

22

20

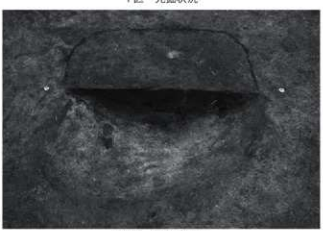
23

26

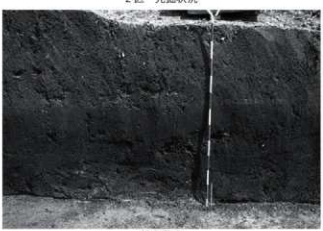


1区　完掘状況

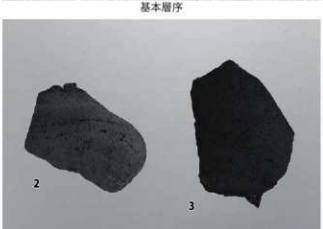
2区　完掘状況

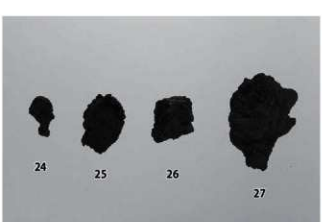


SK16　セクション

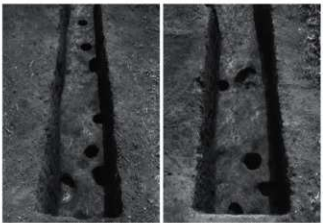


基本層序





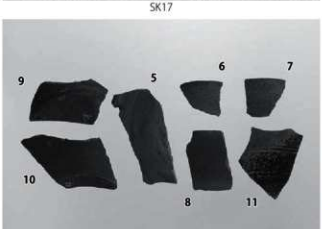
B・C・D区　完掘状況

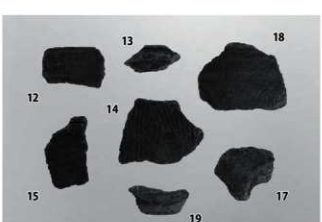


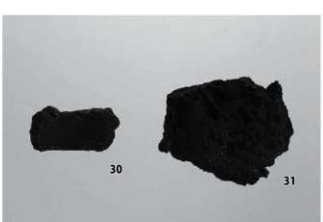
A区　完掘状況（左：A1区、右：A2区）

SK17

SK18





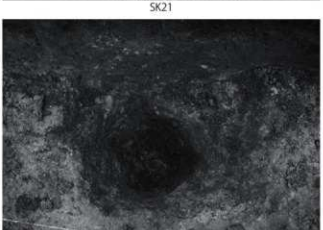


SK19

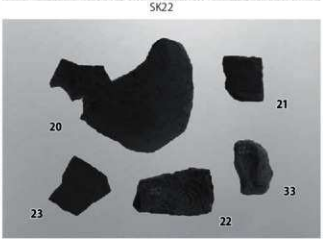
SK20

SK21

SK22



P27



調査区北半 完掘状況（東から）

調査区北半拡張部 完掘状況（南から）

調査区南半 完掘状況（東から）

調査区南半 完掘状況（南から）

作業状況

SD01 セクション

SD02 セクション

SD03 セクション

SD04 セクション

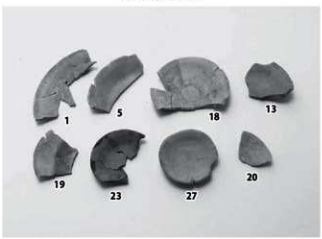
SK01 セクション

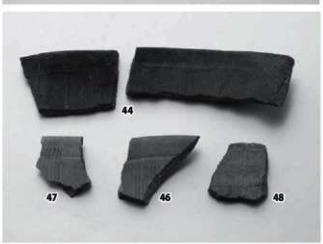
SK02 セクション

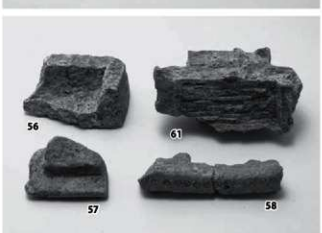
SK03 セクション

SK06 セクション

SK07 セクション







報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 11
書　名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XI
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡群・小松城跡・薬師遺跡・本折城跡
巻　次	
編・著者名	宮田 明・横幕 真・川畑 謙二
編集機関	石川県小松市教育委員会
所在地	〒923-8650　石川県小松市小馬出町 91 番地　TEL (0761) 22-4111 (代)
発行年月日	西暦 2015 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
二ツ梨 豆岡向山	石川県小松市 二ツ梨町	17203	03014	36° 19′ 53″	136° 25′ 48″	2005. 7.21 ～ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ～ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ～ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ～ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ～ 2009.12.11	600	
薬　師	石川県小松市 矢崎町	17203	03138	36° 22′ 09″	136° 26′ 09″	2012. 4.10 ～ 2012. 4.17	44	個人住宅
				36° 22′ 10″	136° 26′ 09″	2012. 8.20 ～ 2012.10. 1	172	個人住宅
				36° 22′ 03″	136° 26′ 04″	2013. 2.14 ～ 2013. 2.15	50	個人住宅
小松城	石川県小松市 丸の内町二丁目	17203	03156	36° 26′ 36″	136° 24′ 31″	2013. 5.11 ～ 2013. 6. 5	160	個人住宅
本折城	石川県小松市 大和町・白山町	17203	03151	36° 23′ 43″	136° 27′ 01″	2013. 7.11 ～ 2013. 8.30	275	個人住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯跡	平安	須恵器窯跡 5、土坑 8、 土師器焼成坑 4、灰原		遺構編
要約	9 世紀～ 10 世紀前半の須恵器窯跡 5 基を中心とする調査。すべての窯で修復や改造の痕跡が認められた。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
薬　師	集落	古墳～中世	土坑 6	須恵器、土師器、中世陶器（珠洲）、鍛冶滓、粘土塊、鉄製品	
要約	9 ～ 11 次の調査。9・10 次では谷部に近接する区域、11 次では縁辺部における遺跡の広がりを確認した。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松城	城跡	近世	石垣、堀	燻し瓦	中土居の調査
要約	寛永大改修以後の小松城における初期石垣を検出した。				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本折城	城跡	中世	溝 6、土坑 12	土師器、陶磁器（青磁、瀬戸・美濃、加賀、越前）、石製品、鍛冶滓	
要約	溝は本折城周辺の屋敷地区画の一部か。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 XI

二ツ梨豆岡向山窯跡群・薬師遺跡・小松城跡・本折城跡

平成 27 年 3 月 31 日　発行

編集・発行　石川県小松市教育委員会
石川県小松市小馬出町 91　TEL (0761) 22-4111

印　　刷　株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32　TEL (0761) 22-7031